昭和58年１月１日号（毎月２回１日、15日発行）第26巻・第１号　通巻575号 昭和54年６月２日第三種郵便物認可

今日のソ連邦

1983
1
1.1.

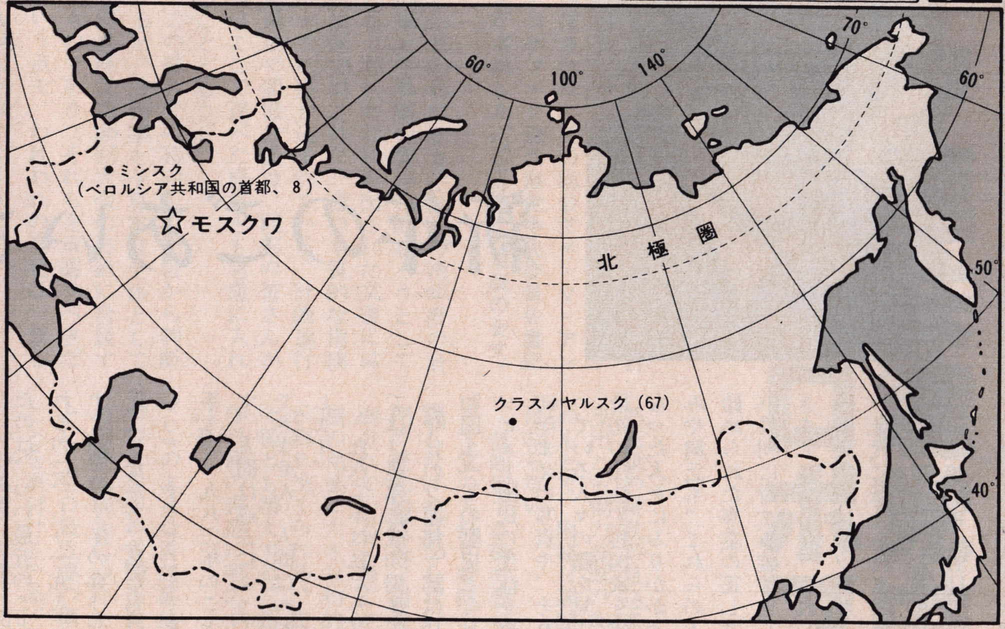


なぜソ連国民は平和をめざすか？（特集）

第1号　1983年1月1日発行

本誌の記事と写真はノーボスチ通信の提供によるものです。

今日のソ連邦

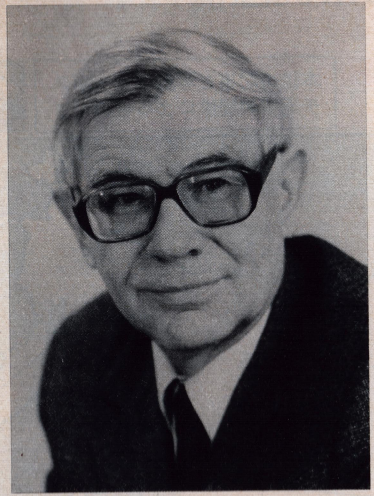


★数字は関連記事のページ

ソビエト社会主義共和国連邦大使館
東京都港区麻布台2―1―1　電話(583)4224
（本誌についてのお問合せは広報部へ）

広報部　東京都品川区東五反田3―9―13
郵便番号141　電話(03)447―3536(代表)
振替口座東京9―122358（加入者名＝ソ連大使館広報部）

発行所　(株)新時代社　東京都千代田区西神田2―7―12　電話03(263)2811　振替口座東京0―13581
（加入者名＝新時代社）



新年のごあいさつ

尊敬する「今日のソ連邦」誌の読者のみなさん！

時間は何と速く過ぎて行くことでしょう！　10月社会主義大革命65周年にさいして私がみなさんにごあいさつしたのは、つい最近のことのように思われるのに、もう一九八二年も終わりです。過ぎ行く年の喜びや悲しみを思い起こしながら、私たちは不安と期待をもって、すぐそこまで来ている新しい年——一九八三年のことを考えています。人間は過去によって生きることはできません。人間はつねに未来をめざします。

一九八二年は私たちソ連国民にとってはソ連邦結成60周年にあたりました。「今日のソ連邦」誌は15の連邦構成共和国すべての歴史と今日の姿を紹介し、ソビエト国民の生活を紹介しました。60年まえの写真や、それらの写真に写っている人々の顔を見て下さい。世界最初の社会主義国家を建設することになった人々にふりかかったどんな苦しみや窮乏も、これらの人々の意志と、始められた事業の正しさとその疑いない勝利に対する確信をくじくことはできませんでした。これらの人々の革命的楽天主義は、ソビエト国民のその後の世代に伝えられました。

ソ連は今日、経済的に発達した、社会・政治的に一致団結した大国です。わが国ではいま、一九二二年に1年間で生産しただけの工業製品を16時間で生産しています。

ソビエト国家の主要な配慮は、これまでと同様、国民の福祉の向上に向けられています。いくつかの指標を挙げるだけにしましょう。わが国には現在、人口一万人あたり一九七人の学生、38・5人の医師がいます。毎年一〇〇〇万人以上が新しい住居に移るか、住宅条件を改善しています。

もちろん、このような成功の陰には党と国民の団結があります。

つい最近、わが党とわが国、全ソビエト国民は大きな損失を受けました。現代最大の政治家、平和、自由、社会進歩、地上のすべての勤労者の幸福の理想をめざす傑出した闘士レオニード・イリイチ・ブレジネフが逝去しました。しかしソ連の内外政策は不変です。私たちは今後も、レーニンによって示された道を確固として進むでしょう。それは平和の道であり、共産主義建設の道です。一九八三年度のわが国の経済・社会発展計画を定めたソ連最高会議定例会期は、わが国の路線が不動であることの明確な例となりました。計画はわが国民の福祉のいっそうの向上を予定し、明日に対する確信と楽天主義をうたっています。

現在わが地球は困難な時代を経験しています。覇権主義的な自尊心を満足させるために他の国々に自分の条件を押しつけ、諸国民に自分たちの民族的利益のことを忘れさせ、歴史を後もどりさせようとしている勢力が存在します。この勢力は核兵器をちらつかせ、新たな軍拡競争に拍車をかけています。この勢力は〝限定核戦争〟ドクトリンを宣言し、ソ連を軍事基地の輪でとり囲み、私たちに死のミサイルの照準を合わせています。

このような複雑な条件のもとでも、わが国の政策は以前どおり明確です。

Y・アンドロポフ・ソ連共産党中央委員会書記長は言明しました——「ソビエト政権成立当初からわが国は相互主義によって答えてくれるすべての国と率直に誠実に協力していく用意のあることを一貫して表明している。社会体制の違いはこれを妨げるはずはないし、双方からの善意があるところでは実際妨げになっていない」。これはわが隣国——日本についても完全にあてはまります。

この機会を借りて本誌の読者の皆さんと、皆さんを通じてすべての日本国民に、平和と幸福とご無事を希望させていただきたいと思います。

駐日ソ連大使　V・パブロフ

一九八二年12月

ソ連共産党中央委員会総会での アンドロポフ書記長の演説

（一九八二年11月22日）

前号で既報のように、一九八二年11月22日、ソ連共産党中央委員会総会が開催された。この総会でY・V・アンドロポフ・ソ連共産党中央委員会書記長が演説した。以下はその演説の全文。

われわれは5カ年計画の次年度の計画案と予算案の審議を終わろうとしている。われわれに提出された文書には、政治局で出された一連の本質的な指摘がすでに盛り込まれている。計画遂行の過程で閣僚会議は、同志の皆さんが本日ここで述べた提案をも考慮に入れることと思う。

この総会での諸同志の発言から判断すると、計画案と予算案は全体としてソ連共産党第26回大会の方針に合致するものであり、それらを承認すべきだという点で、われわれの意見は一致しているようだ。

計画案の特徴は何か？　経済発展のテンポを速め、国民所得の増加分の絶対額を増やし、工業生産高と農業生産高、小売商品売上高を増やすことが予定されている。国民経済の効率を高める活動の継続が見込まれており、物的支出と労働力資源の比較的小幅な増大のもとで、困難な課題を遂行しなければならない。

計画案では勤労者の福祉の向上をめざす党の方針が維持されている点を強調しなければならない。Bグループ部門の優先的成長、消費物資の増産が計画されている。農工コンプレクスの一層の発展に大きな物的資源と財政資源が割り当てられる。住民の実質所得は今後とも増大する。住宅建設量も5カ年計画の課題に照応するものとなっている。

このような計画案は、ソビエト人について、その労働条件と生活条件、その精神的成長についての配慮が、依然として党の最重要の綱領的方針であることを裏付けている。

いつもそうだが、防衛の必要は十分に考慮されている。政治局は陸海軍に必要なすべてのものを与えることを、特に現下の国際情勢のもとでは、必須の仕事と考えてきたし、今も考えている。

予算案は国民経済と社会・文化の発展の財源を確保するものである。今回の党中央委総会は、第11次5カ年計画の実現をめざす闘争の重要段階——その第3年度、言うなればその核心となる年の直前に開かれている。少なからぬ仕事がなされたが、前途には困難なきつい仕事が控えている。

5カ年計画の最初の2年間に一連の最重要指標について計画課題が未遂行に終わったという事実に、声を大にして皆さんの注意を喚起したい。これは、当然ながら、われわれが本日審議している草案にも影響を及ぼしている。

中央委員会のメンバーは、レオニード・イリイチ・ブレジネフの最後の諸発言、経済発展の諸問題についての彼の中央委政治局あての覚書を覚えている。彼は次のように問題を提起した。党の数次にわたる大会や中央委総会でわれわれは科学的に根拠づけられた経済政策を作成し、生産の効率向上、その集約化の方針をとった。だが、われわれの経済をこの軌道に移し、効率をめざす方向へと転換させる仕事は、まだ相変わらずのろのろと実施されている。

経済の効率の主要指標——労働生産性の上昇テンポは、われわれを満足させることができない。原料部門と加工部門の発展がかみ合わないという問題が、依然として残っている。単位生産物あたりの材料消費量も、実質上、下がっていない。

従来と同様に計画は過大な支出と生産コストという代価を払って遂行されている。経済は経済的であらねばならぬというレオニード・イリイチの名文句を好んで引用しながら、実際にはこの課題の解決のためにほとんど何もしていないといった経営指導者も、まだ少なくない。

どうやら慣性力が、古い習慣が相変わらず作用しているようだ。恐らく一部の人々は、どうやってこの仕事に取り組むべきかを知らないのだ。こういった同志たちにどのような援助を与えるべきか、考える必要がある。肝心なのは、経済指導の全領域——管理、計画化、経営機構を改善する活動を促進

することである。
　良質の生産性の高い労働、イニシアチブと進取の気象を刺激するような条件――経済上、組織上の条件をつくりあげなければならない。逆に、いいかげんな仕事、無為、無責任は、働き手の物質的報酬にも、職務上の地位にも、道義的権威にも、最も直接的でとりかえしのつかぬ形ではね返るようにしなければならない。
　全国家的、全国民的利益を守る責任を強化し、官庁や地方のなわばり主義をだんこ根絶しなければならない。同一の問題についてのすべての新しい決定は、過去の決定が遂行されたか、あるいはなんらかの新しい状況が生じた場合にかぎって採択するのを通則としなければならない。党・国家・労働の規律のあらゆる侵犯に対して、もっとだんことした闘争を進めなければならない。この点でわれわれは党組織の完全な支持、すべてのソ連の人々の支持を受けるものと確信している。
　最近、合同や企業、コルホーズやソフホーズの自主性を拡大する必要があるとしきりに言われている。この問題の解決に実務的に取り組むべき時がきたと思う。この点については閣僚会議とゴスプランに任務が与えられた。ここでは慎重に行動し、必要ならば実験を行い、よく考え、兄弟諸国の経験をも考慮しなければならない。あらゆる場合に自主性の拡大を責任の増大と結びつけ、全国民の利益についての配慮と結びつけなければならない。
　われわれは国民経済の中に大きな余力をもっている。本日の諸発言でも、このことが語られていた。これらの余力は、科学・技術・先進的経験の達成を生産に広く急速に導入することの中に求めなければならない。もちろん、この問題は新しいものではない。それは党大会や中央委総会で一度ならず提起されてきた。それにもかかわらず、仕事の進展ぶりは遅々たるものだ。なぜか？
　その答えもまた、ずっと前からわかっている。新しい方法、新しい技術を導入するためには、なんらかの形で生産を再組織しなければならないが、これは計画の遂行に影響を及ぼす。生産計画が未遂行に終われば責任を問われるが、新技術の導入が不十分でも、ちょっとばかりおこごとを頂戴するのがせいぜいのところなのだから、なおさらのことだ。
　われわれが新技術と新しい労働方法の導入の仕事を本当に前進させることを望むのなら、中央経済諸機関、科学アカデミー、国家科学技術委員会、各省が単にそれを宣伝するだけにとどまらず、科学技術進歩を妨げている困難を明るみに出し、とり除くこともやるようにしなければならない。計画化の方法と物質的刺激のシステムは、科学と生産の結びつきを助長するものでなければならない。新技術導入に大胆に乗り出す者が不利な立場におかれるようなことがないようにしなければならない。
　もう一つの大きな余力は、物的資源と労働力資源の合理的利用である。一九八三年度計画は、これら資源の節約について一層高い課題を設定している。同志のみなさんの注意を喚起しておきたいのだが、いまや物的資源節約の問題は新たな目で見なければならず、「節約も結構だが節約しなくてもなんとかなるさ」といった見方をしてはならないのだ。
　いまや節約、国民の財産を大切にする態度は、われわれの計画の現実の問題となっている。そしてその解決を、まず第一にソ連ゴスプラン〔国家計画委員会〕とソ連ゴススナブ〔国家生産手段供給委員会〕、各省庁の側からの実際的措置の全体系によって保障しなければならない。すべての党委員会と党組織は大きな活動を行わなければならない。
　創造的活動、国民の財産を真に大切に扱う態度の実例を、われわれは少なからずもっている。しかし、残念ながらこの経験はしかるべく普及されていない。だが、この面では特別の支出を要しない場合が多い。ということはつまり、別のもの――イニシアチブが、放漫経営や浪費とのだんこたる闘争が、欠けているのだ。
　言うまでもなく、この課題の解決は、一人ひとりの労働者、われわれの企業、コルホーズ、ソフホーズの一人ひとりの勤労者の参加のもとで初めて可能である。彼らがこの課題を自分自身の仕事として受けいれるという状況をつくり出すよう努力しなければならない。
　全般に国民経済には機の熟した課題が数多くある。言うまでもなく、私がそれを解決する出来合いの処方をもっているわけではない。ほかならぬわれわれ全員が、党中央委員会が、この答えをこれから見つけ出さなければならない。わが国と世界の経験を総括し、最優秀の実務家や学者の知識を蓄積して、見つけ出さなければならない。一般にスローガンだけでは仕事を進展させることはできない。これらの巨大な重要課題の一つ一つを、各部門のレベルのみならず、各工場、各職区、さらに言うならば一人ひとりの労働部署のレベルでも検討するよう、党組織、経営指導者、技術要員の大きな組織者としての活動が必要だ。
　強調しておきたいのだが、これらの問題は最重要の、国にとって死活の問題である。それをうまく解決できれば、経済はさらに成長し、国民の福祉も向上するだろう。
　われわれの計画で中心的な地位を占めるのは、食料計画の実現に関連する措置である。
　中央委5月（一九八二年）総会の決の最初の数歩は、かなり困難な状況の中で踏み出さなければならなかった。今年もわれわれは天候に恵まれなかった。それだけに、農村の働き手たちの献身的な仕事ぶりを指摘するのは、なおさら重要である。そのおかげで、さらにまた農業の物質的・技術的基盤の強化のおかげで、一連の州、地方、共和国は悪くない成果をあげた。穀物の収量は昨年度より目立って増え、綿花、野菜、ブドウの作柄も悪くなかった。牛乳と卵の生産が増えた。工業企業の

副業経営も力をつけている。個人副業経営の発展についての配慮も、期待通りの成果をあげている。とはいえ、いくつかの食料品の供給の中断は相変わらずとり除かれていない。
　国の食料計画の実現が一年ですむ仕事ではないということは、もちろん、みんなが理解している。それはその通りだ。しかしわれわれは別のことをも率直に言わなければならない。食料計画の遂行を引き延ばしてはならない、と。農工コンプレクスの働き手は日ごとに努力を強め、この課題の解決に向けられる巨額の資金が今日すでに見返りをもたらし、明日にはさらに大きな見返りをもたらすよう働かなければならない。
　今後開かれる各級党委員会の総会と活動家会議、各級人民代議員ソビエトの会議で来年度計画が検討されるわけだが、政治局はこれらの会議で中央委5月（一九八二年）総会の決定の実現状況をも審議すべきだと考える。経済のこの重要部署でのすべての実践活動を、われわれは食料計画と照合して点検しなければならない。
　農業年度を立派に終え、収穫物を保存し、明年の収穫の基礎を築き、家畜の越冬を順調に行う必要性について、詳しく述べることはやめておく。これらすべては自明の理である。新しい課題を農工コンプレクス発展の基本方向との密接な結びつきの中で検討し、まさにコンプレクスが問題となっているのであって、そこでは第二義的な課題というものは存在しないということを考慮に入れて、これらの新しい課題の解決に動揺することなく移行しなければならない。
　一九八三年度計画では、消費物資の増産と品質改善に大きな注意が払われている。レオニード・イリイチはこれを特に重視していた。消費物資の生産を増やすだけでなく、その品質を大幅に高めることが課題である。これは軽工業や地方工業ばかりでなく、重工業と防衛産業の企業にも関わりをもつ。
　バイバコフ同志が全く正しく述べたように、地方の党機関とソビエト機関は消費物資の生産に直接に参加しなければならない。たしかに、一連のありふれた商品の生産に関する問題がソ連ゴスプランで決められかねないという事態を正常なものと認めることはできない。地方の諸機関がこの配慮を引き受け、その解決に完全に責任を持つことが必要だ。
　次に、基幹工業部門の発展の若干の重要問題について少し詳しく述べたい。なによりもまず、燃料エネルギー・コンプレクスの一層の発展について述べたい。一九八三年度に見込まれている第一次エネルギー資源の標準燃料換算約四一〇〇万tの増産は、十分に可能だ。これは、全エネルギー体系の間断のない、リズミカルな作業の確保を可能とする。
　石炭、天然ガス、石油、石油製品、熱エネルギー、電力を合理的に利用することが非常に重要だ。このことは、もちろん、すべての部門における一定の改造、なによりもまず省エネルギー機器と技術の広範な導入、ノルマの改善、節約闘争での物質的、精神的刺激の利用、使いすぎ、ノルマやリミットの超過に対するより厳格な責任追求を求めている。
　ソ連最高会議では、諸省の作業を監督し、あらゆるクラスの経営指導者に対し資源のむだ使いの責任を問うことができる常設のエネルギー委員会を連邦会議と民族会議に組織することについて提案することが予定されている。
　企業におけるこの仕事の組織を監督するために地方、州、共和国につくられた委員会の活動を活発にしなければならない。
　政治局は、運輸業の事態を心配している。鉄道省は、燃料、木材、その他の貨物の輸送において国民経済の必要を依然として保障していない。党中央委員会には、地方のソビエト機関や経営機関からこのことについての大量の警報が入ってきている。このことについては、今日のこの党中央委員会総会でも述べられた。
　鉄道の作業指数は、残念ながら、政府が鉄道省に大きな援助を与えているのにもかかわらず、年々悪化している。同省への基本投資額は一九七五年に比べて43％増大し、幹線用ＤＬとＥＬの台数も23％ふえた。党中央委員会と政府は鉄道従業員の社会的条件の改善、運輸業の経営機構の改善に関する一連の決定を採択した。しかし、採択した諸措置はさしあたりしかるべき効果をあげていない。
　鉄道省では、機関車の修理と運用の組織、運行の組織が低レベルで行われている。どうやら、同省の指導部だけでなく、ソ連閣僚会議と党中央委員会も、この総会で述べられた意見から重大な結論を出さねばならないようだ。
　鉄鋼業の企業の操業の乱れがひんぱんになった。昨年も、今年も、この部門は計画課題を遂行していない。国民経済への鋼材供給が計画を数百万t下回った。この部門における事態の責任は、まず第一に鉄鋼業省が負わねばならない。もちろん、客観的な困難もある。固定フォンドのかなりの部分が改修や近代化を必要としている。ゴスプラン、ゴススナブ、機械製作関連諸省の側からの鉄鋼業省に対する大きな援助が必要だ。
　われわれは、経済の発展、新しい生産設備の建設、住宅建設、文化・生活施設の建設に巨額の資金を向けている。これらの資金の効果的な利用は、きわめて重要な課題である。と同時に、基本建設の分野でも、少なからぬ問題が残されている。多数の施設への力と資金の分散に対しますますだんことしてたたかうことが必要だ。改修と近代化の比率を増やし、新しい建設工事の数を減らすことが必要だ。建設業そのものの組織も、多くの点でわれわれを満足させていない。この部門に存在する欠陥は年々、生産設備の運開計画の未遂行をもたらしている。一連の建設関連諸省は、これらの諸省の物質的・技術的基盤の強化のために政府がかなりの資金や機械・設備を向けているのにかかわらず、建設・組立作業の量を減らし

ている。多くの場合、建設・組立作業の質は低いままである。建設諸組織の機動性も不十分である。これらの欠陥の排除をめざして少なからぬ決定が採択された。これらの決定を遂行することが必要だ。基本建設における秩序の回復——これは、基本的な国民経済課題の一つである。

本日は経済の他の領域や部門については触れない。これらの部門のすべてがわれわれの社会にとって、わが国民にとって重要なものである。すべての省庁がもっとも注意深いやり方で事態を念入りに分析し、現存する問題の解決策を立て、実現することが必要だ。これらの省庁が自分たちの活動を評価するにあたって適用すべき主要な基準——それは、不断に増大する社会的欲求をその部門がどれだけ満足させているかというその度合いである。

経済の不断の高揚、国民福祉の増進——これは、ソ連の人々に対するわれわれの義務でもあり、われわれの国際的義務でもある。このように問題を提起するにあたって、党は、われわれが世界革命プロセスへの主要な影響をその経済政策によって与えているというレーニンの洞察力のある指摘を指針としている。

レオニード・イリイチ・ブレジネフの逝去は、国際問題におけるソ連共産党とソビエト国家の今後の方針に関して少なからぬ推測を外国で引き起こした。近年、ありとあらゆる不吉な意図をソ連になすりつけ、われわれの政策をあれこれの国家の安全を脅かす侵略的な政策として描こうとする試みがどんなにたくさん行われてきたことだろうか。ところが今度は、この政策が変わったら困るといって気をもんでいる。この政策を維持することが国際舞台における平和と静穏の重要な前提だと見られているのだ。

全責任をもって言っておかなければならないが、ソ連の対外政策は、わが党の第24回、第25回、第26回大会の決定で定められた政策であったし、いまもそうである。恒久平和の保障、独立と社会進歩に対する諸国民の権利の擁護は、われわれの対外政策の不変の目的である。これらの目的をめざす闘争の中で党と国家の指導部は原則的に、首尾一貫して、熟慮して行動するであろう。

われわれは、今日の国際情勢を特徴づけている困難と緊張は克服できるし、また克服しなければならない、と考えている。もしその将来を一枚のカードに賭けることを望まないのなら、人類はいつまでも軍拡競争や戦争に甘んじることはできない。ソ連共産党は、思想上の論争が国際間や諸国民間の対決に変わることに、武器やそれに頼る態勢が社会制度の可能性の尺度になることに反対である。

帝国主義の侵略的な策動は、われわれが社会主義兄弟諸国とともに防衛力をしかるべきレベルに維持するように配慮すること、しかも真剣に配慮することを余儀なくさせている。しかし、レオニード・イリイチが一度ならず強調したように、軍事的競争は、われわれの選択ではない。武器のない世界——これが社会主義の理想である。

社会主義共同体の強化は今後とも、わが党の最重要な関心事となろう。統一の中に、われわれの力があり、もっともきびしい試練においてさえ終極的に成功を収める保証がある。

社会主義諸国の共同体の全計画は、平和と創造の計画である。われわれは、兄弟諸国の同志的協力と社会主義的相互援助が、科学技術、生産、運輸、エネルギーその他の課題の共同の解決をも含めて、より深く、より効果的になるよう努力している。この面ではいま今後の共同措置が策定されている。

ソ連共産党とソビエト国家はすべての社会主義国との関係の発展と改善を心から望んでいる。必要な信頼や相互理解がさまざまな理由から依然として存在していないところでも、相互の善意、正当な利益の相互尊重、社会主義と平和の利益に対する共通の配慮が正しい解決を教えてくれるはずだ。

このことは、われわれの偉大な隣国、中華人民共和国にもあてはまる。レオニード・イリイチ・ブレジネフがタシケントやバクーでの演説で定式化した理念、良識を重視し、偏見の惰性を克服する必要性を重視した彼の態度は、わが党全体の信念、まっすぐ前を見つめていこうとするわが党全体の意欲を表わしている。われわれはこれに対する中国側からのあらゆる前向きの反応をきわめて注意深く受けとめている。

非同盟運動をおこした国家グループが国際生活でもつ意義が高まっている。これらの国の多くとソ連は多面的な友好関係を保っており、これは双方の利益になり、世界のより大きな安定を促進している。その手本がソ連とインドの関係だ。植民地の抑圧から解放された国々や、自らの独立を守りぬこうとしている諸国民との連帯は、ソ連の対外政策の基本原則の一つであったし、今もそれは変わらない。ソビエト政権成立当初からわが国は相互主義によって答えてくれるすべての国と率直に誠実に協力していく用意のあることを一貫して表明している。社会体制の違いはこれを妨げるはずはないし、双方からの善意があるところでは実際妨げになっていない。これを疑問の余地なく証明しているのが、ソ連と多くの西欧諸国との平和協力の発展に見られる著しい進展である。

われわれの深い確信によれば、デタントの旗印のもとに経過した七〇年代は、今日一部の帝国主義的活動家が主張しているように、人類の困難な歴史上の偶然のエピソードなどではなかった。そうではない。デタント政策は過ぎ去ってしまった一段階では決してない。この政策には未来がある。

平和とデタントの維持には万人が一様に関心を寄せている。だから、関係正常化に応じてもいいが、そのためにはソ連が実にさまざまな分野で予めなんらかの譲歩を行うことが必要だというような声明は、少なくとも不真面目に聞こえる。われわれはそのようなことには応じない。それに、実際のところ、われわれには破棄するものなど一

つもない。われわれは誰に対しても制裁を行ったことはないし、調印済みの条約や協定を破棄したこともないし、開始された交渉をぶちこわしたこともない。もう一度強調しておきたい。ソ連は協定には賛成だが、その探求は相互主義と平等を土台にしなければならない。

米国その他の西側諸国との交渉、まず第一に、軍拡競争の抑止問題に関する交渉の意義は、見解の相違を固定化することにあるのではないとわれわれは考えている。われわれにとって交渉は、すべての当事者にとって有益な成果をあげるためにさまざまな国の努力を結集する方法なのである。残念ながらしばしば見られることだが、交渉のための交渉を行っても、問題はひとりでになくなるわけではない。われわれはきわめて複雑な問題の解決の健全な、当事者にとって受けいれ可能な基盤の探求を主張している。いうまでもなくこの問題とは、何よりもまず、核軍備ならびに通常軍備の競争を抑止する問題である。しかしわれわれから一方的な軍縮を期待するようなことは誰にもさせない。われわれは幼稚な人間ではない。

われわれは西側の一方的な軍縮を要求してはいない。われわれは平等を、双方の利益の考慮を、誠実な協定を主張しているのだ。われわれはこれに応じる用意がある。

とりわけ、ソ米両国の保有している戦略核兵器について言えば、ソ連は、周知の通り、将来の協定への第一歩として双方がそれぞれの兵器庫を〝凍結〟し、それによってその相互削減交渉を継続するためのより好適な条件を作りだすようにすることに同意している。

そもそもソ連は、力や武器がすべてを決定しており、今後もつねに決定するかのように人々に吹きこもうとしている連中の見解を否定している。現在、歴史の舞台の前面にはこれまでになく諸国民が登場している。彼らは発言権を獲得し、これを抑えることは誰にもできない。彼らは積極的に、明確な目的をもって行動することによって核戦争の脅威を一掃し、平和を守る、すなわち、われわれの地上の生命を守る力をもっている。そしてソ連共産党とソビエト国家は、そうなるように全力を傾けていくつもりだ。

ソ連共産党第26回大会は、第11次5カ年計画期と八〇年代全体の党の長期戦略を具体化した。この戦略は、ソ連国民の暮らしを年ごとによくし、その労働がますます重みのある成果をもたらし、われわれの社会主義体制がますます十分にその人間的な本質とその創造力を発揮するようにすることをめざしている。

経済・社会の進歩のあらゆる分野で、大きな、そしてかなりの程度まで新しい課題が提起されている。いうまでもなく、その成功は、多くの要因、何よりもまず、中央委員会の明確な目的をもった集団活動や、党機関、国家機関、すべての労働集団の活動を最重要の方向に集中するわれわれと皆さんの能力のいかんにかかっている。

われわれの手元にあるすべての手段を動員し、一九八三年度の計画課題の広範な宣伝と解説を展開する必要がある。それは、各企業、各労働集団の課題に合わせて具体化されなければならない。それが第一の条件だ。

第二に、政治的に成熟し、その道に精通し、創意に富み、組織能力と現代ではこれなくして首尾よく最新の生産を指導できない新しいものをかぎとる感覚をもった人たちが決定的な部署に立つように要員を正しく配慮する必要がある。

第三に、勤労大衆自身の積極性を高める必要がある。これは、今日、党の各級委員会、ソビエト機関、労組機関、コムソモール機関の最も重要な課題である。周知の通り、党の理念、計画、アピールは大衆をとらえた時、物質的な力となる。勤労者一人ひとりが、計画遂行が自分の労働による貢献に左右されることを理解し、われわれがよく働けば働くほど暮らしがよくなる、という単純な真実をすべての人がよく理解することが、現在特に重要であり、必要である。レーニンが強調した通り、われわれの計画、われわれの生産課題の規模が大きくなればなるほど、「それだけ多くの人間がいなければならず、何百万人もの人間をこれらの課題の解決に自主的に参加させる必要がある」

これは、最も広い意味で社会主義的民主主義の一層の発展、すなわち、勤労大衆がより一層積極的に国家と社会の管理に参加することが不可欠であることを意味している。そして、もちろん、働き手の必要やその労働・生活条件について配慮することがいかに重要であるかをここで証明する必要はないだろう。

われわれは党と国家の生活の中で確立されたレーニンの規範と原則を常に、一貫して忠実に守っていくつもりだ。

われわれの今後の課題は非常に大きく、複雑だ。しかしわが党にはそれを解決する力がある。

レオニード・イリイチ・ブレジネフとの別れの日々は、わが共産党とソ連国民が不可分であり、両者が、レーニンの道を着実に、一貫して前進するという一つの望みに燃えていることを改めて全世界に示した。

ソ連の人々は、マルクス・レーニン主義思想への献身的忠誠、自分自身の党に対するきわめて深い尊敬と愛情、組織性、自制心、自己の力への自信を改めて示した。

われわれは、われわれの多民族社会主義国家の歴史上の重要な出来事——ソビエト社会主義共和国連邦結成60周年を迎えようとしている。現在、ソ連の人々は、ソ連建国の源流に立ち、今もわが国の国民を共産主義建設の道に沿って賢明に導いている共産党に最良の思いを寄せている。

党と国民の統一を強め、偉大なレーニンの遺訓に確実に従うこと——そこにわれわれの未来のすべての勝利の保証があるのだ！

特集

ソ連国民はなぜ平和をめざすか？

戦争で7人の息子を失った母親

ベロルシア駐在本誌記者　ナタリア・ブルディク
カメラ　Y・イワノフ



ベロルシア共和国ユゼフォボ村の農民アントニナ・クリンコビチ。7人の息子をすべて第2次世界大戦で失った。

目をつむると、まぶたに浮かぶ光景がある。ほこりっぽい田舎道。やせてしわの刻まれた手にひと切れのパンを持った黒装束の婦人が立っている。パンはまだ温かい。息子たちのために特別に焼いたものだ。彼女はずっと待っている。もしも曲がり角からふいに息子たちが現れたら？ そのとき母親はすぐに、腹をすかし疲れきった息子たちにパンを食べさせ、望郷の思いにやつれた息子たちを抱きしめるだろう。

もう一人の女性も目に浮かぶ。先ほどの婦人の娘で、母親と同じように小柄できゃしゃな人だ。周りを取り巻いた子供たちを、まるで守ろうとするかのように自分に引き寄せている。

彼女は言う——「戦争ほど恐ろしいものを知りません。人間はどんな悲しみにも耐えられますが、子どもの死だけは別です。私の母は息子たちが一人一人死ぬごとに、7回も死ぬほどの苦しみを味わったのです……」

ベロルシアの農婦アントニナ・クリンコビチは夫のニコライとの間に10人の子供をもうけた。7人の息子と3人の娘である。同じ村の人々は、はばかることなくクリンコビ

アントニナの娘——マリアと姉のソフィア（右）。ソフィアは今でもユゼフォボ村に住んでいる。



チ夫婦に同情した。当時の一九二〇年代は第1次世界大戦と国内戦後の経済復興期で、ベロルシアの農民にとっては困難な時代だった。しかしクリンコビチ夫婦はめげなかった。

夫のニコライは言った。「まあ、お待ち、母さん。子供たちが大きくなったら、新しい家を建てて、良い暮らしができるようになるさ」

アントニナは黙ってほほえんだ。彼女もそうなるものと信じていた。

まもなくクリンコビチ一家の住むユゼフォボ村の人々は、子だくさんのこの家庭に同情しなくなり、良い意味でうらやむようになった。それには次のような訳があった。

ベロルシアのソビエト政権樹立のために闘った長男のニコライは、共和国の首都ミンスクのある省で働くようになった。

次男のドミトリーは、コルホーズの創設期の30年代初めに、コルホーズ議長に選ばれた。

三男のヨシフは地元の新聞の編集長になった。

四男のミハイルは地質学者になり、五男のステパンは医科大学を、六男のパーベルは建設大学を卒業した。

一番下の息子のピョートル



第2次世界大戦でベロルシア解放のために戦死した兵士たちの記念碑を訪れたマリアと息子たち（この記念碑はやはり5人の息子を戦争で失った母親アナスタシア・クプリヤノワをモデルにしたもので、首都ミンスクの近くのジョジノ市にある）

は、近隣の少年たちの人気者だったが、当時のベロルシアの農村ではめったに見られない車だったトラックの運転手になった。

「驚いたこと！」と近所の人たちは喜んだ。「父親も母親も文字すらちゃんと書けないというのに、子供たちはこんなに立派な人間になったんだから……」

後を振り向きながら

「せめて一日でもあの当時に戻れるなら、今すぐ残った人生の何年かを代わりに差し出してもいいわ」と、クリンコビチ一家の末娘マリアは、ほほえみながら目をうるませて言った。「もう一度ほがらかだった頃のママを見たいし、紡ぎ台に座ってママが歌うのを聞きたい。家族全員が集まって過ごした夕べのひとときを、決して忘れないわ」

マリアは辛い思いを断ちきろうと、いろいろな思い出話をした。6番目の兄パーベルが在学中、母親や妹たちにささやかな贈り物を持ってきたことや、文字を覚えたばかりの母親が3番目の兄ヨシフの書いた新聞記事をたどたどしく読んでいたこと、家族全員で家の脇にリンゴ園を造ったこと……このリンゴ園は今でも、5月には可憐な花を咲かせ、8月には夏の熱をみんな吸いこんだような色鮮やかなリンゴを実らせて人々を喜ばせている。

「子供たちはこのリンゴ園のリンゴがとても好きですが」とマリアは静かに話す。「兄さんたちはこれを味わうことはできませんでした。植えたのが一九三八年、父親が亡くなる少し前です。それから暑い一九四一年の夏が来て……」

写真を選んでいたマリアの手が震えて、古い黄ばんだ写真があたりに散らばった。

ひざの上に一枚の写真だけが残った。その写真の中から彼女の3人の息子と3人の娘が、あどけない、ほがらかな表情でこちらを見ている。マリアはその子供たちを守るように、そっと手のひらで写真をおおった。

「最初に死んだのはパーベルでした」と彼女は静かに話し出した。「パーベルは、うちでは一番おとなしく、やさしい子でした。

ニコライ、ヨシフ、ミハイルは母に別れを告げる間もなく前線に赴きました。残った兄たちも召集令状を受けとると戦場に向かいました。私たちだけが村に残りました。

そのあとのことは、どうお話ししてよいかわかりません。いえ、できないのです……ファシストたちが村人のほとんど全員を納屋の一つに追い込んだ末、納屋に火をつけたのです。逃げようとした者は射殺されました。その一部始終を私は目撃しました。

隣の家のドムナおばさんが射殺された7人のわが子を荷馬車に積んだ時のことや、子供たちの墓の前でおばさんが涙も流さず、叫び声も上げず、うつろな目をして立っていたのを覚えています……

奴らは私たちをおびえさせようとしたのです。でも結果は逆でした。ベロルシアではすべての者が、子どもも病気の年寄りすらも占領者と闘いました。

私と母はパルチザン地帯と呼ばれたパルチザンの統制下にあった地域に逃れました。そこはヒトラー軍も侵入を恐れた所でした。

地下壕で暮らし、自分たちのできることでパルチザンを助けました。パンを焼き、洗濯をし、必要な薬品を何とかして入手しました。年老いた母は、自分だけでなく娘の命も危険にさらしていることを知っていましたが、その時私は13歳でした。それでも私たちには恐怖感はありませんでした」

3年間の占領、4年間の戦争はベロルシアに癒しがたい傷痕を残した。二二〇万人以上いたベロルシアの住民は4人に一人がこの戦争で死に、家族全員が生き残った家庭は一つとしてなかった。

ようやく生き残った者たちにも、住む所も食べるものも、着る物もなかった。ナチは、ベロルシアの二〇九の都市と地区中心地、九二〇〇の村、一万以上の企業、すべての発電所を破壊した。経済的損失は七五億ルーブルにも達した。

無からの出発

ユゼフォボ村の、生きながらえた数十人の住民も、すべて最初からやり直さなければならなかった。だいたい村そのものがなくなっていたのだ。村があった所には裸の灰色の野が広がり、数本の焼け焦げた煙突と何も囲む物のない傾いた桓根が残っているだけだ



母親のアントニナは７人の息子の追善供養の日には７個のパンを焼いて供えた。母の死後、末娘のマリア（写真）がその供養を引き継いだ。写真は左からヨシフ、ドミトリー、ステパン、ニコライ、ミハイル、ピョートル、パーベル。

った。

クリンコビチ家があった所に残っていたものは、数本のリンゴの木と、焼け焦げた家屋の骨組だった。

しばらくして戦争で負傷したドミトリー、ミハイル、ステパンが帰ってきた。

医者は3人が回復する見込みのないことを母親のアントニナに隠そうとしなかった。ドミトリーとステパンはパルチザンの長い移動生活で衰弱しきり、十分な手当てを受けられなかった傷は悪化していた。ミハイルは重傷を負っただけでなく、捕虜になっていた。彼が肺に銃弾を入れたまま、捕虜収容所から逃げ出し、イタルアの山中のパルチザン部隊に加わって戦ったと聞き、医者たちはただあきれるだけだった。

母だけが、息子たちは助かると信じていた。息子たちが帰還してからというもの、アントニナはほとんど眠らなかった。彼女は息子たちのためにパンを――粉ではなく（当時粉などなかった）、乾燥したジャガイモの皮とすりおろしたビーツを材料にして、焦士のように黒いパンを焼いた。兵士の古い鉄かぶとで（ファシストの侵攻のあとには、鍋釜さえ残らなかった）スープを煮た。息子たちの包帯を替



この畑に、かつてはクリンコビチの家も建っていた。戦争中ナチは村ごと焼き尽くし、村人はほとんど惨殺された。マリアと母アントニナを含むわずかな人が奇蹟的に助かった。現在のユゼフォボ村は新しく生まれ変わった。

夏休みを友だちとピオネール・キャンプで過ごすマリアの息子たち



えるのも、必ず自分でやり、決して他人に任せなかった。

しかし彼らは生きながらえなかった。

家を出ていったままのほかの息子たちも帰ってこなかった。

マリアは語る。

「それでも母は息子たちを待ち続けました。昼食の時も夕飯の時も必ず食事を少し残しておいて、布巾をかけるのでした。〃すぐ食べられるようにね。いつ何があるか分からないでしょう。急に帰ってきた時のためにね〃と言いながら。そして息子たちを迎えに村はずれまで行くのです。それは長い年月、死ぬ間際まで続きました」

マリアは押し黙った。私も黙った。アントニナ・クリンコビチの写真を見ながら、戦争という苦難をわが身に背負って生きた婦人たちのことを思い、子供に先立たれた母親たちのたとえようのない悲しみを思った。

未来を良いものに

「〃人間は悲しみを経て悪くなる〃と言う人もいますが」とマリアは再び話し出した。「それは違います。私たちベロルシア民族は、話しきれないほど沢山の苦難に耐えてきましたが、私たちの心は一段と善良になりました。村人たちは自分がまだ掘っ立て小屋に住んでいても、私たちが家を建てるのを手伝ってくれましたし、母も自分の持っているものはみんなに分けていました。母はとりわけ子供を愛し、よく女性にこう言っていました——〃安心して子供を産みなさい。あなた方の子供は兵士にはなりません。もう誰も戦争を許しませんから、決して……〃

こんなに沢山孫ができたことを母が知っていたら、どれほど喜んでくれたことでしょう」

マリアは、「私はもうおばあさんなんですよ」と言って、二人の子供のいる長女——スベトラナのことを話した。それからほかの5人の子供たち——大学生で〃頭がよくて美人〃のナターシャのこと、ことし中学校を卒業したセリョージャのこと、サーシャ、アンドレイ、アントニナのことなどを話した。マリアは誇らしげにこう語った。

「最近、新居に引っ越しました。子供たちは、働いている者と勉学中の者といますが、まだ皆若いし、健康です。私は6人の子供を育てた母親として、50歳で年金生活に入れる資格がもうあるのですが、

マリアの家族のホームコンサート。一家は最近この新しいフラットに引っ越してきた。



働いています。私たちは豊かだし、喜びも愛も、みな持っています。それだけに余計母のことを思い出すのです」

彼女の顔が悲しみで曇った。肉親を思い出しているのだろう。戦争中の苦しく辛い日々の思い出、わが子の将来に対する不安は、彼女の脳裏から決して消えることはないだろう。

「母親は子供の今際(いまは)のきわを見てはなりません。子供は孤児になってはいけません」とマリアは言った。

……彼女と会ってから数週間がたった。彼女の話を聞いて私の胸に残った痛みは消えない。私の仕事場の机には、中学生が使うような普通のノートが置いてある。ノートには子供の字に似た大きな筆跡でマリアの作った詩が書いてある。

ひじょうに巧い詩とは言えないだろうが、これほど胸を打つ詩を私は今まで読んだことがない。詩は過ぎ去った戦争を語り、将来の平和への願いを述べている。

過去の思い出の中で生まれたこの詩は、未来への希望で生きているのだ。



休暇でユゼフォボ村のソフィアおばさんの家に遊びに来たナターシャは、ミンスク大学の学生。都会っ子の彼女にはこんなことが面白い。



息子に薪割りを教えるマリアの夫ゲンナジー



ウラジーミル・カルポフ――有名なソ連の作家で、代表的な文芸誌の一つ「ノーブイ・ミール」の編集長。大祖国戦争（1941―45年）中、ソ連邦英雄の称号を受けた。

戦争について書き続ける理由

――作家ウラジーミル・カルポフに聞く

ソ連国民とドイツ・ファシズムとの戦争――大祖国戦争（一九四一―四五年）を描いた文学作品はソビエト文学の中で非常に豊かな層を形成しており、それなしには現代の文学過程を語れない。戦争はどんどんわれわれから遠ざかり、論理的には、戦争のテーマは時とともに少なくなってもよさそうなものだが、現実には反対で、戦争についての本の数は増えている。

なぜソ連では戦争についてこんなに多く書かれるのか？われわれが事実、平和を望み、平和について考えているなら、戦争を描写する必要があるだろうか？

本誌記者のエーラ・ワシリエワがぶつけたこの問いに、ソ連の作家ウラジーミル・カルポフが答える。カルポフはソ連の代表的な月刊文芸誌「ノーブイ・ミール」（発刊部数五二万部）の編集長でもある。



戦争の傷跡は深い……

ウラジーミル・カルポフは作家の中でも、強烈で非凡な運命をたどった点できわだった存在である。一九四四年、カルポフは司令部の任務を受け、ヒトラー軍占領下のまちに潜入し、秘密の連絡所で敵の位置が記録されたフィルムを受け取った。帰還途中、戦線を越える際に頭部に負傷したが、戦闘任務を遂行し、貴重な情報を携えて味方のところまでたどりついた。

これはカルポフの軍人としての経歴の一エピソードに過ぎない。カルポフは情報を得るために79人の敵兵を捕虜にするのに個人的に参加した。カルポフが手に入れた情報はソ連軍司令部にもたらされ、数多くの重要作戦の準備と遂行に再三影響を与えた。カルポフは数多くの戦功で勲章やメダルを授与されたが、その中にはソ連邦英雄金星章もある。

勝利の後、前線斥候員カルポフはフルンゼ記念軍事アカデミー、参謀本部高等アカデミー学院を、ついでゴーリキー記念文学大学夜間部を卒業した。25年間軍隊に勤めたあと、カルポフは大佐として親衛隊の予備役に退いた。この頃にはすでにソ連作家同盟の会員になっていたし、数冊の本も著していた。取り上げる題材はほとんどいつも軍隊ものばかりだった。

――それはつまり、あなたは永遠に戦争のテーマを追求しつづけるということですか？

「作家というものはそれぞれ、自分が背負った荷物を元手にして物を書いている。私はそう確信している。経験したこと、脳みそやハートを通り過ぎて行ったものを土台にして創作が行われるのだ。私の一生は、青年時代から42歳の壮年まで、軍隊で明け暮れた。それが私の人生の印象のワクを定めてしまっている」

――だが、人生の印象だけがテーマを決めるわけではあるまい。戦争を経験しなかった世代も戦争を描いている。一体どうしてあらゆる世代の作家が、若い世代も含めて、戦争のテーマを取り上げるのだろう？

「なぜなら戦争はわれわれの鎮まることのない痛みだからだ。われわれは二〇〇〇万人の命を失った。一都市レニングラードの九〇〇日間にわたる防衛戦だけでも、大勢のソ連人が死んだ。その数は米国が建国以来二〇〇年余りの間に行ったすべての戦争で失われた米国民の数より多いのだ。だが、残念ながら、外国ではこのことが忘れ去られようとしている。しかも若い世代は、時として、ソ連が誰の側で戦ったのか、ヒトラー側でか、反ヒトラー側でか、それさえ知らないことがあるのだ。人々がわれわれについて真実を知るなら、〝ソ連の脅威〟という神話は、茶番に変わるだろう。

私が作家として戦争を描くのは、もともと軍人だからではない。戦争を私は憎む。だから戦争を書くのだ」

――あなたご自身、多分、戦争文学を注意深く追っておられると思うが…

「もちろんだ。そして私が心配しているのは、われわれにとって神聖なテーマを扱った低級な悪書がはびこって来たことだ。このテーマは流行の、もうかるテーマになった。その気になれば戦争ものでたやすく大金もうけが出来るのだ。このことをわれわれは皆、真剣に考えねばならない。読者の戦争ものに対する興味を軽々しく利用してはならない」

――なぜ戦争のテーマは、これほど現代の読者、とりわけ若者たちを引きつけるのか？

「ここ10年、戦時中の新しい現象や事実、新しい面を明らかにする一連の立派な本が出版された。

現代の読者はまた、大祖国戦争についての良書の中に、いま彼らの心をとらえている多くの問題――真実とウソ、生と死、勝利の価値、善と悪、誠と二心、民族と歴史に対する人間の個人的責任についての答えを求めている。

だから若い世代は戦争のテーマに関心を寄せるのだ」

――西側の一部の批判家は、ソ連のあらゆるマスコミ機関はソ連人に新たな戦争への準備をさせるために動員されていると主張している。これに関連してお願いしたいのだが、最近のあるインタビューであなたは、「未来のために私は働きたい。今日の兵士や士官たちが、われわれの前に今も生活の道を指し示してくれるあの大きな試練の時代の水準にあって欲しいと思う」と語られたが、そのあなたの言葉をもっと詳しく説明してもらいたい。

「われわれが生活しているこの非常に複雑な国際情勢のもとにあって、私は元軍人として、作家として、この前の戦争でわれわれが頑張りぬくのを助けたあの道徳的、精神的な強さの手本に若者たちがなってくれるように、自分に出来ることは何でもしたいと思っている。われわれは戦争を欲しない。戦争を起こさないように全力を尽くすだろう。ソ連の文学の重要な特徴の一つは、それが内面的本質において反戦文学であり、全世界の平和と正義を目ざし、新たな世界戦争に反対する文学であり、社会主義的ヒューマニズムの思想を主張する文学であることだ。だから〝戦争について書く必要があるか？〟という問いに対する私の答えは、もちろん、イエスだ。

私にはなぜ平和が大切か？

「あなたにはなぜ平和が大切ですか？」――こういう質問で、ソ連各地のさまざまな世代、職業、経歴をもつ人たちにアンケートをした。そのうちの8人の回答を紹介しよう。



ベルゲミル・カブルベコフ
（カザフ共和国の石工）

私は人生の大半を建築の仕事に捧げて来た。私にとって平和は大切だ。なぜなら、私は性格としても争いを好まないし、職業は物を作る仕事だからだ。戦争は必ず破壊をもたらす。大祖国戦争の記録映画で都市が廃虚に変わるシーンを見たとき、胸が痛みで締めつけられた。私たち建築関係者は、人々が快適な、美しい住宅に住めるよう力と熱意を捧げているが、戦争になればすべてが廃虚と化す。

私はカザフ共和国の首都アルマアタで生活し、仕事をしている。アルマアタは数十年まえまで、ほこりっぽい曲がった横町や木造の建物がひしめく、あまり大きくない地方都市だった。いまではユニークな建築アンサンブル、広い通り、広場、噴水が訪れる人を驚かすようになった。市は年ごとに立派になって行く。私たちがその美しさを生み出しているのだ。私たちの仕事の第一の同盟者は、もちろん平和である。



イワン・プロコフィエフ
（レニングラードの生産合同キーロフ工場の労働者、ソ連平和擁護委員会委員）

16歳はすばらしい年齢だと言われているが、残念ながら私にとっては人生でいちばんつらい年だった。私が16歳のとき、戦争が始まったのだ。戦争によって私は教育の機会と父親を永久に奪われた。16歳で私は仕上げ工になり、17歳で歩兵になり、18歳で身体障害者になった……

私の子どもの頃の記憶には、悲惨なレニングラード封鎖の恐怖がこびりついている。私は何の罪もない何百人もの人々の死を見て来たから、飢えや寒さで最初に死ぬのは老人と子どもだということをよく知っている。私は運よく生き残った。だが約70万人のレニングラード市民が、ピスカリョフ記念墓地に共同埋葬された。私の人生で戦争がもたらしたほど意地悪で重い悲しみはなかった。だから私にとっては、勝利の日ほど明るくて喜ばしい祝日もなかった。



ワレリー・ウチアシビリ
（グルジア共和国グルジャアニ地区チュムラキ村コルホーズ議長）

3年まえ、私の息子は米国へ観光旅行に行って来た。彼はボストンのある学校のロシア語の授業で聞いた言葉にショックを受けた。〝ロシア兵がわれわれを殺しにやって来る〟というセンテンスを習っていたというのだ。

わが国ではふつう、外国語の授業は〝平和、友好、兄弟的関係〟といった単語から始める。

私やわが国民すべてにとって最も関心のある問題は、もちろん、平和をめざす闘争である。1941年に、私たちが植えた果樹園の最初の収穫を私たちがどんなに首を長くして待っていたかが思い出される。ところが、すべては無に帰した。わが国にファシスト侵略者が襲いかかって来たのだ。私たちは自分たちの未来を守り、夢を守るために前線に赴いた。4年間、私たちは家族や恋人、自分たちの果樹園から引き離された。

個人的な計画や夢のすべても4年間中断された。そして、幾千万人もの人が帰らぬ人となった。すべての誠実な人々、とりわけ戦争の苦しみと重荷を経験した人々が今日、世界を戦争から守るために全力を尽くしているのはそのためである。



ユオザス・バルトゥシス
（作家、リトワ共和国平和擁護委員会議長）

私の最近の小説『ユザス物語』の主人公は人の近寄りがたい沼地の中で暮らして来た隠遁者だ。批評家や読者が私のこの小説から得た最初の結論は、戦争はたとえ隠遁者でさえ巻き込まずにはおかない、ということだった。

私は第1次大戦と第2次大戦の時代の祖国リトワの現実を書いた。〝伝統的な戦争〟のときでさえ安全な場所がなかったのに、全世界を破局に追いやるような現代の熱核戦争については、言わずもがなである！

人間の幸せは平和ぬきには考えられない。私には孫が5人いるが、彼らに私が2度の世界大戦で経験した飢え、寒さ、病気、かけがえのない命の早すぎる最期を経験させたくない。



オグルヌル・オラズマメドワ
（トルクメン共和国アシハバード州スベルドロフ記念コルホーズのコルホーズ員、10児の母親）

戦争を望むような母親がいるだろうか？　大祖国戦争はトルクメンの家庭をも容赦せず、多くの家庭が父や息子や兄弟を永遠に失った。戦争のとき、私は幼かった。6歳にして飢えと畑での重労働を知った。働き手は女と子どもしかいなかった。私たちは早く大人になり、子どもらしい遊びの代わりに勝利のための仕事をした。あれから歳月は流れたが、戦争を忘れることはできない。戦争なんか呪われるがいい！

平和な時代に私は10人の子どもを産んだ。私と夫は苦労して子どもを一人前にした。それでも、わが家はどんなに楽しかったことか。上の子たちは大学を終え、中ごろの子たちは大学や中等専門学校で学んでおり、下の子たちは小中学校に通っている。私たちにはもう孫が8人もいる。ひ孫が誕生するまで生きたいと思う。いま戦争を準備している人たちに言いたい――あなたたちには母親はいないのか？　あなたたちの母親には情というものがないのだろうか？　自分の夫や兄弟、息子が他人の死を望んでいると知ったら、あなたの母親は果たして自分を幸せな女だと思うだろうか――と。



タシバイ・アイダロフ

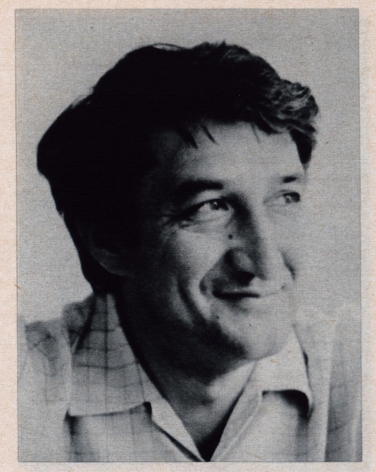
（羊飼い、社会主義労働英雄、キルギス共和国最高会議代議員）

なぜ私にとって平和は貴重か？これは幼児に向かって、なぜおまえには天気のいい朝が大切か、と聞くのと同じだ。平和は地球全体にとって天気のいい朝のようなものだ。それは生活そのものだ。平和のないところには苦しみがある。私はそのことをよく知っている。

私は大祖国戦争に参加した。私は戦争とは何かを知っている。戦争、それは都市や農村の破壊であり、人命と希望の破滅である。だからあの40年代にソ連国民は、これ以上戦争が起こらないために戦ったのだ。

私には子どもが6人いる。みんな戦後に生まれ、育った。上の子たちは大学を卒業して医師や教師になった。下の子たちはまだ学校へ行っている。みんなこれからというところで、希望や計画をたくさん抱いている。この子らの幸せのためにも平和が必要だ。

私は山の中に住んでいる。海抜3000m以上もあるので、テレビを受信するためのアンテナもいらない。テレビにはしばしば、その道に通じた偉い学者が登場して、もし核戦争が勃発したら、それは地球最後の戦争になるだろう、と言っている。地球は生命のない荒野と化すだろう。そんなことが許されていいものか？



ザファル・ハキモフ

（考古学者、ウズベク共和国文化省芸術研究所学術書記）

発掘に参加すると、いつも同じものを目にする。戦争によって破壊された跡だ。自分と同じ人間を殺すために、人々はどれだけ力とエネルギーを費やして来たことだろう。だれかの功名心のためにおびただしい血が流されたのだ。それが何だ？　すべては大地に呑み込まれ、すべては時間に呑み込まれてしまったではないか。思わず考えてしまう── こんなことがなぜ、理性的な存在と自称する人間に必要だったのか？　人間は戦争がなかったなら、はるかに大きな発展を手に取っていたことだろう。

発掘のとき考古学者は、その昔栄えていた都市の廃墟の中で矢じりや槍の穂先を発見する。現代の武器と比べれば子どものオモチャのようなものだ。核装薬を詰めたミサイルが発射されたらどんなことになるか、想像もできない。

私は運がよかった。まだ戦争を経験したことがないからだ。だが年輩の人々はそれをよく覚えている。第2次大戦中ウクライナや封鎖下のレニングラードから疎開して来た何万人もの子どもたちも覚えているだろう。この子たちの多くは親を失った。この悲劇の深さは計りしれない……

私には息子が2人いる。彼らの将来を考えるとき、私は何よりもまず、彼らが人間に対して発砲するような事態が来ないことを望む。



リリト・カラペチャン

（アルメニア共和国エレバン医科大学臨床学部5年生）

映画のひとこまが脳裏に焼きついている。広場の石段に残された人間の影だ。それが原爆が炸裂したあとこの生きた人間が残したすべてなのだ。広島と長崎の恐怖をくり返してはならない。

私たちの世代は戦争を知らない。本や映画や年輩者の話から知っているにすぎない。私たちの隣人の女性の家の壁には黒枠にはまった3人の肖像が掛かっている。彼女の息子たちだ。3人とも若くて、笑っている。彼らは戦争から帰って来なかったのだ……

もうすぐ私は内科医になる。地上で最も人道的な職業と言えるだろう。医者の使命は人間の最も大切なもの── いのちを守ることだからだ。いのちという言葉は、私にあってはつねに平和を連想させる。医者として、女性として、未来の母親として、私は自分の息子たちが黒枠の肖像となって壁に掛けられるなんて考えられないし、考えたくもない。平和のためにはつねに闘わなければならない。だから私も私の友人たちも、軍拡競争を中止するよう要求したブリュッセルのNATO本部あての抗議文に署名した。

デタントと反デタント

──世界政治の二つの方向



ソ連共産党中央委員会国際情報部長　レオニード・ザミャーチン

国際紛糾の原因は？

世界情勢が極度に悪化している原因は何か？　国々が対決するこの危険な、だらだら長引いている段階を脱け出す道は、果たしてあるのか？──これは現在の不安な国際情勢のもとで人々が抱くもっともな疑問である。

現代の紛糾の主な源は、現米国政府の冒険主義的方針、米国政府の緊張と対決をめざす方針、力と軍事的優位を武器に世界を支配しようとする方針にある。

レーガン政権はデタント〔緊張緩和〕と完全に手を切り、他国の内政に干渉する政策を強め、対ソ〝十字軍〟の結成を呼びかけ、「世界体制としての社会主義の絶滅」を目標に掲げた。西側の観測筋は、レーガン大統領の西欧歴訪のさいのロンドンでの演説を、「ソビエト体制を攻撃し、ソビエト体制絶滅のための措置をとるよう全世界に呼びかけた」ものと論評した。レーガンはソ連と米国は戦争状態にあるとズバリ述べた。米国防総省の秘密文書『米軍の建設にかんする指令』は、米国の

行動全体は、「社会・政治体制としての社会主義を絶滅する」闘争の前提をつくることにあるという結論を出している。

米国防総省がまとめた〝限定〟核戦争、〝長期〟核戦争、〝核の先制第一撃〟のドクトリンは、ほかならぬこの指令の内容に沿ったものであり、核紛争は〝許容できること〟やこの紛争での〝勝利の可能性〟を証明しようとする態度も同じである。第2回国連軍縮特別総会にあてたL・I・ブレジネフのメッセージに述べられた核兵器の先制不使用というソ連の手本に米国政府が続こうとしなかったことも、ワシントンの戦略構想の侵略方向をはっきりと裏書きしている。

NATO諸国の長期〝軍備補充〟計画、中性子爆弾の量産開始の決定、〝欧州戦略〟ミサイルの西欧配備計画、日本への戦闘爆撃機の配備計画、米軍の化学兵器の再装備――これらは、米国と若干の米国の同盟諸国の軍事力を、帝国主義の好戦層の政治的野望に合わせるための、相互につながりのある諸段階である。

一九四六年から一九八〇年までの戦後35年間に米国が費やした軍事費は、二兆ドルであるが、いま次の5年間だけでさらに一兆五〇〇〇億ドル以上を使う予定である。レーガン政権成立後のわずか2カ月間に、米国政府は約四五〇件の軍事計画を検討した。

軍事費を増額すれば、強大な米国を復活し、米帝国主義の覇権を確保することができるという考えは、米国政界上層部の一部の者の頭にこびりついているが、彼らがいくら現在の軍事的均衡を打破しようとしても、それは幻想にすぎない。ソ連は――最高の権威筋が述べたことであるが――軍事的優位をめざしてはいないが、こうした優位を獲得するのをどの国にも許さないだろう。

誰のための〝抜本的削減〟

米国政府は政府の方針に基づいて、核兵器の制限を含む軍縮交渉サボタージュの路線をとった。現にこれまで米国は、核兵器の実験の完全全面禁止、化学兵器の禁止と廃絶、インド洋における軍事行動の制限とそれに続く縮小、通常兵器の売却・供給の制限などの重要問題にかんする交渉を一方的に中断し、衛星破壊システムにかんする交渉を封鎖した。

米国政府は国際世論に押されて止むなく、欧州における核兵器の制限と戦略兵器の制限にかんする交渉に応じたが、見逃せないのは、交渉が始まる前にワシントンが出した議題中の問題にかんする提案が、相互主義に基づく合意に乗り気でないことを、はっきり示していたことである。

たとえば米国は欧州戦域核の制限問題にかんしていわゆる〝ゼロ・オプション〟を提案した。実際のところこの提案はソ連の中距離ミサイルを全部撤去させ、それに対して米国側は新しいミサイルを西欧に配備しないことを約束するだけというもので、ソ連側だけがゼロとなる代物である。つまり〝ゼロ・オプション〟の作者は、欧州に配備ずみの米国の戦域核やソ連、ワルシャワ条約加盟諸国に照準をおいた英仏の核兵器には一切手を触れてはならないと考えているのである。ワシントンはこうした態度をごまかすために、さもソ連が中距離ミサイルでの〝優位〟を固めようと努めているかのように言っている。これは、ソ連の立場をわざと歪めたもので、米国側は、中距離核兵器の発射装置と運搬手段の数が、ソ連（九七五）、NATO側（九八六）ともにほぼ同じであることを百も承知しているのだ。従って米国のこうした提案の塊胆は見え見えである。要するに自分の方の核兵器は1基たりとも減らさず、ソ連が20年前から配備し、既成の欧州の軍事力バランスの一部となっている地上配備のミサイルの撤去を、一方的にソ連に求めて、NATOの戦域核を防ぐミサイル・核の防御壁をソ連から奪おうとしているのである。

ジュネーブの戦略兵器制限・削減交渉における米国の立場も同じく、現在の力の均衡を一方的に破ろうとねらったものである。

ソ米核戦力の構成は、地上配備の弾道ミサイルについてはソ連が核弾頭の70%、米国が約20%を保有しているが、海上展開や戦略爆撃機配備のミサイルについては核弾頭の80%を米国が保有している。ワシントンはこの違いにつけ込んで、大統領が公式に述べたように、主にソ連の地上配備の大陸間弾道ミサイルだけの削減を提案している。

結局、米国政府のこのような計画が実現すれば、ソ連の核戦力は米国のそれに著しく劣ることになる。しかも米国がこの先数年間にさらに追加展開しようとしている海上、地上配備の何千基もの巡航ミサイルは除外されているのである。

以上から言えるのは、いまワシントンがねらっているいわゆる〝抜本的削減〟の対象は、一方のソ連だけであるということだ。

ソ連は米国と異なる立場をとっており、数々の具体的提案を発表してその立場を裏付けている。ソ連は軍事・戦略面の現在のパリティーを考慮し、ソ米両国の戦略核戦力の現水準と均衡を保ったまま減らすべきだと考えている。また、たとえば米国の長距離爆撃機搭載の膨大な数の核弾頭を、この削減から除外してはならない。一言で言うと、われわれは交渉で、平等と同等安全の正当で、相互に受け入れられる原則が守られるよう望んでいる。その原則が

守られないと、交渉は行き詰まるだろう。

他の諸国民の利益に反して

米国政府の現在の方針だと、米国の政策は世界の各地域の諸国家の利益に反することになり、従って米国は国際的にますます孤立することになる。米国とほかの世界との対立は、社会主義諸国との間だけでなく（社会主義諸国との対決は意識的に紛争ぎりぎりのところへ追い込まれている）、ワシントンが伝統的に米国寄りと見ている地域との間でもひどくなっている。

欧州の人々は東西の伝統的な経済交流の拡大を支持している。ワシントンの〝貿易・金融総力戦争〟措置を見ればわかるとおり、米国はこうした交流に反対している。

もう一つ、西側諸国の諸国民を悩ませている問題がある。ワシントンはたえず軍事費の増額を要求すると同時に、軍事的インフラストラクチャーを支える重荷を同盟諸国に転嫁している。ワシントンは同盟諸国の地理的行動圏を拡大し、もっぱら米国の侵略目的に奉仕するグローバルな性格の軍事行動に諸国を引き込もうと考えている。

しかし西側の米国の多くの同盟諸国が正しく見ているとおり、安全は軍事力の増強よりもむしろ、力のバランスの維持、経済、エネルギー、貿易面での社会主義諸国との協力の拡大によって確保されるのである。これらの国の多くはソ連と同じく、デタントを尊重しており、自分の経験を通じて、デタントの成果が東西双方に有利であることを納得している。

中南米の一連の国々に対する米国の挑発政策、エルサルバドルの内政への米国の直接の干渉、アルゼンチンに対する英国の植民地的冒険を公然と支持した米国の態度は、反米気運を爆発させ、米州機構に打撃を与え、中南米諸国の自主的地域連合体づくりの気運を高めた。

中東で米国は、残虐さと犠牲者の数で非人間的かつ野蛮なイスラエルのレバノン侵略を積極的に幇助した。米国のこの態度にさすがの親西側のアラブ諸国も憤激し、ワシントンを激しく非難した。多くのNATO諸国もこの問題ではワシントンに同調せず、安保理事会で米国に反対投票した。

ワシントンはレバノンの悲劇を踏み台にして政治的得点を稼ぐために、中東調整の〝新しいイニシアチブ〟をとり、それを大々的に宣伝した。実際のところ、この〝レーガン計画〟のねらいは、米・イスラエル両国によるレバノン侵略の成果を政治的に補強し、新しいアラブ諸国、まずヨルダンをキャンプ・デービット的プロセスにまき込むことである。米国の諸提案は、レバノンからのイスラエル軍の撤退には全然触れていないし、PLO（パレスチナ解放機構）の存在についても述べておらず、パレスチナ国家の創設構想を真っ向うからはねつけている。ところがこの三つの要因は、中東問題の真の平和的調整に必要な主な条件であり、9月15日のモスクワでの演説の中でL・I・ブレジネフはこのことを強調し、中東に公正な永続的平和をもたらすことができるし、もたらすはずのすべてを包括する中東調整の6原則をあげた。

核戦争の道を封じよう

現代の国際情勢に影響を与えるのは、けっして戦争の要因だけではない。平和の要因は、少しも弱まっていないどころか、逆にますます力を蓄えており、その主な要因こそ社会主義共同体である。

社会主義共同体の威力と団結は、帝国主義勢力の野望を挫く主な障害である。ソ連共産党第26回大会の報告の中で強調されたとおり、「ソ連とその同盟諸国は、以前にも増していま、世界の平和の主なとりでである」。この言葉は、終始具体的行動で補強されている。党大会で承認された八〇年代の平和綱領は、世界中で大きな反響を呼んだ。社会主義諸国は平和綱領を積極的に支持し、国際舞台で歩調を合わせて平和を愛する方針をとっている。わが共産党は平和綱領を発展させた数々のイニシアチブをまとめ、ソ米会談を初めさまざまの国際的フォーラムで発表した。第2回国連軍縮特別総会あてのL・I・ブレジネフのメッセージに述べられた、ソ連は核兵器を先制使用しないという約束は、世界平和への歴史的貢献であった。

帝国主義の侵略性が強まるにつれ、それに対応して世界の反戦行進も非常に活発になっている。いまや反戦、反核勢力の広がりは、おそらくかつてないほどのものであり、影響力も大きい。米本国でも軍備増強やホワイトハウスの侵略方針に反対する国民の抗議の声が高まっている。

世界のすべての諸国民はデタントにそれぞれ貢献している。その点で特に大きな意義をもつのは、NATO、ワルシャワ条約の両同盟の指導機関が、同盟の行動範囲をアジア、アフリカ、ラテンアメリカに広げないことを声明するという、ソ連の新しい提案である。

現在世界情勢がどんなに悪化していようと、デタントの歩みは誰にも止められないと断言できる。いまの国際情勢で何よりも大事なのは、核の脅威を取り除き、戦争への道を阻むことであり、諸国間のいかなる異見、対立、違いも、この重大な事業の障害となってはならない。

一九八二年中のソ連の平和提案

昨一九八二年にソ連はこれまでの年と同じく、国際緊張緩和を深め、平和を固めるための数々の重要なイニシアチブをとった。これらのイニシアチブは、一九八一年のソ連共産党第26回大会で採択された一九八〇年代の平和綱領を発展させ、具体化した。

1月

中欧兵力軍備相互削減交渉で、ドイツ民主共和国、ポーランド人民共和国、ソ連、チェコスロバキア社会主義共和国の名で、「兵力と軍備の相互削減およびこれと関連した中欧での第一段階の措置にかんする協定」案が、正式に提出された。この協定案では二段階の削減によって双方（各軍事同盟）とも兵員総数を同等の集団的レベルの九〇万人（うち地上軍七〇万人、空軍二〇万人）に減らすという、交渉の終極目標がはっきりと示されていた。

第一段階ではソ米両国の兵力と軍備が削減、制限される。

協定の他の参加諸国は、この期間中自国の兵力数を〝凍結〟しなければならない。

協定案では、第二段階ですべての協定参加国が、ほぼ同じ比率で自国の兵力と軍備を削減しなければならないことになっている。

3月

ソ連はソ連欧州部における中距離核兵器の展開のモラトリアムを一方的に実施することを決定したと発表。ソ連欧州部にすでに展開ずみのソ連の中距離核兵器は質量ともに凍結し、さらにSS4、SS5として知られる旧型ミサイルを改良型のSS20に代えることは停止することになった。

ソ連は米国政府に対し、戦略兵器制限交渉を人為的に妨げず、ごく近いうちに交渉に入るよう呼びかけた。また交渉再開前に軍拡競争を新しく始めないこと、海上、地上配備の長距離巡航ミサイルを展開しないことを呼びかけた。

またソ連政府は、双方のミサイル搭載潜水艦を現在の広大な戦闘パトロール水域外に出さず、これらの潜水艦の航行を相互に合意した水域内に制限するために、海軍の行動の相互抑制について取り決めることを提案した。さらにソ連は、海洋、とくに船舶の航行が最も多い水域に信頼措置を適用する問題について、討議する用意があると発表した。

5月

ソ連は、再開ソ米戦略兵器制限、削減交渉で、交渉が始まり次第すぐにも、ソ米両国の戦略兵器の数量を凍結し、その近代化を最大限に制限することについて取り決めをする用意ありと表明。

ソ連の意見によると、ソ米いずれも、戦略情勢の安定を破壊するような行動をとらないことも必要である。

6月

L・I・ブレジネフの第2回国連軍縮特別総会にあてたメッセージには、「ソビエト国家はおごそかに声明する――ソビエト社会主義共和国連邦は核兵器を先に使用しないことを約束する」と述べられていた。

この約束は国連総会で発表されてただちに発効した。

※　※　※

ソ連は第2回国連軍縮特別総会にメモランダム「増大する核の脅威を回避し、軍拡競争を抑制しよう」を提出。メモランダムには次のような核軍縮の段階的実現計画が含まれている。

――核兵器の新体系の開発の停止

――さまざまな種類の核兵器の開発を目的とした核分裂物質の生産の停止

――あらゆる種類の核弾頭とその運搬手段の生産の停止

――運搬手段を含む核兵器のストックの段階的削減

――核兵器の完全な廃絶

核兵器の制限と削減は、すべての核手段、まず第一に戦略兵器と中距離手段を包括しなければならない。

※　※　※

ソ連の提案「化学兵器の開発、製造、蓄積の禁止およびその廃絶にかんする条約の基本条項」が第2回国連軍縮特別総会の審議に付された。

※　※　※

平和と人類の安全に対する犯罪のコーデックス案へのソ連、ウクライナ共和国、ベロルシア共和国政府の意見が、国連国際法委員会第24回会議で審議された。このソ連の文書は、核兵器を最初に使用する為政者は、人類に対して最大の罪を犯すものであるという条文をコーデックス案に入れるよう提案している。

9月

ソ連政府は中東における公正で永続的な平和の基盤になりうるし、ならねばならない諸原則を打ち出した。

第一に、侵略による他人の土地の奪取を許さないという原則は、厳守されねばならない。このことは、一九六七年以降イスラエルによって占領されたすべての土地――ゴラン高原、ヨルダン川西岸、ガザ地区、レバノンの土地が、アラブ人に返還されねばならないことを意味している。イスラエルとその隣接アラブ諸国との国境は、不可侵であると宣言されなければならない。

第二に、将来イスラエルの占領から解放されるパレスチナの地――ヨルダン川西岸とガザ地区における自決し、自らの独立国家を創設するパレスチナ・アラブ人の奪うことのできない権利が、実際に保障されなければならない。

パレスチナ難民には、国連の諸決議で定められたその故郷の地に戻る可能性、あるいは彼らが残した資産に対するしかるべき補償を得る可能性が与えられなければならない。

第三に、一九六七年にイスラエルに占領されたイスラム教の聖地の一つである東エルサレムは、アラブ人に返還され、パレスチナ国家の切り離すことのできない一部分とならねばならない。エルサレム全市で、三つの宗教の崇拝の対象となっている場所への信者の出入りの自由が保障されねばならない。

第四に、もちろん完全な相互主義を守って、この地域のすべての諸国の安全で独立した存続と発展の権利が保障されねばならない。なぜなら、ある国々の安全を侵害して別の国々の安全を保障することはできないからである。

第五に、アラブ諸国家とイスラエルの戦争状態が停止され、平和が確立されねばならない。このことは、イスラエルとパレスチナ国家を含む紛争の全当事者が互いの主権、独立、領土保全を相互に尊重し、発生した紛争を平和的な手段、交渉によって解決することを約束することを意味している。

第六に、調整の国際的な保証が作成され、採択されねばならない。たとえば、国連安保理事会の常任理事国もしくは国連安保理事会全体が保証人の役割を引き受けることができよう。

※　※　※

ソ連の指導部はインド洋国際会議を一九八三年上半期に開催する件にかんする一連の提案を発表。

ソ連政府は、その艦船がインド洋水域を利用しているすべての国に対して、会議開催までこの地域の情勢をさらに悪化させうるようないかなる措置も慎むよう呼びかけた。なかでも、そこへ大艦隊を派遣したり、インド洋に軍事基地をもつ非沿岸諸国のこうした基地を拡大、近代化することを慎むよう呼びかけた。

またソ連は、米国側によって中断されているインド洋での軍事活動の制限と削減にかんする二国間交渉をいつでも再開する用意があることを言明した。

10月

ソ連は重要かつ緊急の問題として「核兵器実験の即時中止および禁止に関して」を第37回国連総会の議題に入れるよう提案した。

これと関連してソ連は、「核兵器実験完全全面禁止条約の基本条項」を国連総会の審議に提出した。

この条約を作成するための、より好ましい条件を作り出すために、ソ連は、すべての核保有国が互いの間で取り決める日時から、平和目的をも含めたあらゆる核爆発に対するモラトリアムを宣言するよう提案した。

ソ連は核の危険を減らすために、第37回国連総会の緊急議題として「核戦争の脅威を除去し、核エネルギーの安全な開発を保障するための努力を倍加すること」を入れるよう提案した。

ソ連は、通常兵器による平和的な核施設の破壊も、核兵器による攻撃と同じであること、すなわち国連がすでに人類に対する最も重い犯罪と定義した行為と同じであることを、総会が宣言するよう提案した。

※　※　※

ソ連は地中海地域の安全を強化し、この地域を安定した平和と協力のゾーンにしたいとの希望を表明した。ソ連はこの地域の軍事的緊張をやわらげるプログラムを出したが、これには軍事面での信頼措置についての合意、兵力の削減、地中海非核諸国の領土に核兵器を配備しないこと、核搭載艦の地中海からの撤退が含まれる。ソ連は地中海地域の平和と安全の根本問題について、二国間あるいは多国間の交渉を行うことは、有益であるとの確信を表明した。



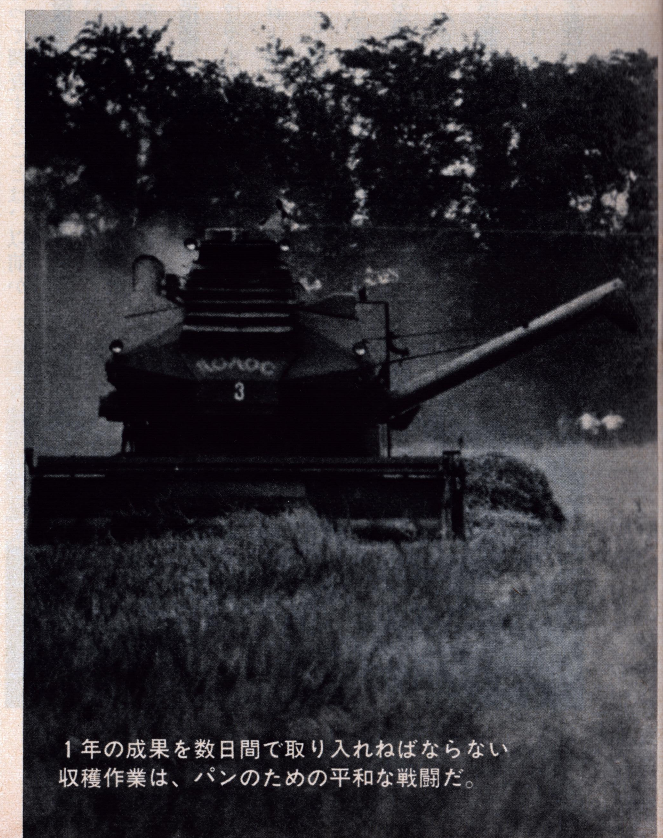
小麦の収穫現場で。右端がイリーナ・フマーラ。

穀倉地帯で食料計画の実現に取り組む

党地区委員会の女性書記

エブニカ・スベトラノワ　　カメラ　V・ビャトキン





1年の成果を数日間で取り入れねばならない収穫作業は、パンのための平和な戦闘だ。



イリーナ・フマーラと「ボリシェビキ」コルホーズ議長のグリゴリー・ルイバク。2人とも冗談とうがった言い方をするのが大好き。仕事の話でもうまが合う。

ソ連食料計画に掲げられた課題を遂行するうえで大きな役割を演じるのは農村の共産党員である。今回は党のスタロミンスカヤ地区委員会第一書記でソ連共産党中央委員候補のイリーナ・フマーラの仕事ぶりをご紹介しよう。

勝利と後れの"人的原因"の分析

スタロミンスカヤ村はロシア連邦共和国の南、大農業地帯として知られるクラスノダル地方の北部にあって、畑作と畜産の生産効率では典型的な"中程度"の地位を占めている。

「現在、耕作地の収穫率、畜産場の生産性を一挙に引き上げる課題と取り組んでいます」――イリーナ・フマーラは言う。

このことについては、一九八二年5月のソ連共産党中央委員会総会（ここで食料計画が承認された）に出席したフマーラがその時の発言で述べている。

フマーラが揚げた課題は純然たる経済的課題だ。この課題の遂行にあたってコルホーズやソフホーズの管理部と党地区委員会のあいだでは仕事はどういうふうに"分けられる"のか？

フマーラの話だと、地区の党指導部には経済のあらゆる基幹分野で働く人々――畑作農業者、畜産家、輸送・建設・加工企業の労働者・技師、農村知識人が入っている。こういう構成メンバーだから党地区委員会は全体として、農村のあらゆる業務・仕事にわたってけん引機関になることが出来る。

中央委員会5月総会から戻ったイリーナ・フマーラは、まさにこのような人々とともに、総会の決定を自分の地区で実行する戦術を作成しはじめた。共産党員たちは、その地域の条件下でいかにしたら農業、調達機関、輸送機

関、加工企業、商業網をよりうまく一本のコンベヤに統合出来るかを考えた。畑地と畜産場の生産物が増え、農産物が生産者から消費者に、この鎖の環のどの部分でも損失したり無駄になったりすることなく届けられるようにするためにだ。



グリゴリー・ルイバクが議長をする「ボリシェビキ」コルホーズで種牛を見る。

党の地区委員たちはイリーナ・フマーラがモスクワからもたらした、ソ連各地の地区農工合同の創設と活動についての情報を注意深く検討した。この地区にもそのような農工合同を組織することが決定された。農工合同の活動の技術的問題は専門家に任せておけばいい。地区委員会書記としてフマーラは人材の確保に全力を集中した。

イリーナ・フマーラ自身は農業技師で、土地の農民の出身。農業経済の微妙な問題だけでなく、農民の心理も実によく分かる。生産機構の水準が高ければ高いほど、そこで働く各個人の役割も大きくなる、とフマーラは考えている。管理機関、経済部局の仕事が成功あるいは欠陥の経済的原因を明らかにすることだとしたら、党の配慮はあれこれの状況の人間的側面を明らかにするものでなければならない。

〝クラースノエ・ズナーミャ〟(赤旗)コルホーズから気がかりなニュースがとび込んで来た。牛乳の原価がほぼ1・5倍に上昇したためコルホーズ経営が赤字になったというのだ。経営のやり方に問題があるのではないか？

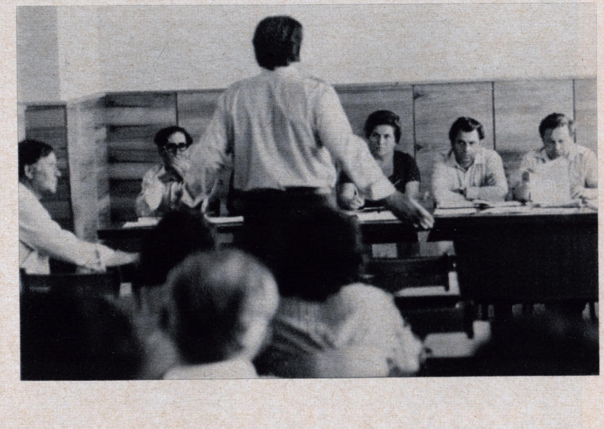
イリーナ・フマーラと一緒に私たちは〝事件の現場〟に向かった。コルホーズのアレクサンドル・ゴルジエンコ議長との話から、赤字は一時的なもので、あらかじめ見込まれていたものであることが分かった。ゴルジエンコ議長が説明した。

「手作業は若者を畜産場から遠ざけているだけでなく、コストも高くしている。搾乳婦の賃金を引き上げ、牛乳1リットルあたりの経費が上がっているのに、売り値は以前のままです。というわけで、われわれは完全に機械化された牛乳コンプレクスを建設することに決めました。資金は速やかに回収されるでしょう。2、3年後にはこのコルホーズの牛乳が地区で一番コストの低い牛乳になります。先を見なければね！」

人々がコルホーズの事業の将来を見通しているのを見るのは、党の指導者にとってうれしいことだ。現場にすぐ飛んで行って調査することは、以前からこの地区委員会の活動スタイルになっている。

ソ連共産党第22回大会記念コルホーズで生産指標が下がり始めた時も、イリーナ・フマーラは数人の党地区委員会ビューロー員と他のコルホーズの専門家を伴って現地に出かけたという。

彼女はコルホーズ員たちを集め、後れの原因を探し、どうしたら事態を改善できるかを一緒に考えた。しかしフマーラは、誰かを〝つるし上げる〟ようなことはしなかった。コルホーズ員たちの話を注意深く聴き、理にかなった意見、先のことを考えた意見は短い、重みのある受け答えで支持した。最後にフマーラは討論を総括して、党地区委員会として地方および地区機関にこのコルホーズへの機械化設備の追加供給と若手の農業技師、大学卒専門家の派遣を依頼し、隣のコルホーズの優秀作業班長の一人を説得してこのコルホーズに移籍させるようにしたいと約束した。また、飛行機を使って除草剤散



何か誤りを犯し、大事なことを見過ごしてしまった者は、厳しい質問が待ちかまえているのを知っている（党地区委員会の会議で）



この地区の中心地スタロミンスカヤ村（クラスノダル地方）

布、施肥、害虫駆除がもっと効果的に行われるように滑走路の建設を早めるよう援助すると約束した。そしてすべてこれは実行された。フマーラは約束を必ず守る。しかし、私と話をしたコルホーズ員たち自身が言ったように、この記念すべき会合の重要な結果は、彼らが自分たちの集団農場の仕事をもっと速く、より良く達成出来ると信じた点にあった。徐々にこのコルホーズの経営状態は中位より上の水準に上がっていった。

勝利と後れの〝人間的原因〟の分析は党地区委員会の重要な仕事の一つである。主要な原則は、誰にとっても勤労が興味あるものになるような雰囲気を作り出すことだとイリーナ・フマーラは強調した。

普段の日と祭日

スタロミンスカヤ村の目覚めは早い。朝はみな車に乗って行く。自動車、モーターバイク、自転車が走る。ほとんど一家全員が乗った一台の自転車が〝風を切って〟行く。サドルには若いお母さんが座り、前と後ろに2人の子供を乗せている。多分、子供を幼稚園に連れて行き、自分自身は畑に行くのだろう。

ある店のそばでお年寄りが立ち話をしている。「元気だよ。大事なのは、働くことさ……」という声が聞こえる。

コルホーズの年金は平穏な老年を過ごすのにまあまあ十分なだけもらえるのだが、土地のお年寄りたちは、老年になっても働くほうが幸せだと考えている。

村には過去の対ファシズム戦争の記憶が生きている。村の中央の「永遠の火」のそばの「栄光のオベリスク」には英雄たちの名が金文字で記されている。村民一万一〇〇〇人が戦争から戻らなかった。ここの多くの通りには英雄たちの名がついている。



コルホーズ員たちは地区党機関の指導者としてだけでなく、高い資格を持った農業技師としてフマーラに助言を求めに来る。

戦争から生還した人たちには特別な敬意が払われている。村のどの人も、例えば、コンバイン手のダニール・イワシチェンコを知っている。片足を失くして前線から戻ったのだが、年金生活者にはなりたがらずに、機械操作員として働いた。老齢年金を受け取れる年齢に達した今でも、引退しないで頑張っている。イリーナ・フマーラは語る。

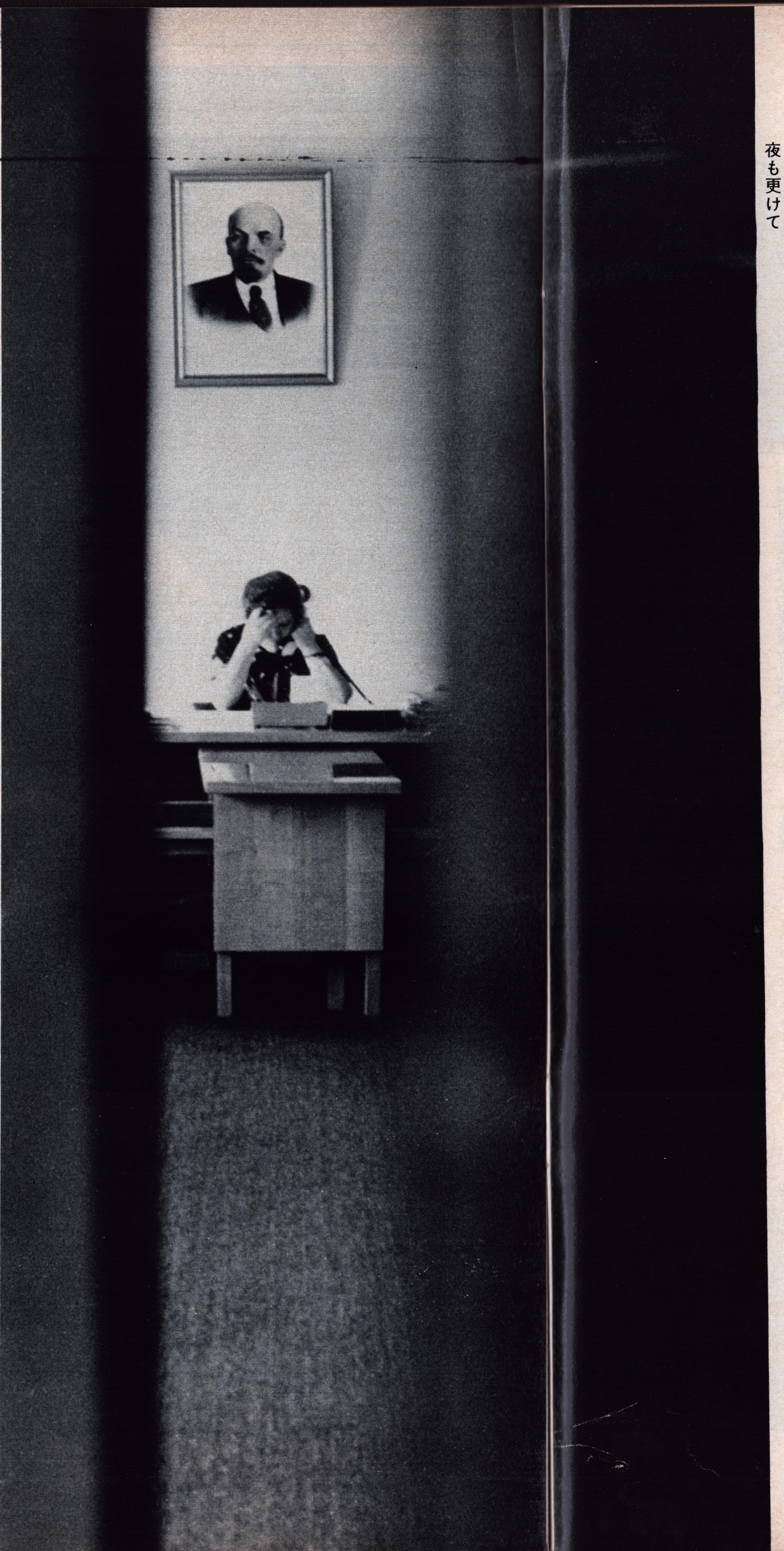
「年金生活の道を選んだお年寄りたちのために、党地区委員会は定期的に〝説明会〟を開催しています。これは党地区委員会の指導者たちとの懇談会で、その目的は尊敬すべきお年寄りたちに村の全生活に通じていていただくことです。また、お年寄りの求めていることを知り、援助の手を差しのべるためにもこの会は有益です。もちろん、お年寄りたちから私たちへの善意の助言もあります」

土地への愛着が薄れ、皆が都会に出て行くようになったということを最近よく耳にする。このことについてイリーナ・フマーラと話したが、彼女は、「私たちの所では都市への〝脱出〟の問題はありません」と否定した。

だが人間はただ仕事だけで生きているわけではない。イリーナ・フマーラ



「人々の運命、人間関係にかかわる問題はどんなことであれ、慎重に細心に解決しなければ……」と語るイリーナ・フマーラ。



夜も更けて

は陽気な〝家族祭り〟のことを話してくれた。このお祭りは、金婚式と銀婚式を迎えた人たち、それに若い新婚カップルが主役で、お祝いのために村中の人が広場に集まる。祭りは踊ったり歌ったり2日間続き、〝家庭生活〟のコミックなシーンを演じる仮装した人々を乗せた馬車もくり出す……

こういう祭りの発起人も、党地区委員会だ。イリーナ・フマーラ自身も祭りの準備に積極的に参加する。このお祭りは家庭を大事にする善良な気持ちを強めてくれるとフマーラは思っている。家庭なしでは人生は味気なくつまらない。そして他の者と分かちあう喜びと楽しみは、共同の労働と同じように、人々の中に集団主義的特徴を形づくるだろう……

パンのための戦闘

この軍事的な〝戦闘〟という言葉と平和的な〝パン〟という言葉が隣り合わせにあるのはおかしいと思われるかも知れない。だがそれでも収穫期の農民の緊張した一昼夜ぶっつづけの労働を正確に言い表わすことは出来ない。丸一年の結果が、この収穫時の数日間にかかっているのだ。平和で、幸福で困難な戦闘……それがどう準備されるか知っているだろうか?

私はスタロミンスカヤ村の各コルホーズの代表たちが集まった収穫前の会議に出席する機会を得た。イリーナ・フマーラが会議の議長を務めた。機械操作員たちが文化宮殿の演壇に立ち、一人ひとりが設備の準備状況とどんな困難があるかを説明した。三四八台の穀物収穫用コンバイン、九〇〇台のトラクター、五〇〇台のトラックを畑に出さなくてはならない。地区の国営穀物倉庫は一五万tの穀物を収容出来る。

党地区委員会書記のフマーラはみんなと同じように注意深く発言者の話を聴き、彼らが心配している問題を理解しようとした。穀物倉庫従業員の意見を支持してフマーラは発言し、党地区委員会は高品質で優秀な穀物だけを倉庫に収容するよう厳格な審査員になる、と警告した。パン焼き職人はこね粉の発酵強化剤としてスタロミンスカヤの小麦粉を添加するくらいなのだから、ここの小麦の特質は守らねばならない。そのあと、私はイリーナが考え事をしている時にふと漏らした言葉を書きとめた――「国民の財産を大切にする態度、これが農民のモラルの第一のおきてだわ」

機械操作員アレクサンドル・クリビチの話は全員が特別の注意を払って聴いた。ライバルである他のコルホーズの同僚たちに、機械整備の独自の方法を見せようと、彼は文化宮殿にトラクターで乗りつけて来ていた。

この文化宮殿の会議では、各コルホーズの優秀な働き手の表彰も行われた。

イリーナ・フマーラは、アレクサンドル・クリビチをはじめ、収穫期に備えて機械の整備を立派に完了したコルホーズ員たちに賞金と表彰状を授与した。こうして一つの会議の中で、パンのための戦闘の準備体制についての実務的討議と、授業と、ささやかなお祝いごとが一緒に行われたのだった。

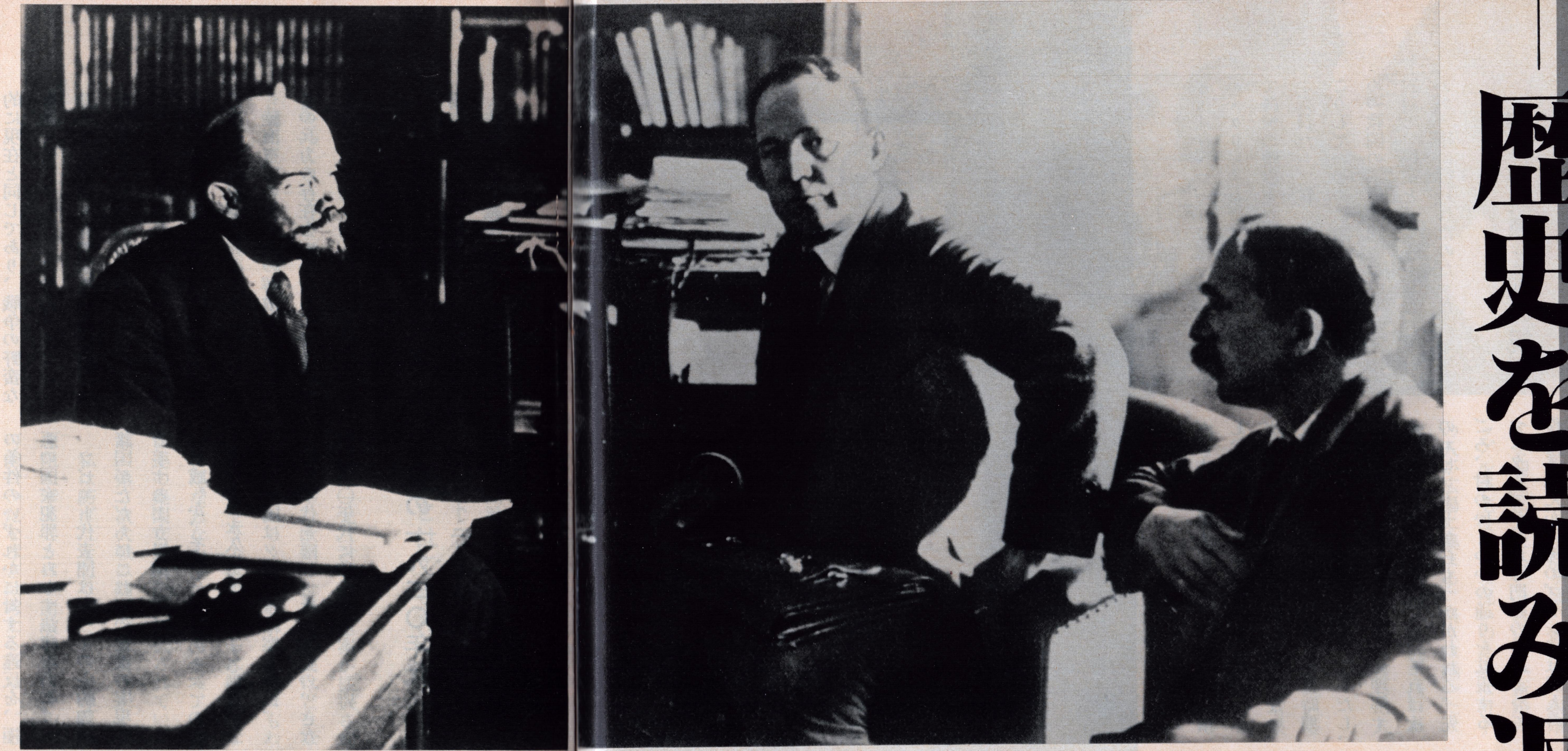
地区的規模と国の規模

イリーナ・フマーラは〝40代の年齢グループ〟に入る。生活の知恵も蓄積し、人を理解する経験も積んだ。だがまだエネルギーを使い切ってはいない。反対に今はまさに脂がのりきった時期だ。フマーラの人柄は今もソフトだし、素朴な人間的心配事を女性的に理解する能力を持ち合わせている。それは次のエピソードからもうかがわれる。先ごろ、村のいくつかの通りを拡張するマスタープランが専門家の手によって作成されたが、そのプランでは個人の菜園の廃止が予定されていた。菜園の所有者(主婦)たちは党地区委員会のフマーラのもとへ駆けつけてきて、畑を守るのを援助してほしいと頼んだ。そしてフマーラは住民たちの願いを容れるように主張して、菜園を守った。そのためにはマスタープランを作成し直さなければならなかったのだが。

党地区委員会の一日は仕事がひしめきあっている。今日の問題で、一刻を争い、後まわしに出来ない仕事が山積している。イリーナ・フマーラはそれを片付けるのに夢中だが、彼女にはそれらの問題の背後に国家的規模の将来性を見通す力がある。多分、まさにそのために、ソ連共産党中央委員会総会が彼女の演説を聴くことになったのだろう。全国家的食料計画達成に占める地区のパンのための戦闘の意味と位置を正しく自覚している地区レベルの指導者――そういう人の意見こそ、党の最高レベルの会議で傾聴されなければならない。

歴史を読み返して

エルンスト・ゲンリ



モスクワのクレムリンの執務室で米国の経済専門家N・クリステンセンと話し合うレーニン（1921年11月28日）



1922年のジェノバ会議に出席したソ連代表団

国際場裏でソ連は実際に何をめざしているのか？　モスクワの政策の真の〝秘密の〟ねらいは、遅かれ早かれ武力で世界を制覇することだと西側の一部の連中は前々から言っているが、本当にその通りなのか？　ずっと以前から世界は恐ろしい〝ソ連の軍事的脅威〟にさらされている、と言っている人がいるが、はたして本当にそうなのだろうか？

西側諸国では、もう何年も前からひっきりなしに、そんなことが言われてきている。何十点もの本や何千という論説が、このテーマを取り上げており、多くの人々は何を信じたらよいのか分からないありさまだ。

この問題ははっきりしておらず、あいまいだなどとはたして言えるだろうか？

いま、そうは言えない。しごく簡単な方法で、この問題を余すところなく解明できるのだ。その方法とは、主要な証人とも言うべき歴史にたずねることである。

クレムリンでのレーニンのインタビュー

しかしその問題となっている時期に移る前に、ソビエト国家の創始者ウラジーミル・レーニンが、ソ米関係について述べた一つの基本的なこと、この論文のテーマ全体のはしがきとも言える言葉をあげておきたい。

ロシアで社会主義革命が勝利して約2年半後の一九二〇年2月。まだソビエト共和国と西側諸大国との間に公式関係が全然ない時期。

モスクワ、クレムリン。レーニンはモスクワに来た米国の「ニューヨーク・イブニング・ジャーナル」特派員を引見した。米紙の特派員は「米国との（ソビエト共和国の）講和の基礎は？」とたずねる。

レーニンの答え――「米国の資本家はわれわれに手だしをしないでほしい。われわれは彼らに手だしはしない」

特派員の質問――「こういう講和にとっての障害は？」

レーニンの答え――「われわれの側には何もない……」

約63年前レーニンは国際関係をこのように見たが、いまもモスクワはソ連の対外政策をこのように見ている。

二〇年代のロシアの平和提案

その約2年後の一九二二年のジェノバの国際会議で、ソビエト代表団長のゲオルギー・チチェーリン外務人民委員は次のように述べた。

「ロシア代表団は軍備の全面削減を提案するつもりであり、またすべての国の軍隊を削減し、航空戦などの最も野蛮な戦争形態、とくに非武装住民に対する破壊手段の使用を完全に禁止する条項を交戦法規に追加するという条件のもとで、軍国主義の重荷を緩和する目的をもつすべての提案を支持するつもりである」

私が強調したいのは、これが一九二二年に言われたことである。原爆とミサイルが発明されたのはずっと後のことだが、ソビエトの提案の精神は実質

平和についての布告

（抜粋）

10月24—25日の革命によって樹立され、労働者・兵士・農民代表ソビエトに立脚する労農政府は、すべての交戦諸国民と彼らの政府に、公正な民主主義的講和についてただちに交渉を始めることを提議する。

公正な、すなわち民主主義的講和は、戦争で疲弊し苦しみ苦悩している、すべての交戦国の労働者階級と勤労階級の圧倒的多数の者が渇望しているものであり、またロシアの労働者と農民がツァー君主制の打倒後この上なくきっぱりと根気づよく要求してきたものであるが、政府がこのような講和とみなすのは、無併合（すなわち他国の土地を略奪することのない、他民族を強制的に合併することのない）、無賠償の即時の講和である……

富強な諸民族がその略奪した弱い民族を自分たちのあいだでどのように分けあうかということをめぐるこの戦争を続けることを、政府は人類にたいする最大の犯罪と考える……

政府は秘密外交を廃止するとともに、すべての交渉を全国民の面前で完全に公然と行う確固たる意向があることを表明する……

（1917年10月26日の労働者・兵士・農民代表ソビエト第2回全ロシア大会で全会一致可決された「平和についての布告」から）

的に現在と同じであり、戦争の野蛮な形態を禁止することに変わりはない。

しかしソビエトの軍縮提案は通らなかった。

一九二七年11月。ジュネーブの国際連盟軍縮委員会の第1回会議で、ソ連は次のような提案をした。

陸海空軍の全兵員の解散およびこれらの兵力の存在をいかなる形でも容認しないこと。

すべての兵器の廃棄。軍事教育の停止、要塞、海空軍基地の廃止、軍事工場の撤去、国の軍事費の支出の停止。法律による戦争宣伝の禁止。これらの条件のいずれかに対する違反を、極悪の国家犯罪とみなす法律の公布。

ソビエト代表団はすべての条約加入諸国がただちにこれらの提案の実現に着手するよう提議。

〝脅威〟か、それとも世界のすべての国を戦争から永久に守ろうとする熱意か？

西側大国はソ連の軍縮案を拒否。

二〇年代を離れ、次の激動の、きな臭い三〇年代に移ろう。

嵐の一九三〇年代

国際関係にとってこの上ない危機の時代が来た。いまこそ誰が、口先ではなく、実際に、平和を守っているかを、現実が具体的に示さねばならない。

一九三三年と一九三四年の歴史年表からの抜すい。ドイツでヒトラーが政権につく。問題はもっぱらヒトラーが国防軍の矛先を東西いずれに向けるかにある。ソ連はどう出るか？　ソ連は集団安保構想を出す。

一九三四年9月、ソ連は国際連盟に加入。ソ連代表マクシム・リトビノフは、ソ連は分割することのできない平和を守るために他の諸国民と全面的に協力することを、唯一の目的、唯一の公約に掲げて、連盟に加入すると言明。

リトビノフは次のように語る。

「私は、国際連盟が戦争を完全になくす手段を持っていないのを知っている。しかしすべての加盟国の強固な意思と仲むつまじい協力があれば、各時点でも戦争発生のチャンスを最大限に減らすために、非常に大きな成果をあげることができる、と確信している。これはとても輝かしい、けだかい課題であり、それが実現すれば、人類ははかり知れない福利に恵まれよう」

さらにリトビノフは、「ソ連政府は政府樹立以来ずっとこの課題と取り組んできた。今後わが政府は国際連盟加入の他の諸国と力を合わせていきたい」とつけ加える。

他の国々と力を合わせてである！

モスクワの考えは、欧州に集団安保体制をつくることであり、この体制ができていれば、その中の一国に対する攻撃は全般的平和を破壊するものとみなされ、他のすべての国の共同の反撃を受けることになる。一九三六年にソ連は、このような体制をつくるための措置の案文を国際連盟に提出したのであった。

ヒトラーを阻止することはできた

先の一九三六年のソ連案が採択されていたら、欧州や世界の歴史はどうなっていただろう？　それはすぐにもわかる。ヒトラーは否応なしに阻止しなければならなかったのだ。さて、もしソ連の集団安保構想が採択されていたら、第2次大戦は防げただろうか？

私は防げたと思う。ヒトラーの侵略を阻止することは、諸般の事情から不可能だったなどとは考えられない。もし全世界が結束して自分にぶつかるとはっきり分かっていれば、ヒトラーも攻撃には踏み切れなかっただろう。全世界が結束して立ち向かえば、国防軍の前線での敗色があらわになった一九四四年に、実際に起こったような国防軍の将軍たちの反乱が、起こる可能性は大いにあった。

しかし集団安保体制を組んで団結しようというソ連の提案に対して、西側の諸大国は事実上これを拒否した。

当時資本主義諸大国の政治家たちは、ヒトラーを必ず〝なだめすかさ〟ねばならず、そのためには犠牲も仕方がないと主張し、ありとあらゆる恥ずべき取引をヒトラーとやってのけた。これに勢いづいたドイツ・ファシストは、やがて欧州の分割に踏み切った。ジュネーブでリトビノフは〝平和は分割できない〟とくり返した。ソ連政府は、すぐにも全力をあげて、ヒトラー一味の行動を封じ込むよう要求した。

西側はだまり込み、逃げを打つか、ずばり「ノー」と言った。ドイツが強大な軍隊をつくるのを阻まなかった。ナチはオーストリアを占領した。あげくの果てに英仏はミュンヘンでヒトラーと直接結託し、その結果チェコスロ

ソ連共産党綱領

（抜粋）

ソ連共産党は次のような国際関係の分野での課題をたてている。

— 世界戦争を防止し、社会の生活から戦争を完全になくしてしまう条件をつくるために、ほかの社会主義諸国、平和愛好諸国、各国民とともにすべての手段を利用する。

— 健全な国際関係を樹立する方針をとり、相対立するすべての軍事ブロックの解消、〝冷戦〟および諸国民間の敵意と憎悪の宣伝の停止、他国領土におけるすべての外国の空海軍基地、ミサイル基地その他の軍事基地の撤去を実現させる。

— 厳重な国際管理をともなう世界の軍備全廃を実現させる……

— 平和確保のために、米国、英国、フランス、ドイツ連邦共和国、日本、イタリアを含むすべての資本主義諸国との関係を改善し発展させる一貫した政策を積極的におし進める……

ソ連共産党とすべてのソビエト国民は、資本主義諸国間の戦争、人民解放運動の圧殺を目的とする局地戦争をも含めて、ありとあらゆる侵略戦争に、今後とも反対していくだろうし、被抑圧諸民族の神聖な闘争、それら諸民族の帝国主義に反対する正義の解放戦争を支持することを、自己の義務とみなしていくだろう……

（1961年10月31日、ソ連共産党第22回大会で採択されたソ連共産党綱領から）

バキアがむごい運命にさらされた。ミュンヘンで何が起こり、その後何が起こったかは、どの学校の生徒も知っている。

ドイツ・ファシズムを大目に見たツケが、第2次大戦での五〇〇〇万人の人命の損失となった。

それでもなおソ連政府は、第2次大戦が始まる4カ月半前の一九三九年4月、破局を防止する新たな手として、英国に次のような提案を行った。

1　ソ連、英国、フランスは、欧州で他の締約国に対する侵略が行われた場合の軍事援助を含む、相互援助に関する期限5―10年の協定を締結する。

2　英国、フランス、ソ連は、バルト海と黒海との間にあって、ソ連と国境を接している東欧諸国（当時のポーランドとルーマニア――筆者注）が侵略された場合、これらの国に軍事援助を含む一切の援助を与える義務を負う。

ソ連の同じ提案には、英仏との政治協定は軍事協定と同時に調印されねばならないと指摘されていた。

この提案はいずれの国の利益にもなるものであり、西側に完全な保証が与えられていた。それにもかかわらずロンドンやパリは、またもやソ連の提案に応じなかった。なぜか？　それはいまわかっているとおり、必要のさいソ連軍がポーランドとルーマニアを通過するのを、英仏両国が嫌ったからである。

ロンドン、パリと合意を遂げようという、ソビエト指導部のあらゆる期待は、ついえた。そこでソ連は時を稼ぎ、侵略者に反撃する準備を整えるために、やむなくソ独不可侵条約を結ぶことになった。

こうして結局戦争が起こり、戦争を防止することはできなかった。英仏両国が誤りをさとった時は、もう手遅れだった。ヒトラーに門は開かれた。ファシスト国防軍はポーランドを粉砕し、やがてパリ、ブリュッセル、ルクセンブルグ、アムステルダム、コペンハーゲン、オスローを占領し、ダンケルク付近で英軍は海へ投げ出された。大きな犠牲を出したその後の赤軍の対独勝利があってはじめて、英仏、西欧諸国は生きながらえることができたのである。

これらの事実が示しているとおり、当時ソ連は全力を尽くしたにもかかわらず、西側諸国にソ連と手を組んで戦争を防止させるにいたらなかったが、後日ソ連こそが西側そのものを救ううえで決定的な役割を演じたのである。

ソ連憲法

（抜粋）

ソ連はうむことなくレーニン的平和政策を実施し、諸国民の安全の強化ならびに広範な国際協力のために努力する。

ソ連の対外政策は、ソ連における共産主義建設にとって好ましい国際的諸条件の確保、ソ連の国家的利益の擁護、世界社会主義の立場の強化、民族解放ならびに社会進歩をめざす諸国民の闘争の支援、侵略戦争の防止、全面的完全軍縮の達成、社会制度を異にする諸国家の平和共存原則の一貫した実施をめざすものである。

ソ連では戦争宣伝は禁止される。

ソ連と他の諸国家との関係は、平等主権の諸原則の順守、武力行使あるいは武力による威嚇の相互放棄、国境不可侵、諸国家の領土保全、紛争の平和調停、内政不干渉、人権と基本的自由の尊重、諸国民の同権と自国の運命をみずから決定する権利、国家間の協力、一般に認められた国際法の原則と規範、ソ連が締結した国際条約から生じる義務の良心的遂行という基盤のうえに確立される。

（1977年10月7日、第9次ソ連最高会議第7臨時会期で採択されたソ連憲法から）

たえず増える〝人間への投資〟

――ソ連最高会議で採択された八三年度の発展計画と予算

ノーボスチ通信評論員　レフ・ボブロフ

一九八二年11月23―24日の第10次ソ連最高会議第7会期で、一九八三年度ソ連経済・社会発展国家計画ならびに一九八三年度ソ連国家予算にかんするソ連邦の法律が可決承認された。平和と創造の予算である一九八三年予算の福祉重点傾向を中心に解説する。

ソ連は、国民経済の複雑な課題を解決するとともに、経済の発展に多額の投資をしているが、社会的諸計画の実行費は切り詰めないどころか、増やしている。この傾向は、安定した、長期的なもので、もちろん偶然のものではない。この傾向の前提となっているのが、福祉向上の一貫した方針である。

一九八三年度のソ連国家計画と予算を分析すれば、そのことが確認できる。ここで主な支出項目を見てみると、国防費は一九八二年の水準のままだが、教育、保健、体育、国家社会保障の支出、つまり直接の〝人間への投資〟は、一九八二年度より6%増え、官庁の維持費は4%、国民経済への投資は9%増えた。

国民経済への投資の増加分は前年比だけでなく（9%）、絶対額から見ても非常に大きい（一六〇億ルーブル）。経済の進歩に最も重きをおくのは、これが初めてではないが、経済の進歩が、社会・文化施設や社会・文化措置の物質的・技術的基盤の強化に役立つことを忘れてはならない。

たとえばソ連の工業製品のうち、教科書と参考書、学校用設備、楽器、キャンプ用品やスポーツ用品を含む消費物資（〝B〟グループ）は26%を占め、残りの74%は生産手段（〝A〟グループ）である。しかし多くの生産手段は、直接、間接に人々の精神的、肉体的発達に役立っている。たとえば職業技術教育体系における印刷機械、工作機械、その他の労働用具などがそれだ。

軽工業も、重工業も、医療施設や教育施設、児童技術ステーション、学生科学協会、図書館、競技場などの財産を補充している。ソ連では教育と医療は無料であり、これらの施設の財産も無料で利用できる。

一九八三年度の計画によると、〝B〟グループ部門の生産高は3・5%、〝A〟グループ部門は3・1%増える。〝B〟部門が〝A〟部門を上回ることは、一九八一―八五年度および一九九〇年までの期間のソ連経済・社会発展の基本方向に示されたソビエト社会の重点と目的に合致している。

直接の〝人間への投資〟は、一九八三年度予算によると、国家社会保障費が五三五億ルーブル、保健、体育費が一六〇億ルーブル、教育費が四四六億ルーブルで、総額は一一四〇億ルーブル以上である。国営企業とコルホーズ・協同組合企業の自己資金からの支出を合わせると、一九七〇年の七〇〇億ルーブルに対し、一四一〇億ルーブル以上になる。

これらの投資がたえず増えると、どういう結果がでるか？　一九八二年はソ連邦結成60周年なので、実績を総括するのにちょうどよい。ここでその幾つかの実績を紹介しておこう。

ソビエト社会は世界で最も教養のある社会になった。ソ連の普通初等教育はすでに三〇年代に実施され、普通8年制教育は五〇年代に、普通中等教育（10年制）は七〇年代に実施された。現在の高等教育修了者は一九三九年の就業人口の1・3%に対して11%であり、中等教育修了者（8年制を含む）は11%に対し74%である。科学技術、芸術面の創造から組織、管理機能までのあらゆる活動分野での個人の能力と個人の能力発揮の可能性がどれほど広がったかは明らかである。

今日では次のことは信じられないだろうが、それは事実なのだ――たとえば中央アジアと隣のカザフ共和国には一九二〇年以前は大学というものがなかったが、現在は約一三〇校あり、住民一〇〇〇万人当たりの大学生数はスウェーデン、西独、英国、オーストラリアよりも多い。あらゆる必要な専門と資格を持った民族要員が現れたのだ。

いうまでもなくすべての人々のための無料の教育は、社会にとって高くついているだけでなく、ますます高くなっている。しかしその教育は十分に採算がとれる。経済専門家の計算によると、あらゆる種類の教育（資格向上、生産の近代化や職業の変更にともない再教育など）に対する支出は、一九六一―八〇年度に3・7倍増えた。これらの支出が回収されて国民所得に加わる分は、同じ20年間に4・1―4・2倍増えた。投資1ルーブル当たりの効率は3・3ルーブルから5・1ルーブルに増えた。

その場合のメリットは、経済的なものだけでなく、社会的なものであることは言うまでもない。

ソ連の平和運動の特徴

ソビエト平和擁護委員会副議長
パーベル・ナウーモフ

ソ連における平和擁護運動の本質を理解するには、その出発点を考えに入れなければならない。この運動は、心理的にはヒトラーの侵略から祖国を解放するためのソ連国民の闘争の継続であり、平和の条件下での平和のための戦闘である。4年間（一九四一—四五年）、わが国とファシズムとの戦争が続いた。4年間、人々は弾丸や爆弾で、飢えや病気で死んだ。戦争は、わが国で最も多くの人が住んでいた欧州部のほとんど全域を悪魔のローラーで押しつぶし、二〇〇〇万のソ連人の生命を奪ったのだ。

スカンジナビア諸国からの〝平和行進'82〟の参加者たちが、レニングラード近郊ピョートル宮殿の噴水を見物した時、そこからドイツ・ファシスト侵略者が駆逐された直後にロシア文化のこの至宝を撮影した写真が一行に見せられた。誰かが叫んだ。「これこそ原爆のない広島だ！」

そうだ。このような〝原爆のない広島〟を、戦争はわれわれに数百（もし地上から一掃された都市を数えるなら）、数千（もしそれに破壊された農村を加えるなら）も、残したのだ。これらすべてを復興し、生活をゼロから組み立てなければならなかった。

しかしここでもわれわれを邪魔しようとする試みが行われた。カネの全能を確信している西側世界は、〝経済制裁〟から始めた。その目的は、ロシア人に経済を速やかに復興させないことにあった。これに加えて、西側は放送や新聞でソ連に対する本格的な中傷攻撃を開始した。平和はまさに危機一髪だった。米国の参謀本部は、ソ連に原爆を使いたくてうずうずしていた。何しろ、うまい具合に、ロシア人はまだそういう爆弾を持っていなかったのだ。

このような条件下では平和擁護運動を〝組織する〟必要はなかった。全国民が平和の擁護者だったし、また手に武器を持ってでも、ふたたび平和を擁護する用意があった。だからこそ一九四九年に文化人グループがソビエト平和擁護委員会の設置を発表した時、全世論がその委員会に、そこでの積極的活動に結集したのである。

ソ連の平和擁護者の団体——ソビエト平和擁護委員会は何をしているのか？その活動形態はどうなっているのか？

何よりもまずこれは大会であり、大衆集会である。ラジオ、テレビ、新聞雑誌によって全体として情勢によく通じている人々も、このような集会によって、平和への脅威の源泉について追加の情報を入手できるし、自分の意見を述べ、反戦思想の〝貯金箱〟へ個人的貢献を加える機会をもつ。このおかげでソ連国民は、西側の一部諸国と異なり、政治的消極性を一度も知らなかったし、いつでも平和を守るために立ち上がる用意ができている。たとえば、住民の間で署名集めを行う必要が生じた時（一九五一年のストックホルム原爆反対アピール、一九七八年の中性子爆弾反対アピールに応えて）、人々の積極性はとどまるところを知らなかった。

〝平和行進'82〟の参加者たちは、ソビエト平和基金を訪れた。ここへ一日に数十通、数百通振り込まれてくる為替の控えを見て、スウェーデンの女子教員エルニ・フリホルトさんは語った。「私にとってこの為替の控えを見ることは、良い音楽を聴くのと同じです」

もちろん人は皆、自分の連想、自分の感情表現方法を持っている。たとえば私には、これらの為替用紙はソビエト平和基金がまだなかった時代のことを思い起こさせる。ソビエト平和擁護委員会は活動していたが、基金はまだなかった。一体何によって委員会は存在できたのか？　一部の社会団体、たとえば、ソ連作家同盟、労働組合などが提供した資金と、国民からの寄付がその財政を支えていた。本部には職員が少なく、いつも時間に追われていた。しかし、為替は次々と寄せられた。その為替を持って郵便局へ行き、お金を受け取り、それから銀行へ行ってそれを委員会の口座に振り込まなければならなかった。

ソビエト平和基金はこのようにして生まれた。それは国民に〝押し付けられた〟ものではなかった。国民がソビエト平和擁護委員会に基金を〝押し付けた〟のだ。ソビエト平和擁護委員会設立から10年余り経過していた。

為替の控えには短信がある。その幾つかを引用しないわけにはいくまい。

「平和基金に二〇〇ルーブル振り込みます。戦争が人々にもたらした悲しみを覚えています。戦争さえなければよいのに、世界中が穏やかでさえあればよいのに、といま考えています。そのために私は全力を尽くすでしょう。カイイリャ・リャザノワ、ベルフニー・ウファレイ市」

「3人の子の母であり、まもなく祖母になります。毎月自分の給料から平和基金に10ルーブル振り込むことに決めました。私の労働のほんの一部ですが、平和に役立ててください。心の命ずるままに私はこれをしています」（匿名）

一〇〇ルーブルの為替にも短い便りが書かれていた。「結婚式の日——私たちにとって幸福な日に新しい家族より。平和基金への私たちのささやかな心からの支援です。クリュチコフ一家、モスクワ」

「ぼくのパパは亡くなりました。ぼくがパパに代わって年金をもらっています。ぼくとママは2月分のお金（54ルーブル）を平和基金に繰り込むことに決めました。ママの給料で一カ月生活できるからです。戦争はいやです。すべての子どもたちのパパが生きていることを望みます」

これは、アルタイ地方に住む3年生のセリョージャ・ソトニコフ少年の手紙の一部である。

ソ連の平和擁護運動はつねに、国外で起こっていることに敏感に反応してきた。レーガン政府の言動は、ソ連国民にそれほど遠い過去ではない時代を思い出させた。世界情勢のこのような急激な悪化は、わが国の反戦行動を更に積極化した。一つだけ例を挙げよう。一九八二年5月24日から6月1日までソビエト平和擁護委員会のイニシアチブにより平和擁護、核脅威反対の大衆行動週間が催された。工場の職場、学校の講堂、農村のクラブ、広場、野外競技場など、この一万四〇〇〇回以上の大衆集会や大会に、また大衆デモ行進に延べ四八〇〇万人以上の国民が参加した。

ソ連の平和擁護者たちの立場は？

ソ連の世論は、原爆を最初に使った者、巡航ミサイルを発明した者、化学兵器の大量生産を宣言した者に断固反対したし、いまも反対している。われわれは米国の現在の対外政策に否定的な態度を示している。われわれは〝限定〟核戦争のドクトリンにも、〝長期〟核戦争のドクトリンにも反対している。

しかしわれわれは、ソ連共産党とソ連政府が作成した八〇年代の平和綱領を一致して支持している。

これは、ソ連とその同盟諸国が世界共同体に提案した、軍拡競争を停止させ、核破局の脅威を取り除くための綱領である。しかもわが国は前もって妥協的な解決を提案し、事態を停止状態から進展させるために、一方的な措置をとっているのだ。

「しかしソ連にも原爆があり、それは米国の原爆と同じく危険なものではないか。なぜあなたがたは自国の原爆に反対しないのか？」

われわれはソビエト平和擁護委員会で外国の訪問者たちからこのような質問を時折耳にする。

もちろん、原爆も、核兵器も、ミサイルも、ソ連にはある。しかしソ連の平和擁護者たちは事実、これには抗議していない。彼らは知っている——ソ連の各種兵器は西側よりも後に現れた。これらは皆、ソ連では誰もそれから利益を得ない、余儀なくされた防衛手段である。誰に抗議しなければならないのか？

おまけにソ連国民は多くの世代が忘れられない悲しい経験を背負っている。完全武装したヒトラー・ドイツがわが国に襲いかかった一九四一年頃は、われわれはまだ十分に武装する時間がなかった。軍と国民のヒロイズム、軍備面での緊急措置のおかげでわれわれは勝利を収めたが、その勝利の代価はわれわれにとって莫大なものだった。

現在、社会主義諸国に反対する、もちろん、第一にソ連に反対する〝十字軍〟へのワシントンの呼びかけを知っているソ連国民は、なおさら国の強固な防衛を余計なものとは考えていない。ソ連国民は国の安全への配慮に対し政府に感謝している。

このような声も聞くことができる——なぜソ連は一方的に軍縮を行わないのか？　それは深い感動を与える模範となるだろうに！

この方向での措置をソ連は再三にわたって取っているが、ワシントンも、その他の西側諸国の首都もそれに倣おうとする姿勢を示さなかった——たとえば、核兵器を最初に使わないという約束でも、ミサイルの数量の一方的削減でも、軍隊の一方的撤退でも。

ソ連の平和運動の参加者たちはその活動の中で、核戦争の脅威との闘いの複雑な問題のあらゆる側面を理解し、考慮するよう努めている。われわれの見解では、この場合にのみ、闘いは効果的なものになりうる。

われわれは西側の反戦運動の参加者たちが置かれている困難な状況を理解している。運動の平和的な性格を強調しようと努めて、あるいは〝モスクワへの奉仕〟と非難されるのを恐れて、一部の人々は〝双方とも同罪〟という彼らに押し付けられる神話に屈服し、本質において〝同罪〟論の同意語である〝両超大国〟というこうかつな用語を使い、自分たちのスローガンから、平和の基礎を破壊する者たちを正確に名指す言葉を取り除くことを余儀なくされている。

更に別の人たちはもっと先走りさえしている。西側に〝独立した〟反戦運動、すなわちソ連や他の社会主義諸国を参加させない運動を組織する試みが行われているのだ。

それならば、われわれは次のように言おう——われわれは誰にも自分たちを友だちにしろ、と押し付けていない。しかしあなたがたの運動の思想ではすべてがうまくいっているのだろうか？

〝独立した反戦運動〟の思想を海の向こうからの風が吹き飛ばさなかっただろうか？　あなたがたは個々の〝独立した〟、弱体化した部隊によって世界を破壊からもっとよく救済できると信じているのだろうか？　人類史は別のことを教えている。



平和擁護・反戦の集会に集まったモスクワの勤労者



ボルゴグラード（スターリングラード）のメモリアル・コンプレックスに入っているこの破壊された建物の壁には、「第２次世界大戦が最後の戦争になるよう、祈りとしてこの神聖な壁を残そう」という語句が掲げられている。

過去をたどり、未来を語る

——平和、ヤルタの三巨頭、原子爆弾……

フョードル・ブルラツキー
アレクセイ・ブルラツキー



フョードル・ブルラツキーと息子のアレクセイ

戦争と平和の問題——つまり熱核破局の脅威が人類の頭上にダモクレスの剣のようにぶら下がっている現在のわれわれのグローバルな運命の問題には、何人も無関心ではいられない。第２次世界大戦で二〇〇〇万人の身近な人々を失ったソ連国民は、殊の外この問題に強い関心を抱いている。それは古い世代の人たちにも、若者たちにも共通している。

だから、ソ米関係の将来、戦争と平和の問題についての考えを本誌に寄稿してもらいたいという編集部からの依頼に対して、ソ連政治学会の副会長で著名な政治学者、教授、哲学博士のフョードル・ブルラツキー（55歳）が、「そのテーマで息子のアレクセイ（18歳、モスクワ国立大学学生）と話し合ってみたい」と言った時も、われわれは別に驚かなかった。そこで、父と息子の対話を録音したものを編集部で書き写し、それを更に二人にまとめてもらった。ここに紹介したのが、その対談である。

息子　ぼくの行動が何か気に入らないと、お父さんはすぐ、お前は戦争を知らないから道端の草のようにのん気に生きているんだ、と言う（あなたはこのナイーブな比喩を好んで使う）。お前は運命が与えてくれた人生の神聖な時を尊重してないし、気にかけていない、とも言う。確かにぼくは戦争を知らなかった。そのことはぼくの不幸だろうか、それとも幸せだろうか？　しかしぼくは、物心ついてからというもの毎日、戦争のことを耳にしてきた。ぼくが生まれる20年前に終わった戦争のこと、そしてまたひょっとしたら5年後、10年後、20年後に始まるかもしれない戦争のことを。

ぼくはあなたから——あなたは国際問題の専門家だし、あなたの世代は戦争に巻き込まれた——なぜこんなにひんぱんにぼくが戦争のことを耳にするのか、聞きたいのです。これは過去についての追憶ですか？　それとも将来についての〝回想〟ですか？

父　お前が過去の戦争のことを耳にするのは、私たち古い世代が戦争のことを忘れることができないからだ。お前が将来の戦争のことを耳にするのは、私たちが戦争を防止することを望んでいるからなのだ。私の人生や同年輩の



ヤルタ会談でのスターリン、ルーズベルト、チャーチル

人々の人生が厳然たる終末へ向かって進んでいる今、われわれに特にはっきりしているのは、生涯において第2次世界大戦よりも悲劇的な出来事はなかった、そしてその勝利よりも喜ばしい出来事はなかった、ということだ。一九四五年の勝利の日には私はいまのお前よりは少し年少だった。私たちすべてが——若者も娘たちも、子供も年寄りも、兵士も、男たちも女たちも、普通の人たちも偉い人たちも、皆泣いていたのをはっきりと覚えている。幸福のあまり、そして、この日まで生き永らえなかった人々のことを思い、胸をはり裂く悲しみのあまり泣いたのだ。私たちすべてが、傷だらけになり、疲れ果て、同時に力にあふれ、勝ち誇っている全一体、一つの有機体のようだった。このような感情を、私はそれ以後一度も経験したことがない。

息子 老人よ、お前が私を死から

救ったことを何度も聞いた。

何のために？

（19世紀ロシアの大詩人ミハイル・レールモントフの叙事詩『ムツィリ』から）

父 お前の皮肉は的を外れている。私がお前を死から救ったのではない。私が兵士たちに死から救われたのだ。兵士たちは燃えている駅から、すでに火が燃え移った(服がくすぶっていた)少年の私を引っぱり出し、金属棒を満載していた貨車の上にほうり上げたのだ。それは間もなく敵に占領される駅から発車した最後の軍用列車だった。この行為によって兵士たちは、もちろんお前をも救ったのだ。

息子 ごめんなさい。お父さんを怒らせるつもりはなかった。あなたが生き残って、誰よりもうれしいのは、ぼくなのだから……

父 確かに、私は不思議にも生き永らえた。なぜなら私は占領地域に住まずに済んだし、戦争が終わったのが一九四六年ではなく、四五年だった。つまり私の年齢の若者が軍隊へ召集される少し前に終わったのだ。私たちは戦火のなかった中間期に生き永らえることになった。もっとも戦争の稲妻は絶えず空を照らしていたけれどもね。もし、それで誰かを助けることができると信じていたなら、私は勝利のために生命を捨てた人々のために毎日祈りを捧げるだろう。

息子 あなたの言うことが分かるような気がする。

父 しかし、君たちがこのような気持ちで生きることを、私たちは望んで

いない。私たちが望むのは別のこと——戻らなかった人々についての思い出を君たちに神聖に守ってもらいたいということだ。君たちが、戦争はどのようにして始まったのか、なぜ戦争を防ぐことができなかったのか、勝利はどんな代償を払って得られたのかを知るために、だ。

政治家は、過去の戦争を忘れた世代が成長する時、新しい戦争が始まると言っている。君たちの世代は、過去の教訓を覚えていないイワン、フリッツ、ジョンになってはならない。

息子 お父さんに、特に別のことを尋ねたかった。ぼくは三巨頭——ルーズベルト、スターリン、チャーチルのことや、三巨頭がテヘラン、ヤルタで、それから今度は別のメンバーでポツダムで会談し、戦争と平和の運命を決めたことをしばしば聞いたり読んだりした。その後の世代——あなたの世代やぼくの世代がいかに生きるかということは、多くの点で三巨頭の決定に左右された。時折、彼らが大変な巨人だったという気がする……

父 事実、歴史は三巨頭を前代未聞の高さに押し上げた。利害、政治的立場、教養の大きな違いは、少なくとも二つの画期的な決定——戦時の共同行動や戦後の世界についての決定を彼らが採択するのを妨げなかった。

息子 馬と恐れおののくシカを一つの荷馬車につなぐことはできない、と言うじゃありませんか。

父 この三人の中で誰かが恐れおののくシカの役割を果たしたということは、まずないだろう…… 彼らは皆、それぞれが並でない、ユニークな経歴の持ち主で、強い個性を持った真にスケールの大きな人物だった。

息子 彼らが人類に残した平和とはいったい何ですか？

父 その平和は驚くほど安定したものだった。プロの政治家たちの誰一人として、ヤルタがその発祥地である平和のうちにわれわれが今も生きていることを疑う者はいない。例えばヘルシンキ会議の最終文書を見てみよう。欧州は対ファシスト・ドイツ勝利の前のヤルタと勝利後のポツダムで決められた国境内に残った。国連憲章を見てみよう——それは当時と同じ姿で残っている。ヤルタ協定を読み返してみて私が驚くのは、いかに多くの変化が起こったかということではなく——もちろん、これらの変化は巨大だが——、いかに勝利によって多くのことがかちとられたか、ということだ。

息子 しかし西側では多くの人がいまヤルタを非難している、と聞きます。あらゆる将来の不和のタネが播かれたとか、当時すでに三巨頭はいがみ合っていた、特にチャーチルとスターリンがそうだった、とか言っていますが……

父 私にはこのような根拠薄弱な主張は、穏やかに言って客観的でないように思われる。ヤルタは単に異なる性格同士の協力ではなく、異なる社会制度同士の協力の荘重な瞬間だった。

考えてもごらん…… 一九四五年2月3日の土曜日に、言い換えると勝利の3カ月前に、年老いた病める人、フ



1945年春、エルベ河畔でのソ連軍と米軍との出会い



1945年6月24日、赤の広場での勝利のパレード

ランクリン・ルーズベルトは、共同の戦争で未曾有の重荷を負った国の指導者たちとの交渉のテーブルに着くために、小型巡洋艦〝クイーンシー〟に乗って幾つかの海洋を通ってヤルタに到着した。大統領の来訪それ自体が、大きな勇気ある行為だった。ルーズベルトの側近の顧問たちでさえ、彼のロシア行きに反対したのだからね。ルーズベルトはこの問題でも確固たる信念を示した。ほかでもないヤルタが偉大な連合国の協力の頂点となり、戦後史の最重要の事実となったということでは、歴史は少なからずルーズベルトのおかげをこうむっている。

息子　3人の指導者が全世界の将来のことをどう考えたか、将来をどう想像したか知りたい。

父　考えた？

息子　いや、何と言ったか……

父　彼らが何を言ったかは知られている。

会談の最終日に——それは2月の10日だった——重立った人たちだけが出席した晩さん会が催された。彼らは交互に乾杯の音頭を取った。これも将来についての言葉だった。

チャーチル首相が最も感傷的だった。彼は語った。「われわれは皆、輝かしい将来の展望が開けている山の頂上に立っている……われわれはいま、歴史のいかなる時よりもこの目標に近付いている。もしわれわれが与えられた可能性を見逃したとしたら、歴史がわれわれを決して許さない悲劇となるだろう」

ルーズベルトは、ここでは家庭的な雰囲気を感ずる、まさにこれによってわれわれの国の間に存在する関係を特徴づけたいものだと語った。彼はこの3年間に世界に起こった大きな変化と、より大きな変化が前途に控えていることを指摘した。「われわれの課題は、地球上のすべての男女、児童に安全と福祉を保障することである」と、大統領は語った。

三大国間の同盟を祝して乾杯の音頭を取ったスターリンは、だれにでも明白だった共通の敵を打ち負かすという単一の目標が存在した以上、戦争中は団結を保つことはむずかしくなかった、さまざまな利害が同盟諸国を分裂へ押しやる戦後には、一層困難な課題が持ち上がろう、と語った。彼は現在の同盟がこの試練にも耐えることができるだろうという信念を表明した。そして、「われわれの責務は、平和時でもわれわれの関係が戦時と同じように緊密さを保つように努力することである」と述べた。

息子　ルーズベルトは心からそう言ったと思いますか？

父　私はそう思う。彼があと数年でも生きていたら、連合諸国間の利害とイデオロギーの深刻な相違はあったにしろ、多くのことが違ったようになっただろうね。

息子　だが彼はまもなく死んだ……

父　そうだ。ヤルタ会談のわずか2カ月後の一九四五年4月12日にルーズベルトは気分が悪くなった。「頭が痛い」と、わずか数語言うか言わないうちに意識を失い、死んだ。医師たちは脳出血と診断した。

ルーズベルトが死んだ時、わが国の各新聞が一面に黒枠付きの彼の写真を載せたのを覚えている。わが国の多くの人々は、これはソ米関係にとって、また全世界にとって大きな損失だと考えた。全くその通りだった。

息子　しかしぼくには、これらの巨頭たちは盲目だったのではないかという気がすることもある……

父　なぜ盲目なのかね？

息子　彼らには将来が見えなかったからです。たとえば爆弾と……爆弾の役割が。

父　どんな爆弾？　原子爆弾？

息子　ぼくは外の爆弾は知らない。もっとも、もう一つ、水素爆弾もある。レーザー爆弾もあるそうですが。しかしこれは皆同一です。

父　そうだ、私たちには爆弾についで別の感覚があった。私たちの家屋に落ちた爆弾は、別のものだった。

息子　原爆のことを聞いた時、あなたは何を感じましたか？

父　大変なショックを受けた。その後しばしば夜、夢を見た。全世界が、地球全体が爆発して、火の玉になる。ずっとなって目を覚ましたものだ……

息子　ぼくはそんな夢を見ない。子供の頃から爆弾のことを知っていて、爆弾に対して日常的なものという態度を取ることに慣れている。

しかしぼくが言いたかったのは、私たちの感覚のことではない。ルーズベルト、チャーチル、スターリンが原爆にどんな態度をとったか、非常に知りたいのです。彼らは戦争と平和にとって、人類のその後の全生活にとって原爆が持つ意義を予見できたのでしょうか？

父　この質問には、絶対的な正確さで答えることができない。周知のように、一九三九年8月にアルバート・アインシュタインはルーズベルト大統領あてに原爆の製造に取りかかるよう提案した手紙を送った。彼はその理由としてドイツで同様の作業が行われていることを挙げた。これがルーズベルトに有名なマンハッタン計画を組織させるきっかけになり、結局は原子爆弾の開発をもたらした。

息子　ルーズベルトはドイツ人か日本人の頭上に爆弾を投下しようと望んだのか、それとも望まなかったのか？

父　これは歴史のなぞになっている。もしかしたら彼は、一部の顧問たちが提案したように、爆弾の威力の誇示をどこかの砂漠地帯にとどめたかもしれない。ルーズベルトがヤルタにいた時は、原爆が開発されるかどうかわかっていなかった。当時米国人たちは、もしソ連が対日戦争に参加しないなら、この戦争は一九四七年まで長引き、米国は少なくとも更に一〇〇万の人命を喪失するだろうと考えていた。だからルーズベルトは全力を尽くしてソ連の対日戦争参加についてスターリンの同意をかちとろうと努力した。彼は何よりもまず、そのような同意が得られたことで、ヤルタの結果に深く満足したのだ。

息子　スターリンは原爆にどういう態度をとったの？

父　チャーチルは興味深い出来事を回想している。ポツダム会談ではトルーマン新米大統領の前に、原爆実験の成功についてスターリンにどのように通告すべきか、という微妙な問題が持ち上がった。

ある会議を終えて三巨頭は、会談の会場になっていた宮殿に接する公園に集まった。トルーマンはスターリンに近付いた。チャーチルは遠くから彼らの会話を観察していた。

「わが国はいまや極めて威力の大きな爆弾を持っている」と、トルーマンは語った。参加者たちが証言しているように、スターリンは全く落ち着いて大統領の話を聴いていた。トルーマンは、自分がウラン爆弾とか、原子爆弾とかの名称を挙げなかったので、スターリンはそれがどんな爆弾だか分からなかったのだろう、という印象を抱きさえした。「それでどうでした？」と、チャーチルはすぐにトルーマンに聞いた。「スターリンは私に一つの質問もしなかった」と、大統領は答えた。

トルーマンは「ロシアの首相は特別の関心を示さなかった」と、主張した。「私はスターリンが告げられた言葉の意味を全く理解しなかったのだと確信した」と、チャーチルはのちに自分の回顧録の中で書いた。彼らは間違っていたのだ。

息子　スターリンは原爆のことを知っていたの？

父　ジューコフ元師はその『回想録』の中で次のようにこのエピソードについて語っている。「伝えられたところによると、会議から帰ったあとスターリンは、トルーマンとの間に交わされた会話をモロトフに伝えた。モロトフは〝自分で自分の値段をつりあげようというんでしょうよ〟と答えた。するとスターリンは〝つり上げさせておくさ。仕事の促進について、クルチャートフ——（注）と話し合う必要があるだろう〟と言った」

（注）イーゴリ・クルチャートフ——マンハッタン計画と同様のソ連の計画の指導者。

息子　当時、原爆を禁止することは不可能だったのですか？

父　当時のことを思い出してみよう。トルーマンの命令で米空軍は一九四五年8月6日と9日に広島市と長崎市に2個の爆弾を投下し、四五万人の平和な市民を殺傷した。戦争の経過はこのような残酷さを必要としていなかった。日本はそれでなくとも降伏する用意があった。だが、米国の支配者たちは日本の都市に爆弾を投下することによって、ソ連をはじめ全世界を脅そうと望んだのだ。しかし一九四六年にはすでに原爆開発の技術を持ったわが国は、原子兵器の製造と使用の完全禁止について米国に提案した。この提案はトルーマンや西側世界の他の政治指導者たちによって拒否された。こうして20世紀の歴史の車輪を平穏な方向に戻すチャンスは永久に失われてしまった。

息子　しかし、核戦争は実際には起こらなかったじゃありませんか？



ソ連の原子兵器の開発を指導したイーゴリ・クルチャートフ・アカデミー会員（左）とロケット・システムの設計主任セルゲイ・コロリョフ・アカデミー会員（一九四〇年代末の写真）

父　考えてみよう——なぜ核戦争を避けることができたかを。戦争が無意味になり、互いに滅亡する恐れがあるという理由でか？　勝利を収めることを不可能にした両体制間のこのような力関係が出来上がったからか？　主要な安定要因は、現在、世界におおよその均衡が存在するということにあるだけではない。多くの大国や国民が戦争に反対して闘ったからこそ、戦争を防止することができたのだ。わが国の積極的平和愛好政策は、現代の核以前の戦争のあらゆる恐ろしさを味わった国民は自己をも、世界をも核戦争に陥れることを望まない、この問題では無責任や幻想を許さない、ということに大いに立脚している。

息子　事態はもっと簡単に説明できるかもしれませんね——世界には新しいヒトラーが、戦争を決心するような者がいなかった、と。

父　事実、戦後はそのような指導者はいなかった。しかし、ヒステリーを起こしたら先制攻撃をやりかねないようなパニック政治家はいた。

それでも良識が勝利した。どんな情緒もそうだが、恐怖は政治における最悪の助言者である。政治で大事なのは、計算であり、原因と結果の冷静な理解である。核戦争を始める国がどうなるかということの理解である。

息子　しかし良識は熱核兵器競争の中止を保証しなかった。大体、この競争を停止させることができますか？

父　停止のメカニズムは極めて複雑だ。自転車でさえ、スピードを出している時は停めるのが非常にむずかしい。列車を停めるのはもっと複雑だ。飛行中の飛行機を停めるには、特別の工夫をこらす必要がある。軍拡競争は信じられないほどテンポを速めており、それを停止させるには特別の努力が必要だ。

息子　どれほどの爆弾がいま蓄積されているの？

父　およそ二万個だ。その一つ一つが一〇〇〇のヒロシマを破壊できる。

息子　つまり全世界を破壊できるわけ？　地球はどうなるの？

父　すべての爆弾が爆発する時、生物圏がどうなるかは、誰も知らない。生態学者は生物圏の滅亡を予言している。

息子　何のためにそんなに沢山の爆弾があるの？　良識に矛盾しているじゃないですか。何のためにお互いに何回も殺さなければならないのですか？

父　戦争のメカニズムは良識とはあまり一致しないものだ。トルストイは『戦争と平和』の中でこのことを立派に証明した。いろいろな出来事の重なり合いがあり、それは計画や構想や明確に立てられた目標よりも強力だ。

息子　人類はいろいろな出来事、宿命に支配されていると考えますか？

父　外国の同僚たちからそういう意見を聞いたが、問題はもちろん、宿命にあるのではない。彼らは地球は更新を強く望んでいる、氷河期かノアの大洪水の前夜のように、と語った。

息子　それでは問題はどこにあるのですか？　あなたは軍国主義者の動機を理解していると思いますか？

父　簡単には言えない。しかし、軍国主義のばい菌に感染した人々が全くわれわれを理解していないのではないかと思うことがよくある。ほとんど40年間、彼らは私たちがいまにも彼らを攻撃してくるということを（諸事実に反して）頭にたたき込んでいる。「彼らは強力である——つまり侵略者である」というのだ。このように彼らは私たちのことを考えているが、それはひどく間違っている。私たちは、ヒトラーがソ連はまだ戦争の準備ができていないと見て、われわれを攻撃したのを覚えている。私たちはこれがどれほどの犠牲をもたらしたかを覚えており、だから新たな誘惑に駆られる者が一人も出ないようにするために、力を保持しているのだ。しかし私たちに対する人為的に高められた恐怖——これは一つの側面だ。もう一つの側面は、客観的に出来上がった現実を無視して、世界に君臨しようという熱望である。

息子　地球上の誰かが戦争を望んでいる、と考えますか？

父　一般の人々、庶民はもちろん戦争を望んでいない。それに圧倒的多数の指導者もまた望んでいないか、または恐れている。しかし狂気じみた連中は相変わらずいるし、それは将軍たちの中にいるだけではない。だが問題は、人々の直接の希望または不本意にあるのではない。問題は、それぞれ論理を持っている行動にある。

息子　原子兵器や熱核兵器の競争のことを言っているのですか？

父　そうだ。この競争それ自体が、絶えず世界を戦争に近付けている。この競争にはますます新しい国が加わっている。ここでは新しい、もしかしたら主要な危険が熟している。

息子　二〇〇〇年までにどれほどの爆弾ができますか？

父　約四万個だ。

息子　友人たちはよく、第1次世界大戦後の失われた世代と異なり、われわれは自分たちを測られた人生を持つ世代と感じている、と言っています。

父　測られた？

息子　そう、短くなった人生、核戦争によって測られた人生です。ぼくたちには過去の世代のように、完全な一生を全うする運命は与えられていない。この意味でぼくたちは戦争開始前の世代です。ぼくたちの後には誰も、何も存在しません。そうじゃないですか？

父　私はそうではないと思う。私は、人類には自滅を許さないための、十分な良識があるという期待、いや信念さえも持っている。

息子　よく言われることですが、第2次世界大戦当時、米国とソ連を団結させたのは、共通の危険と共通の敵の存在だった。だがいまはソ米間には共通の危険や共通の敵はない、そこから不可避的な対立も生まれるのだ、と。

父　このテーゼに反論を試みよう。ソ米両国にとっての共通の脅威は、反ファシズム闘争の時代よりも現在のほうが数十倍も大きいと、あえて主張しよう。これは全滅の脅威である。特に危険なのは、世界戦争がいつ、どのようにして始まるか、誰にも分かっていないことだ。警戒システムの技術上の欠陥、どこか第三国の挑発的意志、局地戦争のエスカレーション、一人の将軍の突然の錯乱——何でもこの戦争のきっかけになる。

熱核兵器は試射場を探し求めているが、地球全体だけがこのような試射場になりうるのだ。その時には、かって原因不明で恐竜類やマンモスが死滅したのと同様に、人類そのものの死滅が現実となろう。

この恐るべき危険は、破局から救うためのソ米両国、両体制、全人類の努力を結集するための十分な理由である。

息子　三巨頭の精神が勝利を収めると思いますか？

父　それを期待している。異常な脅威は、世界の指導者たちを世界政治の稜線に押し上げる（第2次世界大戦とその勝利がこれを示した）。世界はますます核戦争の無意味さの理解を深めている。

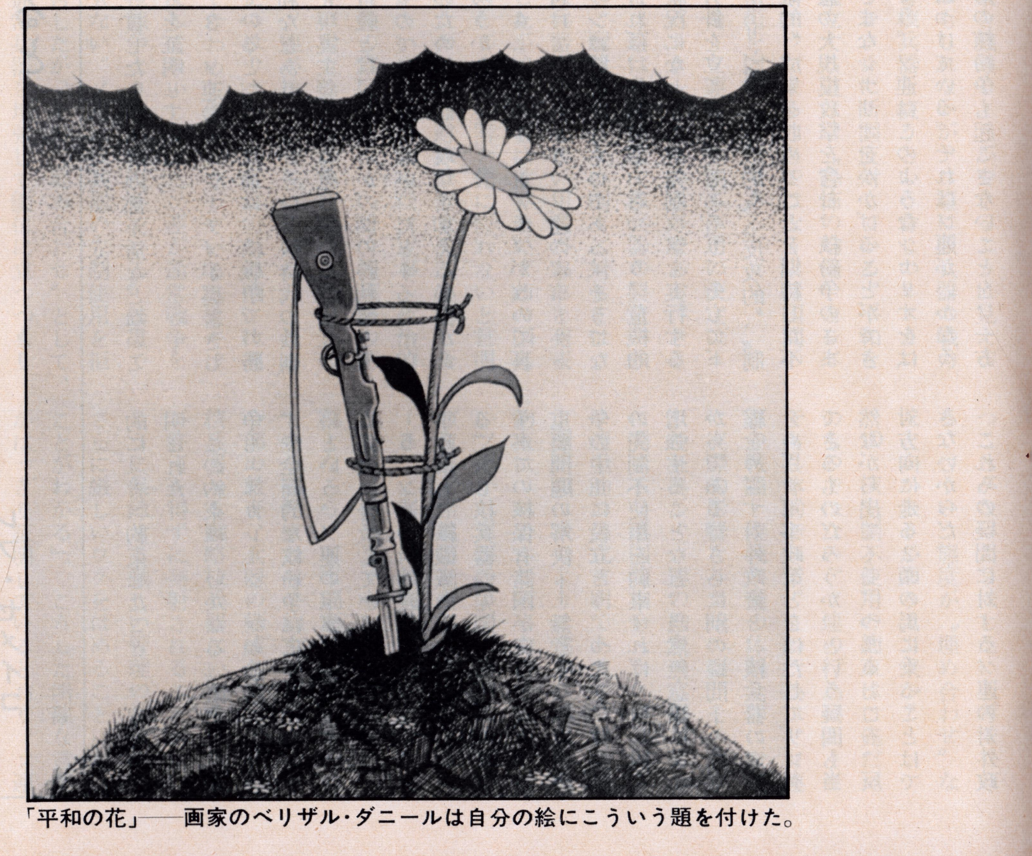
いま全世界で社会的積極性の爆発が起こっている。一般の人々が、平和の事業はいまや自分たちの手に握るべき時だと理解しはじめた。進歩的な政策と大衆的積極性は、平和の主要な保証である。もしこの二つの要因が結合され、活力を持ち、効果的であるならば、戦争は防止することができよう。

息子　ところで最も近い将来について、予測するのは無理ですか？

父　私はあえて言うが、世界には、核戦争の開始を望み、同時にそれを実行できるような勢力はいまのところ存在しない。

息子　もっと先については？　その先は、ハムレットが言ったように、沈黙ですか？

父　もっと先のこと——それはもう、君たちの世代しだいだろう。



「平和の花」——画家のベリザル・ダニールは自分の絵にこういう題を付けた。

核兵器の先制不使用

――ソ連の約束を軍事的に見ると

軍事科学博士候補、ソ連科学アカデミー・米国カナダ研究所主任研究員
レフ・セメイコ

どの政治行動でもみな、それを軍事的に見ると特別の意義をもつ。これらの軍事的見地は、人々の頭にこびりついている核による絶滅の恐怖を、時には強め、また時には弱め、政治行動の〝顔〟を判断する好材料になる。

ソ連の核兵器の先制不使用の決定は、全人類を覆うこの恐怖を軽くしようとするものにほかならない。ソ連は、自国の核戦力を政治的抑圧（核による脅迫）の手段に使おうとは考えていないし、ましてや国際的対立を軍事的に解決する積極的手段に使おうなどとは思っていない。これがソ連の決定の政治面であるだけでなく、政治面と固く結びついている軍事面でもある。核戦争を防止するきわめて重要な措置という点から見て、この決定は少なくとも10の重要な軍事面をもつと言ってよいだろう。

1　この決定は、ソ連の軍事ドクトリンが極めて防衛的な性格のものであることを裏書きしている。拡張をねらった予防戦争がソ連と無縁であるのと同じく、予防核攻撃もソ連には無縁である。

2　核兵器を先制使用しないというソ連の約束は、核兵器のもつ巨大な掃滅的能力をより完全に認識した結果である（ついでながら核兵器を最初に開発したのはソ連ではない）。また東西の現在の軍事・戦略的均衡がもつ重大な意義を、現実主義的に評価した結果でもある。いろいろな理由からこういう均衡全体は、ミサイルを先に発射する側に別になんの戦略的な利益ももたらさない。ソ連は軍事的優位という概念をしりぞけており、国連総会の壇上で述べられたソ連の約束は、改めてこのことを裏書きしている。そのうえ核戦力で優位に立とうとすることは、先制核攻撃がソ連のねらいだという考えを西側の人々に植えつけるのがおちである。こういう核攻撃の考えそのものを捨てることは、ソ連の軍事ドクトリンの裏に何もなく、そのドクトリンは一貫したもので、内部矛盾などないことを証明している。

3　ソ連のイニシアチブが裏書きしているとおり、ソ連は、核戦争での勝利などありえないという核時代の鉄則を現実主義的に考慮している。相互の自殺とは、どちらかの側の勝利をさすものでは決してない。だとすると、何のために先制核攻撃を加える必要があろうか？

4　ソ連のイニシアチブが改めて裏付けているとおり、ソ連の軍事ドクトリンは防衛的なものである。そうでなければ、先制攻撃力をつくり、危機的状況になったとき先制攻撃を実行する方針を立てるはずであろう。そしてドクトリンは、〝示威的〟、〝反攻的〟、〝制限的〟成果を収めることを期待した不意の大規模攻撃を含む、核紛争のさまざまなシナリオをかかげることができよう。ソ連はこのようなシナリオをはねつけている。それはソ連がいかなる形の核紛争も起こさないことを、一方的に（！）約束したことで、改めて証明された。

この約束は、いかなる〝限定〟核紛争もエスカレーションの論理により必ずや全面的な核紛争に広がるに違いないという、ソ連の軍事・戦略基本方針に完全に合致している。

5　ソ連の対外政策だけでなく、軍事政策も、核破滅の防止をめざしている。もし核兵器の先制不使用の約束をすべての核保有諸国が支持すれば、最重要問題の解決――無意味な核軍拡競争の中止に役立とう。つまり、核兵器の先制不使用を約束すれば、核兵器を増強することなど、当然無意味になるからである。さらに別の疑問――核軍縮をめざす対外政策と、核兵器の増強をめざす軍事政策とをはたしてリンクできるものだろうか、という疑問も当然ながら出てくる。つまるところ、反対方向に走る2頭の馬に乗ることはできないからだ。

これらの疑問に対するソ連の対外政策と軍事政策の答えは一致している。つまり平等と同等安全の原則に基づいて、核軍備を抜本的に削減するだけでなく、核戦力を最初に使わないことを約束して、この削減の動きに拍車もかけなければならないということである。その約束がたとえ一方的なものであろうとも、その約束は手本となるに止まらず、ソ連の政策の真の動機を正しく理解するための土台にもなりうるし、またならねばならない。

どんな場合でもソ連は進んで行動し、核戦争の脅威を弱めなければならない。ソ連は、どちらかの側の急襲による瞬間的な〝輝かしい軍縮〟よりも、たとえ非常に困難ではあっても、互いがせん滅することのない双方の軍縮交渉に重きをおいている。

6　新たなソ連の約束が戦略的安定性を強化することも、かなり大事である。つまり、もしソ連が核先制攻撃構想そのものに反対なら、他方は危機的状況になったときに予防攻撃を加える論拠の全部もしくは一部なりとも失う理屈になる。ところでそうなると、将来危機的状況が起こった場合、その危機を解決するためにまず使われるのは、政治的テコであって、軍事的テコではなくなる。しかしそのためには、ソ連の潜在的軍事力を考慮するだけでなく、ソ連の意図をもちろん重視しなければならない。ソ連の約束を単なる言葉だけの善意のものとは見ずに、その約束をしかるべき実際的な意義をもつものと見なければならない。たとえそういう約束に絶対的な信頼を寄せなくてもである（おそらく絶対的な信頼は必要ではあるまい。そのうえ不信の氷が悲しい現実なのである）。しかし信頼を十分に高めて、ソ連の約束が戦略的安定を保つのに必要なよい軍事・政治的効果をあげるようにしたいものである。

7　ソ連の約束は戦略バランスの現実的安定への貢献でもある。先制攻撃を目標にすることは、その構想そのものから見て、当然他方の軍事施設、まず第一に戦略戦力の大半を急襲して破壊する改良型のミサイル・システムの開発と結びつかないわけにはいかない。しかしソ連の約束は、ソ連がこういう道を歩む動機をもたないことを物語っている。ソ連の戦略戦力とは報復（報復だけである！）攻撃の戦力である。

8　ソ連はこのイニシアチブを、世界の軍事・政治情勢がきわめて複雑な時期に発表した。いま核兵器を保有する数々の潜在敵がソ連に対抗しており、その敵の一部は膨大な数の通常兵器を展開する潜在力をもっている。核兵器を最初に使うというはっきり表明された脅威は、ソ連の防衛力を抑制する効果を強めることができるように見えるかもしれないが、ソ連は核兵器の戦力と核兵器を使うという脅しのエスカレーションに断固反対している。平和を確立する道は、〝恐怖の均衡〟をレベルアップすることではなく、諸国間の信頼を固めることである。

9　ソ連の核先制不使用の決定はユニバーサルな性格のものである。さきにソ連は自国領土で核兵器の製造、取得、配置をやらない国々に対しては、核兵器を使用しない用意があると発表したが、こんどは世界のいずれの国に対しても核兵器を先に使わないと言明したのである。核兵器を先制使用しないというソ連の約束は、軍事・政治的信頼の雰囲気をつくって、核破滅の防止に役立とうという行為である。

ソ連が核兵器を先に使わないと決めたのは、ソ連の通常兵力が他国に比べてきわめて優位に立っている結果では決してないし、またソ連が通常戦争を核戦争よりも〝重視している〟結果でもない。ソ連は核兵器の先制使用を拒否したが、その〝埋め合わせ〟として、通常兵器を増強して優位に立つつもりはない。ソ連は通常兵力の相互削減を主張してきたし、いまも主張している。ソ連は欧州で通常兵力を10％、20％、さらには50％までも削減する用意があり、しかも一方の側が軍事的優位に立つことがないようにしたいと考えている。こういう態度が〝埋め合わせ〟などとかかわりがありえようか？

10　核先制不使用の約束は口先だけのものではない。ソ連の行為はあくまでも具体的である。この行為は、ソ連軍の戦闘・作戦準備の体制全体にすでに実際的影響を与え始めた。その何よりの証拠が、ソ連の約束の応用軍事面に関するソ連国防相D・ウスチノフ・ソ連元帥の公式言明である。ウスチノフ国防相は次のように述べた。ソ連の約束は、「こんご軍事力を準備するさいソ連が、軍事紛争が核紛争に広がるのを防ぐ諸課題を重視することを意味する。これらの課題はいろいろな形をとるが、いつまでもわが軍事活動の一部となろう。軍事問題に多少とも通じている専門家なら、約束が軍部隊や司令部の教育、兵器の構成の決定、戦術核兵器から戦略核兵器にいたる核兵器が許可を得ずに発射されることがないように保障する厳しい管理の組織に、さらに厳しいワクをはめることになることがわかる」。こうした明確な言葉がはっきり証明しているとおり、ソ連では政治活動家だけでなく、軍人も、誰かが恐怖の余り核のボタンを最初に押せばすぐひきちぎれるような髪の毛に、平和をぶら下げてはならないと固く信じている。

現段階のソ日経済関係



ソ連閣僚会議第一副議長　イワン・アルヒポフ

一九八一年のソ連共産党第26回大会は、一九八一―八五年度および一九九〇年までの期間のソ連の経済・社会発展の基本方向を採択した。5カ年計画の作成にあたってわれわれがまず第一に目標としたのは、国民経済の安定した発展、科学技術の進歩の促進、集約的発展の道への経済の移行にもとづいてソ連国民の福祉をさらに向上させることであった。

この5年間に工業生産高を26％増やし、固定フォンドの更新を1倍半に速め、既存の生産設備のより完全な利用、その改修と近代化に特に注意を払って投資を大幅に増やすことが予定されている。

5カ年計画は、エネルギー産業、石油・ガス・石炭産業、製鉄と非鉄冶金、化学工業と石油化学工業、機械、金属加工その他の諸部門の一層の発展を予定している。

燃料・エネルギー問題の解決にあたっては、何よりもまず東部および北東部での石油・ガス・石炭の採掘の発展が重視される。電力産業部門ではシベリア、極東、中央アジアに一連の大容量水力発電所と火力発電所の建設が予定されている。一九八五年の発電量は一兆五〇〇〇億kW時をこえる見込みである。

ソ連では二〇〇〇年までの長期エネルギー計画が作成されているが、この計画はソ連一国の枠内にとどまらず、欧州のコメコン諸国の経済発展に伴うエネルギー需要の増加をもカバーすることを見込んだものである。

今次5カ年計画の経済戦略の特色は、国民経済全体の発展に対する総合的アプローチにある。エネルギー計画のほかに長期食料計画が策定されており、その他の諸問題も解決されつつある。

対外経済交流は経済計画の実現で積極的な役割を演じ、国際分業の利点の広範な利用を可能にするものであると、われわれはつねに考えてきたし、今もそう考えている。トラブルをひきおこし妨害しようとする一部の帝国主義国の特定層の試みにもかかわらず、ソ連と諸外国の貿易・経済交流は順調に発展している。

第11次5カ年計画では、ソ連の外国貿易高を第10次5カ年計画の実績の1・3倍ないし1・4倍に増やす予定となっているが、最初の2年間の実績はこの目標が十分に達成可能であることを裏付けている。

全く当然のことながら、まず第一に重視されているのは社会主義諸国との協力の全面的な広範な発展である。発展途上諸国との貿易・経済交流、科学技術その他の交流の発展も計画に盛り込まれている。相互の主権尊重と内政不干渉の原則を守り、対等のパートナーとしてわれわれと協力することを望む資本主義諸国とも、われわれは貿易し、幅広い分野で協力を行う用意をもっている。ソ日貿易・経済関係もこの原則にもとづいたものであって、われわれは貿易拡大ばかりでなく、新しい協力形態の探求と発展をも念頭に置いて、これを一層発展させる用意をもっている。

ソ連の貿易相手国となっている先進資本主義諸国の中で、日本は西独、フィンランド、フランス、イタリアと並んでトップグループにある。ソ連の対日輸出の主要品目は木材と用材、石油と石油製品、綿花、貴金属とその製品などであり、日本からは鋼管、鋼材、機械・設備、消費物資、化学製品などを輸入している。

一九七六―八〇年にソ連は日本からバンク・ローンのもとに総額二〇億ルーブルをこえる尿素プラント、クロロプレン・ゴムや大型タイヤのプラント、ガス精製装置その他の設備を買い付けた。

一九八一年には約一六億ルーブルのバンク・ローンが日本での設備買い付けに利用された。

一九八二年に新しい大型契約が成立

したが、その中にはブタジエン製造設備やウレンゴイ＝ソ連西部国境間のガスパイプライン用の大径鋼管製造設備が含まれている。一九八三年にコマーシャル・クレジットで一〇〇万tの大径鋼管をソ連に輸出することについて合意が成立した。

ソ日沿岸貿易も発展している。

両国間の貿易・経済関係には、高揚もあったし、落ち込みもあった。

一九八一年には顕著な前向きの動きが見られた。5月にモスクワで一九八一―八五年度の第4次貿易支払5カ年協定が調印されたが、これは近い将来における互恵の貿易・経済交流の継続のためのよい基盤となるものである。

一九八一年度のソ日貿易高は三〇億ルーブルを超えた。その内訳は、ソ連の輸出八億ルーブル、輸入二二億ルーブル余りである。

ソ連と日本の接触は、貿易・経済関係だけに限られてはいない。科学技術交流も順調に発展している。ソ連のさまざまな分野の代表団や専門家が毎年多数日本を訪れており、日本の多くの代表団や学者もソ連を訪れた。両国間には科学技術協力協定が結ばれており、それに従って一九七八年と七九年に経済・科学技術協力ソ日政府間委員会の会議が開かれた。文化交流は積極的に拡大している。親善団体、婦人、青年その他の社会団体ならびに姉妹都市や地方自治体間の交流は、重要な意義をもっている。

貿易、経済、科学技術の交流をさらに拡大する上で、ソ連は次のような措置をとる用意をもっている。

(1)　双方の利益を考慮に入れた上で、バム鉄道の完工に伴って出てくることが予想される経済活動の分野での日本の諸機関や企業との協力を一層発展させる可能性を検討すること。

(2)　サハリン島陸棚の石油・ガス鉱床の探査を完了し採掘設備を建設する上での協力に関する交渉を続行すること。

(3)　サハリン島の炭田開発、バム鉄道沿線地域の燐灰石と霞石の鉱床の開発に日本商社が参加し、農工コンプレクスの発展、製材、林業の廃物の加工などのための設備の供給に参加する可能性を検討すること。

(4)　両国間でそれぞれ相手側の二〇〇カイリ専管水域内での漁獲に関する協定を締結することについて交渉を行うこと。

これはソ日両国民のよき相互理解と善隣関係の強化に役立つだろう。



シベリア横断ルートを経由して日本から欧州へ輸送されるコンテナは、1982年9月に通算100万個の大台を突破した。写真はソ連極東のウォストーチヌイ港で陸揚げされる100万個目のコンテナ。

才能を祖国に捧げた作家

――アレクセイ・トルストイ生誕100周年に寄せて

ニコライ・クルジコフ　ボリス・レオーノフ

ソ連の文豪や世界の文豪の中でも、アレクセイ・ニコラエビチ・トルストイ（1883年1月10日―1945年2月23日）は傑出した地位を占めている。アレクセイ・トルストイの文筆活動は10月革命以前から始まっているが、本人は自分を新社会主義国家の作家であると見なしていた。

50歳の誕生日に作家は告白した――「10月革命が芸術家としての私にすべてを与えてくれた…

1917年まで、私はだれのために書くのかを知らなかった……いま私は、私に必要な生きた読者、私を豊かにしてくれる、そしてその人のために私が必要な生きた読者を感じている。25年まえ、私は愉快な仕事、何か気晴らしのようなものとして文学に手を染めた。いま私は文学を、世界的な文化を獲得するためのプロレタリアートの闘争の武器だと考えている。だから私は、この闘争に全力を捧げることができるし、全力を捧げているのだ」



アレクセイ・トルストイ（1943年、モスクワ）

あり余る才能

アレクセイ・トルストイは自分の才能を驚くほど気前よくばらまいた。彼と無縁だったような文学ジャンルは見あたらない。彼は多くの作家たちと同様に、詩から始めた。一九〇七年に最初の詩集が出たが、そのとき彼は24歳だった。作品はあまり力強いものではなく、模倣的なもので、詩集はすぐに忘れられてしまった。だがアレクセイ・トルストイは間もなく、こんどは散文家として、文学界で話題になり出した。当時すでにロシア中の関心を集めていたマクシム・ゴーリキーは、ある手紙の中で次のように書いている――「新しいトルストイ、アレクセイ・トルストイに注目してください。疑いもなく、しっかりした、力のある、現代貴族の心理的、経済的崩壊を恐ろしいまで正確に描き出している作家です」

良心の苦悩の中を

一九一八年、アレクセイ・トルストイは家族とともにオデッサにいた。ここで彼は多くのことを体験する。飢え、新しいソビエト国家では自分のような作家は必要ないという意識、未来に対する確信の喪失。彼は周囲で起こっていることを理解するのをやめた。古い世界の崩壊は彼自身の中に反映された。自分の姓のまえにいつも付記していた〃伯爵〃という称号は、つい最近まで多くのことを意味していたが、いまとなっては何の意味も持たなかった。そのうえ、個人的な、家庭の悲劇が重なった。兄弟が2人死に、飢えのために多くの親類が死んだ。これらすべてが一緒になって、作家のその後の運命に影響を与えずにはおかなかった。アレクセイ・トルストイはロシアを去った。

この瞬間から、革命と人民の叙事詩――悲劇『苦悩の中を行く』の未来の作者の良心の〃苦悩の遍歴〃が始まった。

外国での生活は、アレクセイ・トルストイが自分とロシアの切り離しがたい結びつきを自覚するのに役立った。ときが心の傷を癒し始め、自分の運命を、自分が属する人民の新しい運命との統一の中で認識する展望を開いた。個人的な悲しみのための痛みに代わって、極めて困難な状況の中に置かれながらも屈服せず、干渉者や国内の反革命家たち、内乱や飢えに打ち勝った人民を思う痛みが心を占めるようになった。当時すでにアレクセイ・トルストイは、彼の中に〃赤い伯爵〃〃共産主義者の手先〃を見ていた亡命家たちとは一線を画していた。

祖国から遠く離れて暮らすことは、ますます困難になった。アレクセイ・トルストイは妻に言った――「私の生活は墓守りのような生活だ。いつも朽ちるべきものの臭いが感じられる。幻覚が起きるほどだ。ここには仕事をすべきことがないだけでなく、呼吸すべきものもない。ここから逃げ出さなければならない……」。作家は心の奥底で、迷いに苦しめられていた。

「故郷へ帰っても、優しく迎えてもらえないかもしれないと思われた。あなた方なしでやって来た、あなた方なしでもやって行けるだろう、と言われて」

ロシアへもどるという決心が固まるまでには長いことかかった。アレクセイ・トルストイが決心を明かすと、亡命者たちは一斉に攻撃した。一九二二年4月、彼は『N・V・チャイコフスキーへの公開状』を発表した。N・V・チャイコフスキーはロシア亡命者の指導者の一人だった。アレクセイ・トルストイはこの中で、外国にいるロシア亡命者たちの立場に対する自分の観点と新生ロシアに対する自分の態度を述べた。アレクセイ・トルストイは以前に一度ならず、ソビエト政権とその政策が自分には受け入れがたいものであることを表明して来た。プロレタリア革命と国内戦の諸事件は、彼の個人的な運命と彼の最も親しい身内や友人たちの運命に、あまりにも鋭く、劇的に作用した。だがそのあと、彼は共産主義者たちの中に、ロシアの国家機構を再建することのできる打ち破りがたい力を感じた。それはロシア愛国者としてのアレクセイ・トルストイにとって、市民としての立場を決めるうえで主要なものだった。彼は長いためらいと心の葛藤ののち、ソビエト政権と社会主義を認めるに至った。

「……良心もまた私に、地下室へ潜り込むのではなく、ロシアへ行くことを呼びかけている。嵐でぼろぼろになったロシアの船に、小さな釘でもいいから自分の釘を打ち込むことを」

これは芸術家としての、市民としてのアレクセイ・トルストイの社会的成熟を示すものである。彼は最終的な、確固たる結論に達した。それは、「ボリシェビキ政府と呼ばれる政府がロシアに存在するという現実を認めること、ロシアの中にも、ロシアの外にも、ほかにはどんな政府もないということを認めること」が必要だ、という結論だった。

主要な作品

アレクセイ・トルストイが生活の糧としていたもの、夢見ていたもの、本に書こうと思っていたものはすべて、祖国への帰還後実現した。彼は戯曲やシナリオ、たくさんの短編、中編、長編を書いた。思索家としての叙事詩的な広さと深さ、芸術家としての輝きは、主要な三つの作品――長編『ピョートル一世』、3部作『苦悩の中を行く』、2幕もの『イワン雷帝』の中に遺憾なく発揮されている。アレクセイ・トルストイはすでに亡命中に3部作の第1部『姉妹』に取りかかった。やがて『一九一八年』と『陰気な朝』が書かれた。主人公たち――ロシア・インテリゲンチアの革命への道は容易ではなかった。困難との闘いの中でカーチャとダーシャの姉妹、幹部将校ローシチン、技師テレーギンの心に、人民の事業の正しさに対する確信が生まれ、精神的矛盾の苦悩の中で、喪失と絶望の悲哀を通じて、彼らはボリシェビキ思想を理解し、その真実に近づいて行く。

『苦悩の中を行く』は、レフ・トルストイの『戦争と平和』、マクシム・ゴーリキーの『クリム・サムギンの生涯』、

ミハイル・ショーロホフの『静かなドン』のようなロシア文学の傑作と並び立つ真に叙事詩的な作品である。

アレクセイ・トルストイはピョートル一世とその改革の時代を新たに再現した。彼は現代のプリズムを通して歴史を見ることができた。歴史は極めて多様に、弁証法的合法則性を持ってよみがえった。アレクセイ・トルストイは、最初に〝欧州への窓〟を開き、ロシアを沈滞から引き出して、ロシアの力がどんなものであるか、〝不可解〟なロシア人気質がどんなに巨大な可能性を秘めているかを全世界に示したピョートル一世の改革について語った。

アレクセイ・トルストイは、主人公たちと主人公たちを取りまく環境を目ざとく、はっきり見ていた。彼は主人公たちと論争し、主人公を叱ったり、ほめたりし、非難したり、正当化したり、主人公の個性に完全に入り込み、主人公たちと一緒に苦しんだり、泣いたりしている。彼は主人公たちをどなりつけたり、足を踏み鳴らしたりさえした。作家の周辺の近い人々は、壁ごしに大きなどなり声を聞いたが、特別それに注意を払わなかった。そんなときはアレクセイ・トルストイが執筆中だということを知っていたからだ。彼は言葉を熱烈に愛し、その味、匂い、息吹を感じていた。彼は言葉と思想の正確な一致の確立に努めた。「言葉をいい加減に扱うことは、いい加減に、不正確に、大まかに、誤って思考することと同じだ」と彼は言っている。

『ピョートル一世』を読むと、たちまち18世紀の諸事件の真っただ中に入り込んでしまったかのようであり、小説の主人公たちのフィクションではない生の言葉が聞こえるかのようだ。アレクセイ・トルストイは見事な文章家である。彼は現代の文章語と古い言葉の個々の、最も鮮明な例を統一することに成功している。このことが、小説を信ぴょう性のあるもの、驚くほど鮮明なものにしている。

熱烈な愛国者として

一九四一年6月22日、アレクセイ・トルストイは『苦悩の中を行く』を完成した。この日、ドイツ・ファシスト軍は予告なしにソ連に攻め込んだ。戦争が始まった。

5日後の6月27日、プラウダ紙にアレクセイ、トルストイの論文『われわれが守るもの』が発表された。この中で彼は、社会主義の偉大な獲得物について、ソビエト人民の精神的根源について、その英雄的な過去について、熱烈に論じている。

アレクセイ・トルストイはこう書いている——社会主義をめざす大進撃にあたってわが国民は、「労働の中から、煙さえ甘く快い祖国への愛の中から、力を汲み取った」。だから一方的にわが国に押し入って来た敵に対しては、容赦しないだろう。祖国の大地を守るために、国民は一丸となって立ち上がるだろう。なぜなら、こんど国民が守るのは自分たちの心血を注いだ国家であり、自分たちの手で建設した社会主義の世界だからである。

「わが大地は、襲来した圧制者の少なからぬ大軍を呑み込んで来た。欧州ではいくつもの帝国が興り、滅びた。大国が小国になり、豊かな国が貧しい国になった。わが祖国は広くなり、強くなった。いかなる敵の力もそれを弱めることはできなかった。同じように祖国は、このドイツ軍も完全に呑み込んでしまうだろう。いままでもそうだったし、これからもそうだろう」

作家が戦闘的な社会評論に筆を染めたということは、単なる創造活動歴における一事実というだけでなく、祖国に対する市民としての奉仕の気高い行為でもあった。彼は情熱的な、戦闘的な言葉で祖国を守り、ファシズムとの闘争へと国民を鼓舞するために、能率的な新聞のジャンルを利用した。

アレクセイ・トルストイは最初の呼びかけに応えて、兵士として、愛国者として、隊列に加わった。彼は銃の代わりに言葉を武器にした。彼は論文や短い記事を、傑作を書いたときと同じように丹念に、情熱を傾けて書いた。作家の力のこもった社会評論は、前線の兵士たちの心に熱烈な反響を呼び起こした。作家のもとには、前線からたくさんの手紙が届いた。

アレクセイ・トルストイは反戦集会でも演説した。彼はロマンチストとして、スケールの大きな芸術家として生き、創造した。彼は『ピョートル一世』の第3部を完成すること、祖国戦争の資料にもとづいて小説を書き始めることを一九四五年の計画として掲げた。新しい作品のための題もすでに用意されていた。『火の川』または『偉大なる道』というのがそれだった。

彼は一九五四年2月、兵士が戦場で倒れるように、最後の日まで仕事をして死んだ。勝利の日の3カ月まえだった。

一九四六年にはすでに15巻ものアレクセイ・トルストイ全集が刊行され始め、一九五三年に完結した。個々の作品はその後、ほとんど毎年刊行されている。作品集も数種類出された。一九八二年には新しい10巻ものの作品集の刊行が始まった。三つの長編はすべて映画化されている。アレクセイ・トルストイは正当にもロシア・ソビエト文学の古典作家と見なされている。

☆　☆　☆



プーシキン記念レニングラード・ドラマ劇場の俳優たちに自作の戯曲を朗読するトルストイ（右端、1937年）

ピョートル一世についての小説を妻リュドミラにタイプさせているところ（1940年、モスクワ）



〔短編〕

ロシア人気質

アレクセイ・トルストイ
山田　はじめ　訳

ロシア人気質！　小さな短編にしてはあまりにも意味深長な題だ。仕方がない。私はまさにロシア人気質について語りたいのだ。

ロシア人気質！　まあ、書いてみよう……英雄的な偉業について語るべきか？　だが、英雄的な偉業は諸君を当惑させるほどたくさんある。要は、どれを選ぶかだ。友人の一人が、個人的な生活の小さなエピソードで私を救ってくれた。彼はソ連邦英雄の金星章をつけ、胸の半分が勲章で埋まってはいるが、私は彼がソビエト国民の対ファシズム戦（一九四一―四五）でどれだけドイツ兵を殺したか、という話をするつもりはない。彼は素朴で、物静かな、普通の人間である。サラトフ州のボルガ川沿いの村のコルホーズ員だった。だが、他のコルホーズ員と比べると、力と、均斉のとれた体格と、男前のよさで際立っていた。彼が戦車の砲塔から這い出して来るのを――戦争の申し子だ！　と惚れ惚れ見とれたものだ。装甲板から地面に跳び降りると、汗ばんだ巻き毛の頭からヘルメットを脱ぎ、汚れた顔を拭って、必ず笑うのだった。

戦争にあっては、たえず死がつきまとっているので、人々は昇華し、日焼けしたあとの皮がむけるように、あらゆる下らないものが人々から抜け落ちて、人間の中には核だけが残る。もちろん、その核は、ある者にあってはより強く、ある者にあってはより弱いが、欠点のある者でさえ努力し、各人がよい友、忠実な友になろうとする。だが私の友人エゴール・ドリョーモフは、戦争以前から節操が固く、母親マリア・ポリカルポブナと父親エゴール・エゴーロビチをこの上なく尊敬し、愛していた。「父はまじめな人間だ。第一に、自尊心がある。父は言うんだ――息子よ、おまえはこの世でたくさんのことを見聞し、外国へも行くだろう、だが、ロシア人であることを誇りにしなさい、と」

彼には、ボルガ河畔の同じ村に許嫁（いいなずけ）がいた。われわれのところでは、許嫁や妻のことがよく話題になった。特に、前線が静かで、冷え込むようなときには。土小屋の中ではランプがくすぶり、ストーブがはぜ、人々が夜食をとる。そんなときは話がはずむ。聞くがいい。たとえば、「愛とは何ぞや？」と始まる。ある者が言う――「愛は尊敬を基盤にして始まる……」別の者が言う――「そんなものじゃない。愛は慣れだ。人間は妻を愛するだけでなく、父親や母親、動物さえ愛す……」「ちぇ、分かっちゃいないんだなあ。愛は、自分の中ですべてが沸き立っているときなんだ。ちょうど、酔って歩いているときみたいに……」と、もう一人が言う。こうして、曹長が割って入って、命令口調で本質を規定するまで、哲学論議は1時間もつづく。エゴール・ドリョーモフは、恐らく、こんな論議をはばかってだろう、自分の許嫁についてはちょっとしか私に話さない。とてもいい娘で、待つと言ったからには、自分が片足になって帰っても、待っていてくれるだろう、と。

戦功については、彼はしゃべり立てるのを好まなかった。「そんなことは、思い出したくないよ！」と、顔をしかめて、タバコを吸い出すのだった。彼の戦車の戦いぶりについては、われわれは他の搭乗員の口から聞いた。特に、操縦士のチュビリョフだった。

「……いいかい、オレたちが方向を変えたとたんだった。見ると、丘の陰から這い出して来る……オレは叫んだ――〝中尉どの、前進！〟と中尉が叫ぶ。〝全速力で前進！〟右へ左へと隠れて走る。木立ちの中を、タイガー戦車は盲滅法に砲身を振りまわして撃って来たが……外れた。われらの中尉どのはさらに敵のわき腹に一発……ドカン！　さらに砲塔に一発……尾部がめくれ上がる……3発目をくらわせると……タイガー戦車は煙を吐き出した……戦車兵たちが一〇〇mも噴き上がる予備ハッチから這い出した……ワーニカ・ラプシンが機関銃で掃射したよ。敵は倒れ、足をびくびくさせていた……これで障害は取り除かれた。オレたちは5分後に村へ入った。笑ったね……ファシストたちはクモの子を散らすように逃げて行く。ところが泥んこなものだから、ある男などは走っているうちに長靴が脱げてしまって、靴下だけでわめいている。みんな納屋に向かって行く。中尉がオレに命令する――〝よし、納屋へやれ！〟オレたちは砲を横に向けて、全速力で納屋に突進した……いやはや！　前面装甲板ですごい音がしてね、板やレンガや、屋根の下にいたファシストたちは木っ端みじんだ……オレはもう一度ぶちかました。残った連中は手を挙げる――これでヒトラーもおしまいさ……」

エゴール・ドリョーモフ中尉はこのように戦っていたが、やがて彼は不幸に襲われた。クルスク戦のとき、ドイツ軍はすでに多大の犠牲を出して、混乱に陥っていたが、彼の戦車は丘の上の小麦畑で被弾して、乗員の2人が即死し、2発目で戦車が炎上した。前部ハッチから跳び出した操縦士のチュビリョフは、ふたたび戦車によじ登って、中尉を引きずり出した。中尉は意識を失って、服が燃えていた。チュビリョフが中尉を遠くへ運んだとたんに、戦車が爆発した。砲塔が50mも吹っ飛ぶほどの勢いだった。チュビリョフは中尉の顔や頭や衣服に砂をかけて、火を消した。それから砲弾の爆発によってできた穴から穴へと中尉を引いて這い、包帯所にたどりついた……「なぜ中尉を運んだか、だって？　心臓の鼓動が聞こえたからだよ」とチュビリョフは言った。

エゴール・ドリョーモフは命を取りとめ、ところどころ骨が見えるほど顔に火傷を負ったにもかかわらず、失明を免れた。彼は8カ月病院にいた。彼は何度も皮膚移植手術を受け、鼻も、唇も、まぶたも、耳も回復した。8カ月後に包帯が取れたとき、いまや自分のものではない自分の顔を見た。彼に小さな鏡を手渡した看護婦は、顔をそむけて泣き出した。彼はすぐ看護婦に鏡を返した。

「もっと悪いことだってあるさ。この顔でも生きて行けるよ」と彼は言った。

だが、彼はそれきり看護婦に鏡を要求せず、ただ慣れようとするかのように、しばしば自分の顔にさわった。委員会は、彼が戦列外の勤務に向いていると判断した。そこで彼は将軍のところへ出かけて行って――「部隊へもどる許可をお願いします」と言った。「だが、きみは負傷兵だ」と将軍は言った。「いいえ、私は不具者ですが、仕事の妨げにはなりません。戦闘能力は完全に回復しました」（会話のあいだ将軍が自分の方を見ないようにしていることに気づくと、エゴール・ドリョーモフはただ、薄紫色の、割れ目のような真っすぐな唇で笑った）。彼は健康を完全に取りもどすために20日間の休暇をもらうと、父親と母親がいる家へ帰った。ちょうど、その年の3月のことだった。

駅で彼は馬車を雇おうと考えていたが、18ベルスター（メートル法施行以前のロシアの単位。1ベルスターは約1km）の道のりを歩いて行くはめになった。あたりにはまだ雪が残っており、湿っぽく、荒涼としていて、冷たい風が彼の外套の裾を吹き払い、耳もとで単調な、憂うつな音を立てた。彼が村に着いたときは、すでに薄暗かった。彼が村

井戸があって、長いつるべが揺れて、きしんでいた。ここから6軒目の百姓屋が彼の生家だった。彼はポケットに手をつっ込んで、ふと立ちどまった。首を振った。家の横にまわり込んだ。膝まで雪に埋まり、窓の方に身をかがめて、母親を見た。芯を引っ込めたランプの淡い光のもとで、テーブルの上に身を乗り出して、彼女は夕食の用意をしていた。いつもの黒っぽいスカーフをかぶった彼女は、物静かで、落ちついており、やさしそうだった。少し老けて、やせた肩がつき出ていた……〈ああ、毎日一言でも二言でも、彼女に自分のことを書いて知らせるべきだったのだ〉……食事は手の込んだものではなかった。牛乳の入った碗、パン、スプーンが2本、塩。彼女はテーブルのまえに立ち、やせた腕を胸の下に組んで、考え込んでいた……エゴール・ドリョーモフは窓ごしに母親を見ながら、彼女を驚かせるわけには行かないこと、その老いた顔を絶望でおののかせてはいけないことを理解した。

それでは、よし！　彼は木戸を開け、庭に入って、玄関口でノックした。母親がドアの向こうで言った――「どなた？」彼は答えた――「ソ連邦英雄、グロモフ中尉です」

彼の心臓は高鳴った。彼は肩で側柱にもたれかかった。いや、母親は声では気がつかなかった。彼自身も、手術後すっかり変わってしまった自分の声を、初めて聞いたような気がした。かすれた、うつろな、不明瞭な声だった。

「何のご用でしょう？」と彼女が聞いた。

「マリア・ポリカルポブナにご子息ドリョーモフ中尉からの伝言を持って来ました」

すると彼女はドアを開け、彼に飛びついて、手を握った。

「生きているのね、私のエゴールは！

元気かしら？　さあ、お入りになって」

エゴール・ドリョーモフはテーブルわきの長椅子に座った。そこは、彼がまだ床に足が届かないときから座っていた場所だった。母親は彼の巻き毛の頭をなでて、「お食べ、坊や」と言ったものだ。彼は彼女の息子のこと、すなわち自分自身のことを話し始めた。彼がどのように食べ、飲んでいるかについて、彼が何も困っていないこと、いつも元気で、陽気だということについて詳細に話し、彼が戦車に乗って参加した戦闘については手短に話した。

「戦うときはこわいんでしょうね？」と彼女は、まだ彼とは気づかずに、黒い目で彼の顔を見ながら、話をさえぎった。

「それはもちろん、こわいですよ、お母さん。でも、慣れました」

父親のエゴール・エゴーロビチがやって来た。やはりこの何年かのあいだに衰えて、あごひげは粉をかぶったようだった。客の方を見ながら、入口で古びたフェルト長靴を踏み鳴らして雪を落とし、ゆっくり襟巻きをほどいて、半外套を脱ぎ、テーブルの方へやって来て、握手した。ああ、懐しい、大きな、いかにも父親らしい手！　何も聞かず――というのも、勲章をつけた客がなぜここにいるかは、聞かなくても分かったからだ――座って、目を半ば閉じ、やはり耳を傾けた。

正体を気づかれないまま、座って、自分ではない自分のことを長く話せば話すほど、ドリョーモフ中尉は、立ち上がって、見て下さい、この醜いのが私ですよ、お父さん、お母さん！と打ち明けにくくなってしまった……両親と一緒にテーブルにつくのは、彼にはうれしくもあり、つらくもあった。

「さあ、何かお上がりなさい。母さんや、お客さんに何か取って上げなさい」と言って、エゴール・エゴーロビチは古びた戸棚を開けた。戸棚の左手の隅には、マッチ箱に入った釣りバリがあった。それはずっとそこにあった。パンの欠けた急須もあったが、それも、パンとタマネギの皮の匂いがするその場所にずっとあったものだ。エゴール・エゴーロビチはワインの入ったびんを取り出した。ワインはコップ2杯分しかなかった。これ以上はどこへ行っても手に入らない、と彼は溜め息をついた。かってのように、みんなで座って食事をした。ただ食事のあいだ、ドリョーモフは母親がスプーンを持つ彼の手を特に注意深く見守っているのに気づいた。彼は笑った。母親は目を上げたが、その顔は病的にふるえ出した。

みんなであれこれ話した。どんな春が来るのか、種まきはできるだろうか、この夏には戦争も終わるだろう、と。

「エゴール・エゴーロビチ、なぜこの夏に戦争が終わるとお考えですか？」

「国民は怒った。死をかいくぐって来た。もはや国民を押しとどめることはできない。ドイツ軍は滅びる」とエゴール・エゴーロビチは言った。

マリア・ポリカルポブナが聞いた。

「いつあの子が休暇をもらって帰省するか、あなたは話して下さいませんでしたね。もう3年も会っていません。きっと大人びて、ひげを生やして歩いていることでしょう……毎日、死と隣り合わせで、声も荒くなったことでしょうね？」

「そうですね。ここへやって来ても、あなた方には分からないかもしれませんね」と中尉は言った。

彼はペチカの上の寝床があてがわれた。彼はレンガの一つ一つ、丸太壁のすき間の一つ一つ、天井の材の一本一本を覚えていた。羊の毛皮の匂い、パンの匂い、死ぬ瞬間にさえ忘れることのできないあの生家の居心地のよさの匂いがした。3月の風が屋根の上で鳴って

いた。仕切りの向こうで、父親がいびきをかいていた。母親は寝返りを打ち、溜め息をついた。眠ってはいなかった。中尉はうつぶせに寝て、手のひらに顔を埋めていた。＜果たして分からなかったのだろうか？＞と彼は考えた。＜果たして分からなかったのだろうか？ ママ、ママ……＞

朝、彼は薪がはぜる音で目が覚めた。母親はペチカのそばで用心深く立ち働いていた。張った紐には洗濯した彼の布靴下が掛かっており、ドアのところには洗った長靴が置いてあった。

「キビの薄焼きは召し上がる？」と彼女が聞いた。

彼はすぐには答えずに、ペチカの上から降り、軍服を着て、ベルトを締め、素足のまま長椅子に座った。

「この村にアンドレイ・ステパノビチ・マルイシェフの娘カーチャ・マルイシェワという人がいますね？」

「去年、養成所を卒業して、ここで教師をしてますよ。あの子に何かご用でも？」

「あなたのご子息が、ぜひよろしく伝えてくれと」

母は隣の娘を使いに出した。中尉が長靴を履き終わらないうちに、カーチャ・マルイシェワが走ってやって来た。灰色の大きな目は輝き、眉が驚いたように躍り、頬が喜びに赤く染まっていた。毛編みのスカーフを頭から肩に降ろしたとき、中尉は心の中で呻いた。その明るく輝く髪に接吻したかった！ 彼には、そのような彼女の姿しか思い浮かばなかった。水々しい、優しい、明るい、善良な、美しい彼女が入って来ただけで、小屋の中が金色に輝き出したほどだった……

「エゴールからの伝言を持って来て下さったんですって？」（彼は明るい方を背にして立ったまま、ただうなずいた。しゃべることができなかったからだ）。私は日ごと夜ごと、あの人を待っています。そうあの人に伝えて下さい」

彼女は彼の方に近寄った。顔をのぞき込むと、軽く胸をつかれたかのように離れた。びっくりしたのだ。そのとき彼は、きょうここを立ち去ろう、と固く決意した。

母親はキビの薄焼きを作り、牛乳を温めた。彼はふたたびドリョーモフ中尉の話をした。こんどは彼の戦功についてだった。容赦なく語り、自分の醜さの反映を彼女の愛らしい顔の中に見たくなかったので、彼はカーチャの方に目を上げなかった。エゴール・エゴーロビチはコルホーズの馬を調達しようと奔走しかかったが、彼は来たときと同じように、歩いて駅へ向かった。

彼は起こったことすべてに打ちひしがれていた。立ちどまって、手のひらで自分の顔を打ちさえした。彼はしゃがれた声でくり返した――「これから、どうすればいいのだ？」

彼は、補充のために大きく後方にさがっていた自分の部隊にもどった。戦友たちが彼を心から喜んで迎えてくれたので、彼は眠るのも、食べるのも、呼吸するのもじゃましていた胸のつかえが取れた。彼は決心した――母親には自分の不幸について、できるだけ長く知らせまい、と。カーチャについては――彼はこの心のトゲを引き抜くだろう。

２週間ほどたって、母親から手紙が届いた。

「こんにちは、私の可愛い息子よ。おまえに手紙を書くのもこわいが、何を考えたらいいのか分からないの。私たちのところへ、おまえの使いだという人がやって来ました。とてもいい人でしたが、ただ醜い顔をしていました。しばらく居たかったようですが、すぐに行ってしまいました。息子や、そのときから私は夜も眠れないのだよ。おまえが帰って来たような気がしてね。エゴール・エゴーロビチはそのことで私を叱ります。すっかり老いぼれやがって、おまえは気が狂ったのだ、と。あの人がわしらの息子だったら、果たして打ち明けなかっただろうか……あれがあの子だったら、なぜ隠さなければいけないのだ――わしらのところに来たあの人のような顔は、自慢しなければいけないのに、と言うのだよ。エゴール・エゴーロビチは私を説き伏せますが、母親の心は、いつだって強情なもの。あれはあの子だ、あの子が私たちのところへ来たのだ……あの人はペチカで寝た。私はあの人の外套をきれいにして上げようと、庭へ持ち出した。そして、それに顔を押しつけて、泣きました。これはあの子だ、これはあの子のものだ！……エゴール、私に手紙をおくれ。後生だから、私に教えて――何があったの？ それとも、私は本当に気が狂ってしまったのかしら……」

エゴール・ドリョーモフはこの手紙を私イワン・スーダレフに見せ、一部始終を語りながら、袖で目を拭った。私は彼に言った――「ほら見ろ、思いやりと思いやりがぶつかり合ったんだ！ 馬鹿だよ、きみは。急いでお母さんに手紙を書くんだ、許しを乞うんだ。お母さんを気違いにしてはいけない……彼女にはきみの姿がとても必要なんだ！ そうすれば、彼女はきみをもっと愛するようになるさ」

彼はその日、手紙を書いた――「親愛なる両親、マリア・ポリカルポブナとエゴール・エゴーロビチ、私の無作法をお許し下さい。実際に私はあなた方の息子が……」こうして手紙は小さな字で４枚もつづいた。20枚だって書くことができただろう。

しばらくしてから、私は彼と一緒に練兵場に立っていた。兵士が走って来て、エゴール・ドリョーモフに言った――「大尉どの、あなたにご用だという方が……」兵士は威儀を正して立っていたにもかかわらず、その表情は、これから一杯やりに行こうとする人のようだった。私たちは町に向かった。私とドリョーモフが住んでいる百姓家に近づいた。彼は調子が悪く、せき込んでばかりいる……＜戦車兵としては申し分ないが、神経が高ぶっているな＞と私は思った。百姓家に入る。彼が先で、私があとだ。私は耳にする――「ママ、こんにちは、ぼくですよ！」見ると小柄な老婆が彼の胸に飛び込んだ。見まわすと、もう一人女性がいる。正直なところ、美人はほかにもどこかにいるだろう。彼女だけが美人でもあるまい。だが私個人は、彼女ほどの美人を見たことがない。

彼は母親を押しやって、その娘に近づいた。その勇士のような体格ゆえに、彼が戦争の申し子だということを、私はすでに理解していた。彼は言った――「カーチャ、なぜ来たんだい？ きみが待つと約束したのはあのときのぼくであって、こんなぼくじゃない……」

美しいカーチャはそれに答えて言った――私は物陰に引っ込んだが、聞いていたのだ――「エゴール、私はあなたと一緒に末長く暮らすつもりだったわ。私はあなたを誠実に愛すでしょう、とっても……私を遠ざけないで……」

そうだ、これこそロシア人気質だ！ 人間は単純なように見えるが、ひどい不幸が訪れると、大きな人間であれ小さな人間であれ、その中に偉大な力が湧き起こるのだ――人間的な美しさが。

（一九四二―四四年）

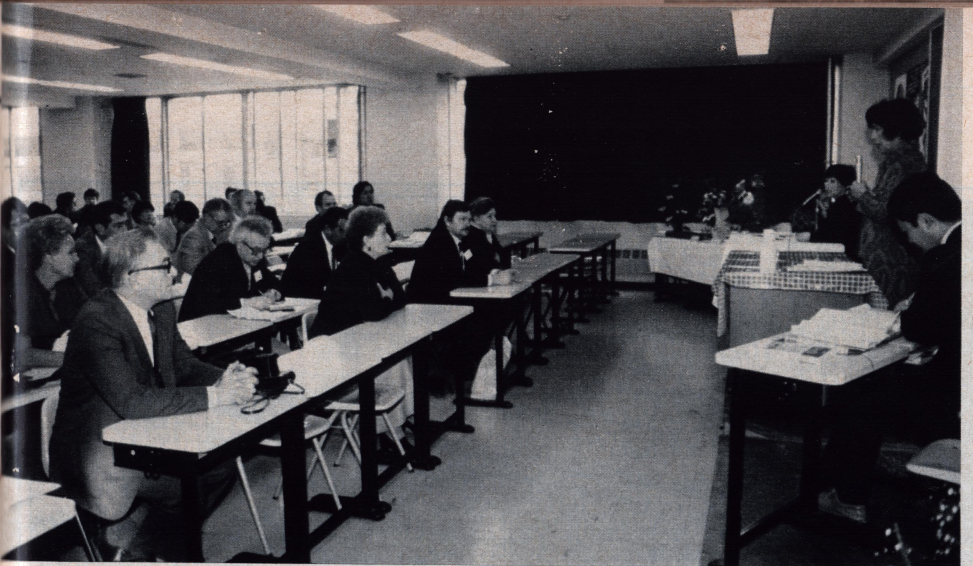
（さし絵　Ｉ・ゴンチャルーク）



幸せな世代を育てる芸術教育

——第9回日ソ芸術教育シンポジウム

本誌記者 P・ロマノフ



▲東京の文化女子大学で開かれた第9回日ソ芸術教育シンポジウム

昨年11月21日から23日まで、東京の文化女子大学で第9回日ソ芸術教育シンポジウム（主催＝芸術教育研究所、芸術教育の会、色彩教育研究所、農業工芸教育の会他）が開かれた。シンポジウムにはソ連側から教育家、研究者、文化・芸術活動家など21人の代表が参加した。今回のシンポジウムの主題は、ソ連側代表団長A・リハーノフの基調報告のテーマでもある「文学、美術、音楽による次の世代の教育」であった（第8回ソ日芸術教育シンポジウムについては本誌'82年3号参照）。

同シンポジウム実行委員会委員長の横山裕さんに、これまでのシンポジウムの経過などを簡単に聞いてみた。

横山裕さんの話——「一九六七年に日本から代表が訪ソし、一九六九年に第1回シンポジウムが開かれた。お互いの国や現状を知り合うという中から生まれたものだったが、やっていくうちにだんだん、体制は違っても次の社会をつくる子供たちのことを真剣に考えるということは、どこの国でも共通なのだということが分かってきた。特に美術の方では日本がソ連に学ぶところが大変多い。だから第9回まで続いたのだと思う。日本では今、青少年のモラル、非行、暴力事件など教育面では頭を悩ます問題が多いが、これは教育界だけでなく社会全体で悩んでいる問題だ。ところがいろいろな国の新聞や教育雑誌を見ると同じような問題が出ている。ソ連でも同じで、教育10カ年計画を見ると、芸術方面にもっと力を入れてモラルの向上を図りたいということが書かれてあった。そういうことで今回は≪文学、美術、音楽による次の世代のモラルの教育≫というテーマを掲げ、それぞれの国の現状とどういうふうに変えていきたいかという展望を語り合うシンポジウムにしたいということで開かれた」

——今まで2回ソ連へ行かれたとのことだが、ソ連の子供の芸術教育についての印象は？

「ソビエトの幼児教育のいろいろな分野の人たち——教育学者、現場の先生方、心理学者、文学者らが一緒になって子供たちの教育について考えていることに感心した。作品の内容を見せてもらうと、組織だってなされていることがよく分かる。ただ現場に行ってみると、日本でもそういうところがあるのだが、ソ連でも教科書（指導要領）は大勢でつくったのだから絶対だと思われているふしがある。しかしやはり実際に子供に接している教師が、現実の子供たちと照らし合わせながら、工夫していく——それで初めて教育が生きたものになると思う。ソ連の現場を見せてもらう中で、そういう意見を述べてきたし、ソ連からも学んできた」

——今回のシンポジウムの全般的な感想は？

「音楽、美術、文学の関係者だけでなくマスコミ、出版関係の人も来てくれたのはうれしい。もっと長い時間をかけて討議をしたかった。日本人の参加者が少なかったのは、ソ連をあるメガネを通して見ているから集まってこないのではないか。もっと多くの人たちが話し合って、ソ連という国を知ってもらいたい」

会議の休憩時間に、記者はソ連代表団長であり、作家、ソ連の青少年向け雑誌「スメーナ」（若い世代）の編集長、ソ連対外友好文化交流団体連合会（対文連）児童文学・芸術家協会会長であるアリベルト・リハーノフに、シンポジウムの成果についてきいた。

A・リハーノフの話——「私たちと同じ仕事にたずさわっている日本の人々との協力関係がもう長年続いているが、ひじょうに嬉しいことだ。シンポジウムは今度で9回目だが、そのつど双方はお互いの経験の中から何かしら為になるものを見つけ、芸術教育の差し迫った問題を討議し、時には一緒に解決してきた。

12月のソ連邦結成60周年記念日の一カ月前に開かれた今回のシンポジウムには、ソ連側からエストニア、ウクライナ、グルジア、アルメニア、ウズベクなど多くの連邦構成共和国の代表が参加し、皆それぞれソ連各地で60年間に達成された芸術教育の水準について中味の濃い報告を行った。これは日本側にとても興味深かったと思うし、よく理解されたようだ。

日本側の経験はもちろん大きな関心を呼んだ。芸術教育分野のソ連の専門家は、日本の同僚から有益なことを沢山聞いた。ソ連と日本の社会体制は異なるが、子供と子供の将来に対する配慮は同じであり、これがわれわれに共通のものを求めさせている。この点から見て、ソ連と日本の文化・教育活動家間の協力が今後も発展することは確実である。

わが児童文学・芸術家協会は、伝統的に文学色が濃いが、文学があらゆる芸術の基盤であるから、それも当然だ。ソビエト文学は日本の翻訳者や出版人の間に人気がある。ソ連の児童・青少年向け文学が、日本でのロシア語からの翻訳出版書全体の大半を占めているというのは、鼻が高いことである。このシンポジウムのあと、日本で新しいソ連の本が出版され、また日本で新しい読者が日本の児童・青少年文学の新しい翻訳書を受け取ることを期待したい。

ソビエト国家は結成後60年間に、ソ連の各民族の文化、特に芸術教育を大きく発展させた。

ソ連の芸術教育は日本でも関心を持たれ、例えばソ連の大作曲家、教育アカデミー会員のドミトリー・カバレフスキーの音楽教育システムは、詳細に研究され、日本の学校教育に採用されている。もう一つ例を挙げると、日本の皆さんは恐らく、世界で最初の児童音楽劇場であるナタリア・サーツ女史主宰の劇場の日本公演を覚えておられることだろうが、この公演は日本の子供やその父母だけでなく、教育の専門家も観覧し、好評だった。

子供を大事にすることは、日本人の伝統である。あの有名な、千羽ヅルに託した願いもむなしく亡くなった広島の少女の話は、新しい世代を教育する特別なふん囲気を日本につくった。同じようなヒューマンな感情は、子供の将来を案じるソ連の人々も抱いている。子供の命と幸せに対する不安は共通しており、世界が核戦争の脅威にさらされている今こそこのことを強調しておきたい。核による破滅を避けるには、子供のことを絶えず頭におくことが必要だと思う。子供の命を守りたいという親の本能的な配慮を、平和をめざす共同の闘いに結集することができるし、結集しなければならない。平和の中でこそ、私たちの共同の努力は〝21世紀の調和のとれた発達した人間の育成〟という成果を実際にあげることができるのだ」

シンポジウムは終わった。ソ連の代表団は帰国した。彼らは、宮川やすえ・拓殖大学教授の述べた次のようなことばを胸に納めて帰ったことだろう。

「地球に住むすべての人は、民族や住む場所にかかわりなく平和に生きる権利を持っており、生きなければならない。日本では残念ながら、ソ連のことが十分に知られてはいない。ソ連の子供も日本の子供も両親や友だちを愛しており、学校で成績の悪い〝2点〟を取れば同じように悲しみ、また同じような喜びを味わっている。翻訳をする時私は、できるだけ平和をテーマにした、日ソ両国の子供の相似点、一致点のある作品を選んでいる。こうした形で、両国民間の平和・友好関係をいっそう確かなものにしなければならない」

第9回日ソ芸術教育シンポジウムに参加して

拓殖大学教授　ソビエト児童文学翻訳家　宮川　やすえ

第9回日ソ芸術教育シンポジウムに参加して、報告を行った宮川やすえさんから次のような文が寄せられましたので、ご紹介します（紙面の都合で一部割愛させていただきました）。

第9回日ソ芸術教育シンポジウムについて書く前に、今は亡きレオニード・イリイチ・ブレジネフ書記長に心から哀悼の意を表します。ブレジネフ書記長の時代も含め、日本では第二次世界大戦後ずっと現在まで、戦争がありませんでした。その事について日本国民は、彼にも感謝をしなければならないと思います。どうか次の時代になりましても、日本の平和が続きますように願っております。

さて本題に入りますが、第9回日ソ芸術教育シンポジウムでは二十一世紀の子供たちのために文学、演劇、音楽、美術について、一九八二年十一月二十一日より三日間、ソビエトより二十一人のそれぞれの分野の専門家を東京に迎えて討論しました。

初日はソビエト・デーで、ソビエト側の発表があり、二十二日は分科会、そして二十三日は日本デーでしたが、お互いの意見を友好的な雰囲気の中で話し合いました。

私は二十三日の日本デーの時に、翻訳という仕事について話しました。

その報告を手短に書いてみたいと思います。

①企画から出版にこぎつけるまで。

九月の初め、私はNHKの3チャンネルでイタリアのベローナの野外劇場で行われたオペラの「アイーダ」を聴きました。出演者たちの声はすばらしいものでした。とても面白く思いました。

感動！　面白さ！　これがなくて、どうして子供たちが本好きになるでしょうか！

訳者というものは、原作の一番きびしい読者でもあります。何冊も何冊も原書を読んで、その中から本当に面白い作品を見つけた時の喜びは、なにものにもかえがたいものがあります。

そして、この作品をぜひ日本の子供たちにも読ませてやりたいなあ！と思うようになるのです。

そこで出版社の編集者に電話をかけて、とってもいい本がありますよ、というと、「あなたがそんなに面白いという本なら、きっとよい作品にちがいない。レジメを書いて下さい」と依頼を受けます。私はレジメじゃ、こまかい心理描写は出せないなあと、ぶつぶつ心の中で思いながら、粗筋を書いて編集者に渡します。編集者は、出版社の企画会議にかけて「面白そうだから、全文訳してもらおう」ということになると、その連絡が私のところに入ります。それから私は全文を直訳して渡します。「この段階では訳もかたいし、八〇%の仕上がりですよ」と言って。

編集者は、これまた日本語に訳された作品の、最初の最もきびしい読者でもあります。だから「出版します」の「OK」が出るまで、私は夜もよく寝られないことだってあります。「OK」が出ると、私は天にも昇ったような気持ちになります。

でもそれからがまた一苦労です。原文がまるみえの訳文は、私は良い訳ではないと思っています。もし作者が日本文で書いたら、この文章をどう書くだろうかと何度も思い返しながら文章を練るのです。そして四―五回も書き直していると、へとへとに疲れて、文字を見るのもいやになってしまいます。すると編集者から「これでよろしい」とやっと言われるようになるのです。

そして一〜二カ月位たってゲラが上がってからも、「ここの文章があでもない、こうでもない」と私と編集者は言いあって、やっと文章が出来上がります。

絵本は年齢が小さくなればなるほど、字数が少なくなればなるほど、大変です。しまいには「は」にしようか「が」にしようかで編集者と私は二―三時間も言い合いになるほどです。

出来上がった本を最初に開いた時の喜びは、言葉ではいいつくせません。人の通らない夜道を、しっかり本を胸にだいて歩きまわることもしばしば。本は自分の生んだ子供なのです。

②外国の本を日本に紹介する場合、どういう観点から選ぶか？

(イ)日本にはない、よその国にだけあるものの様子を子供に知らせるために選ぶ。

例えば、ソビエトの寒い寒い冬の村の景色とその中で生きている人々の生きざまを書いてある「十二カ月」（日本題「森は生きている」マルシャーク作）、「冬のかしの木」（ナギービン作）、など。それから民話。

(ロ)ソビエトの子供も日本の子供も同じだなあと、共感を持つ作品。

例えば「初恋物語」（ヤーコブレフ作）、「ワーシャとまほうの木馬」（プロコフィエバ作）など……。

(ハ)ユーモア小説

例えば「ビーチャと学校友だち」（ノーソフ作）、「わたしの友達ウラン」（ピボワロワ作）など。

(ニ)読んで知識を得る作品

例えば、イリインの「人間の歴史」「燈台の歴史」「自然のABC」「時計の歴史」など。それに「地球は青かった」などの科学読物。

(ホ)詩は訳が大変難しい上に、詩の本は日本ではあまり売れないので、出版しにくいのですが、言葉の美しさを短い文章で表わす詩の本も、子供たちに読ませることが大切ではないかと思います。

ソビエトでは、保育園に行っているうちから、文字は知らなくてもプーシキンの「ルスランとリュドミラ」の詩の一部とか、ネクラーソフの春夏秋冬をうたった詩だとか、チュコフスキーの詩などを覚えていて、お客様が見えると朗読して聞かせてくれます。

今は亡き児童詩人のバルトーさんは、私に会うといつも自分の詩を手ぶり身ぶりをしながら読んで聞かせてくれたものです。

③私の選んだ本と考えについて

ソビエトの本を訳し始めて十年間は、私は戦争に関する作品ばかりを選びました。自分の父を白軍の兵士にめった切りに切られた「でしゃばりっ子」（シヨーロホフ作）、教科書までナチスに焼かれた地方に、本を運んでいく「もえる貨物列車」（カッシーリイ作）、ガイダールの「もえる石」など。

日本が第二次世界大戦に負けたあと、うちの家族の上にも、いや日本中の人たちの上に押しよせた戦争の傷あとが、いえていなかったからです。負けた国の兵士たちは、だれひとりほめたたえられることもなく死んでしまったのです。老人や子供たちまで空襲で家を焼かれたり、爆弾で骨さえとび散ってしまったのです。

けれど、第二次大戦に勝った国でも、戦死した人は帰ってはきません。戦勝祝いの礼砲がとどろき、人々が勝利に酔っていても、「ぼくの大好きなパパ」（ガリャフキン作）の主人公ペーチャのお父さんは帰ってこないのです。いつまでも……。

どうして人と人とが殺し合えるのだろうか？と不思議でたまらなかった私は、第一次中近東戦争が始まると、カイロにも行ってみましたし、戦争中のサイゴンにも行ってみました。サイゴンでは一日に百万ドルもの弾を消費しているといわれていました。戦争というものは、ずい分お金のむだ使いをするものだとその時思いました。

それから、ある国では対立する国同士の国境地帯を見学に行ったことがあります。私の案内をしてくれた女性が、相手側の兵隊の姿を見ると青い顔をこわばらせ、「まるで猿みたい」とふるえ声で言いました。戦争の時、親兄弟が殺され、自分だけ納屋の麦わらの下にもぐって助かったのだそうです。彼女は十年たっても、二十年たっても、その時うけた心の傷を忘れることが出来ないのです。私から見れば、国境のこちら側の人も、あちら側の人も、そして私も同じ仲間に見えるのに……。

その時私は、はっと気がつきました。人の心をそこまで追いつめるような事が起きたらいけないのだと。なんとかして各国政府の外交政策で平和を保ち、地球上から戦争という人殺しをなくしてもらいたい。そう願ってやみません。

それにはもうひとつ大切なことがあります。それは、よその国の事を知らなくてはならないということです。本を通して私たちは世界中の人の心も生活も習慣も知ることが出来ます。

そこで私は、自分に出来ることは何かと考えました。ロシア語しか知らない私は、私の専門の児童文学の翻訳を通して、「ソビエトの子どもたちも、日本の子供も同じなのだ。いたずらもするし、勉強の嫌いな子供もいるし、教育ママもいるし……子供の世界は同じなんだ」と共感を持って読まれる本を選ぶようになりました。するとソビエトの作品の中に、子供という人間性をしっかりととらえて書いた作品がつぎつぎに見つかりました。

憎しみと誤解からは、何ひとつ良いものは生まれません。よく知り合い、愛の中からだけ、美しいもの、善良なものが生まれるのです。

みなさん、お互いを理解し合い、愛し合いましょう！

ソ連共産党活動家代表団の訪日

——日本社会党の招きで

ソ連共産党は、なによりもまず戦争の危険を取り除き、平和を固めるために、社会主義政党や社会民主主義政党と協力することを一般方針にしており、この方針に基づいて日本社会党と常時交流している。

この交流は伝統的なものになっており、両党は会談で現代の数多くの問題に関する両党の見解が同じか、近いことを、何度も確認し合った。

一九七八年12月、日本社会党の飛鳥田委員長を団長とする同党中央執行委員会代表団の訪ソのさい、両党は「反帝、平和、民主主義、社会進歩、ソ日両国民間の友好、協力をめざして共同で闘うために」、さらに関係の発展に努めることを確認した。

ことし数多くの日本社会党代表団が訪ソして、ソ連の実生活のさまざまな面を視察し、現在の国際情勢やソ日関係の差し迫った多くの問題について意見を交換した。

一九八二年11月27日から12月4日まで日本社会党の招きにより、ソ連共産党活動家代表団（ソ連共産党中央委員、ソ連共産党ハバロフスク地方委員会第一書記A・K・チョールヌイ団長、ソ連共産党中央委員会国際部課長A・I・セナトロフ、ソ連共産党イストラ市委員会第一書記L・I・コスチン、通訳B・P・ラブレンチエフ）が訪日した。代表団は、L・I・ブレジネフの葬儀に飛鳥田日本社会党委員長を団長とする社会党代表団がモスクワに派遣されたことやソ連共産党とソビエト国家の卓越した指導者の死去に対する深甚の弔意に対して、感謝を表明した。

ソ連共産党代表団は飛鳥田社会党委員長と会談したさい、党は第24回、第25回、第26回党大会の諸決議によって定められた戦略路線を断固徹底して実現していくと強調した。

双方は互いに、両党の結びつきを拡大し、力を合わせて平和の強化とソ日善隣関係の樹立に努める意向であることを確認し合った。

ハバロフスクと緊密な関係にある新潟および京都で、代表団一行は歓迎を受けた。特にA・K・チョールヌイは新潟では多くの知人—— 社会党、労組活動家、現地の自治体代表と会った。

代表団は君健男新潟県知事や新潟、ハバロフスク両市の縁結びの発起人の一人、日ソ親善協会新潟支部会長の渡辺浩太郎元新潟市長と会談した。

今回のソ連共産党活動家代表団の訪日は、ソ連共産党と日本社会党との結びつきの一層の発展に役立った。



日本社会党中央執行委員会と会談するソ連共産党活動家代表団。ソ連側：右からコスチン、セナトロフ、チョールヌイ団長、ラブレンチエフ、フェジャイノフ在日ソ連大使館参事官。日本側：手前から安井栄二書記（国際局）、深田肇・中央執行委員（青少年局長）、岡田利春・日ソ問題特別委員会委員長（衆議院議員）、大塚俊雄・中央執行委員、八木昇・国際局長（衆議院議員）、長谷川正三・中央執行委員・中小企業局長（衆議院議員）、上田卓三・国際部長（衆議院議員）。（写真提供＝社会新報）



レベルを向上させる大衆性

——ウィンタースポーツ・シーズンに寄せて

ニーナ・マクサコワ　カメラ　I・ウトキン他

ユーゴスラビアのサラエボで開かれる次の冬季オリンピックまであと一年以上ある。しかし、ソ連のオリンピック関係者の脳裏にはまだ前回のレークプラシッド大会（米国）のことが新鮮な思い出として残っている。金メダル10個、銀メダル6個、銅メダル6個というソ連チームの成績は、どの国のチームよりも輝かしいものだった。

しかし、オリンピック後の過去3年間に行われたウィンタースポーツ競技の世界選手権で、ソ連選手がリーダーシップを保ったのはわずか2種目しかなかった。女子スピードスケートでN・ペトルセワが平地リンク最高記録を樹立し、男子スピードスケートではS・フレブニコフが勝利を飾った。アイスホッケーのソ連代表チームは18回目の世界チャンピオン、21回目の欧州チャンピオンの座を獲得した。

従って、次期冬季オリンピックへの準備の中で第5回ソ連諸民族冬季スパルタキアード大会（一九八二年3月）は、特別の地位を占めていた。この大会によってレークプラシッド以後に収められた成果を評価し、不成功の原因を分析することができたからだ。二五〇〇人以上の選手が参加した冬季スパルタキアード決勝大会は、出場者のほぼ7割が20歳以下という若者たちにとって大事な試験となった。

スパルタキアードの予選段階では、事実上すべての希望者が出場できる。



ソ連代表選手コンスタンチン・ロマノフスキーの滑降（第5回冬季スパルタキアードの競技から）。

最初の予選競技会は施設や企業、学校、研究所などの単位で行われる。次いで都市の区や農村の地区の競技会、さらに進んで都市、州、共和国の大会が開催される。最後の決勝大会に出場するのは、これらの段階を勝ち進んだ最強の選手たちである。冬季スパルタキアード決勝大会の競技種目は、ボブスレーを除いて冬季オリンピックと全く同じになっている。

最初の予選段階ではスパルタキアードの競技種目はもっと多く、さまざまなリレー競技、家族対抗競技、児童の競技も含まれている。スパルタキアードには夏季大会と冬季大会があり、4年ごとに開催される。開会式では「スパルタキアードの火」が点火され、閉会式にはオリンピックの閉会式と同じように盛大なお祭り騒ぎが繰り広げられる。スパルタキアードではマスコットも決められるが、今回の冬季スパルタキアードのマスコットはシベリアのクロテンの子ども〃ケーシャ〃だった。

今回の冬季スパルタキアードは第5回目で、すべて規定通りに行われたが、それでもスポーツ記者たちは何回となく〃初めて〃という言葉を使った。これほど出場者の年齢が若い大会は初めてだった。シベリアで開催されたのも初めてだった。9つの競技種目中7つが初めて一都市（クラスノヤルスク）で行われた。スピードスケート競技はクラスノヤルスクの衛星都市ジブノゴルスクで、アイスホッケーは北極圏内の都市ノリリスク（クラスノヤルスク地方）で行われた。

このスパルタキアードは、今日ではクラスノヤルスク市がどういうレベルの競技大会でも、どういう種目の競技大会でも受け入れられることを示した。過去10年間にクラスノヤルスクでは第一級の競技施設が沢山つくられた。こ



▲70m級ジャンプ競技



スキーの距離競技



かつてのフィギュア・ペアの名選手イリーナ・ロドニナ。今はコーチとして教え子の演技を見守る（クラスノヤルスク市のエニセイ・スポーツ宮殿で）。



第5回冬季スパルタキアードのアイスダンスで優勝したナタリア・カラムイシェワ、ロスチスラフ・シニツィン組。

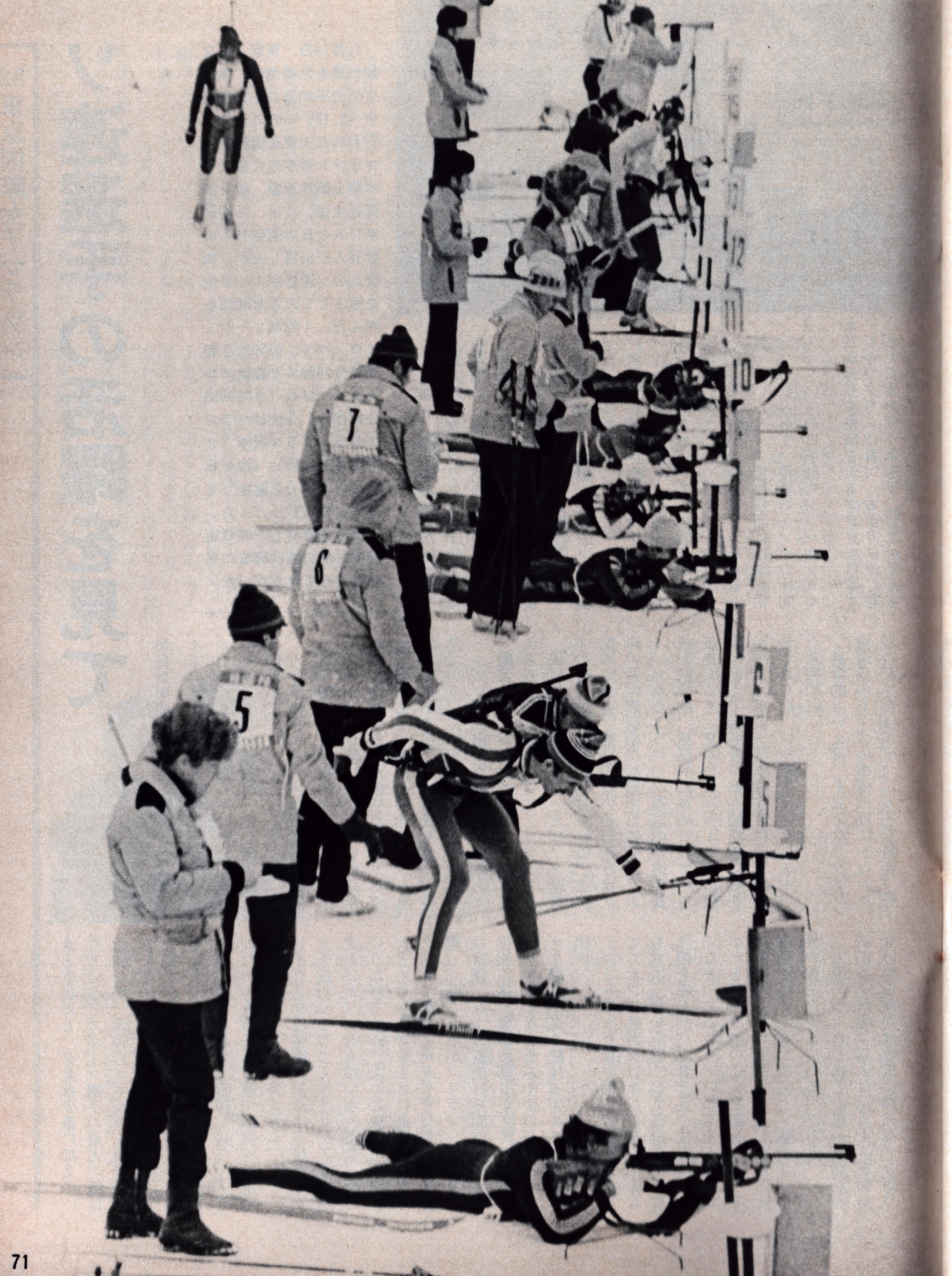
こには49のスキー基地（同時に延べ二万人の収容能力がある）、スキー・スタジアム、夜間照明つき距離競技コース（国際的な公式競技会にも使用できる）、人工氷のリンクがあるスポーツ宮殿（アイスホッケー、フィギュアスケートの競技が出来る）、バイアスロン競技射撃場、ジャンプ競技場（90m級、70m級）、リュージュ競技場（初の木造コース。コンクリート製コースよりも好記録が期待できる）などがある。

第5回冬季スパルタキアードの予選段階では三五〇〇万人以上のスポーツマンが出場した。これは20年前の第1回冬季スパルタキアードの出場者数の3・5倍である。出場者のうち四五〇万人以上がスポーツ等級の認定を受けた。このことは、「大衆性がレベルを向上させる」というソビエト・スポーツのモットーの正しさをはっきりと証明している。

もう一つ、冬季スパルタキアード大会が示したことは、ソ連国内にはスポーツの辺境がないということであり、ソビエト・スポーツは民族的あるいは地理的な優劣とは無縁だということだった。スケートやスキーの競技には〝冬〟の地域の選手だけでなく、ウィンタースポーツを振興する自然の条件がない南の地域の選手たちも出場した。近年、アルメニア、グルジア、ウズベクといった南部の共和国にも人工氷のリンクをもつ屋内競技場が出現している。カザフ共和国チームはスピードスケート種目が強い。これは同共和国のザイリスキー・アラタウ山脈中に有名な高地リンク「メデオ」があることと無関係ではない。このリンクは〝記録の工場〟と呼ばれている。

そして最後に、冬季スパルタキアード大会の最大の〝記録〟は、数千万ソビエト人の壮健、彼らの肉体的鍛錬、体育・スポーツ熱の増大である。われわれがいま生きている環境は、技術進歩の創造者である人間の周囲ではすべてのものが動いているが、当の人間自身はいわばスピードを失いつつあるといった環境である。これは生物的自然と、人間の運動能力がコンスタントに低下しつつある生活様式との間の深刻な矛盾の一つである。この矛盾の克服に役立つのがスポーツだ。現在、ソ連では八三〇〇万人が定期的にスポーツに親しんでいる。

昨年、国家予算から保健、体育・スポーツ費として支出された金額は約一五五億ルーブルだった。このほか、労働組合がこれらの目的のために毎年六〇億ルーブルを支出している。第11次5カ年計画（一九八一—八五年）の期間中に、五〇〇〇の体育・健康増進クラブが創設され、五万七〇〇〇以上の運動場、五〇〇〇以上のアイスホッケー場、約二〇〇〇のスキー基地が建設される。定期的にスポーツをするソ連国民の数は、一九八五年には一億人に達するものと予想されている。



第5回冬季スパルタキアードのバイアスロン競技

'82東京国際女子マラソン

ソ連選手の活躍を見て

11月14日、東京・国立競技場を発着点に、第一京浜の平和島口を折り返す42.195 kmのコースで行われた'82東京国際女子マラソン選手権大会（日本陸上競技連盟、朝日新聞社主催）には、外国選手17人と日本選手41人の計58人が出場したが、初参加のソ連勢が1、2位を独占して大きな話題を呼んだ。1位はゾーヤ・イワノワで、記録は2時間34分26秒。2位はエレーナ・ツフロ（2時間38分17秒）。3位はフランスのラングラス選手（2時間42分18秒）、4位が日本の佐々木七恵選手（2時間43分13秒）だった。

大会を取材した朝日新聞運動部の高橋記者に感想を寄せていただいた。



▲22km地点で先頭を走るツフロ（11番）とイワノワ（12番）。右後方に少し遅れた日本の佐々木選手（59番）が見える（写真提供＝朝日新聞）

朝日新聞運動部　高橋　潤

ソ連強し。四回目を迎えた一九八二年東京国際女子マラソン選手権大会は初参加のソ連が圧倒的な力の差を見せつけて一、二位を独占した。とくに、二〇度前後の高温を全く苦にせず、後半になるほどペースを上げ、驚くほどの余裕を残して優勝したイワノワの強さは正に本物だ。

欧米の一流選手が参加せず、スローペースで始まったレース展開、気象条件などを考えれば、多くの陸上関係者が指摘したように、好条件下では今すぐにでも2時間30分を切る力があると見ていいだろう。世界最高にはまだ約九分の差があり、世界のトップの仲間入りというのは早計だが、ロサンゼルスでのオリンピック初マラソンでメダルをうかがう勢力として、欧米のソ連に対する関心、警戒が一段と深まることは確かだ。

ソ連が女子マラソンのナショナルチームを選抜して本格的な強化に乗り出したのは八〇年夏。公式レースは同年十月のソ連カップが最初だった。わずか二年ほどでこれほどの伸びは、一見、驚異ではあるが、その背景を見れば当然であり、その力は間違いなく世界のトップに躍り出るだろうと、私はあえて断言する。お世辞ではなく、そう考えざるを得ないのだ。

表に見える部分からいえば、ソ連選手の合理的な走法があげられる。上下動の少ない、無駄のない足の運びはソ連の長距離選手に共通する特徴だ。よくいわれるように、ソ連国内の選手養成が科学的、組織的に進められている証拠だろう。日本ではスポーツ界の組織が弱く、指導者が個人的経験に頼りがちでスポーツ科学の成果に余り関心を示さない、いや拒否反応すら示すのと対照的だ。

科学的といえば、イワノワ、ツフロ両選手のレースの準備は理にかなったものだった。まず、二人とも朝食、昼食を中心にし、夕食は少量に抑えていたという。スポーツ選手の最大の敵は脂肪だが、食後のエネルギー消費が少ない夜の食事を大量にとると、余分の栄養が脂肪に変わる。筋肉づくりに必要なたん白質やビタミン、ミネラルを十分に取りながら、脂肪を減らす。そのための食事法もソ連では個々の選手が十分身につけているようだ。

イワノワは勝因の一つに「親切なコック長がつくってくれたロシア風朝食」をあげた。これも単になれた食べ物というだけでない。米のご飯が主体だったというから、レースに最適だった。グリコーゲン・ローディングというと難しく聞こえるが、マラソンの世界では常識。レース直前三日間ほどは炭水化物主体の食事に切りかえて、筋肉中のグリコーゲンをふやすのが、三十キロを超えて走り続けるスタミナを生み出す。

ゴール二キロほど前でけいれんを起こしたツフロがゼッケンのピンで左太ももに〃ハリ治療〃して完走したのも話題を呼んだ。記者会見で彼女は「みんなやってること。いつもそうしてます」と当たり前のような顔をした。ふだんのトレーニングでこうした対応を教育されていることが、ソ連スポーツ界の強さを支えているのだろう。

もう一つ、なるほどと思った話がある。レース後、二人は「コースを知らないから前半は慎重に抑えた」と語った。実は、二人は宿舎のホテルで写した第二回大会のビデオも見ず、コース下見のバスにも乗らなかった。だが、ソ連大使館を訪ねた際、じっくりと過去の大会のビデオを見たのだという。大使館にスポーツ担当官がおり、ぼう大なビデオを持つという、いわば〃情報戦略〃があることを思い知らされた。スポーツも総合戦略が必要な時代なのだろう。

ソ連の女子マラソン選手は現在約二百人という。彼女たちは、世界一の強さと層の厚さを誇る長距離陣、距離スキー界から選び出されたに違いない。これまで述べたような基盤に支えられて、世界最高、五輪金メダルをねらう選手が出てくるのも遠い先のことではないような気がする。

1・2位を独占した イワノワ、ツフロ両選手に聞く

'82東京国際女子マラソン選手権が終わると、さっそく、本誌編集部に手紙や電話で、1位と2位になったソ連選手ゾーヤ・イワノワとエレーナ・ツフロへのお祝いの言葉やら質問やらがたくさん寄せられた。質問には本人に答えてもらうのがいちばんいいと考え、本誌記者が2人にインタビューした。

——まずスポーツ歴から。

ツフロ　私は陸上競技の国際級スポーツマスターですが、スポーツを始めたのは比較的遅く、普通学校10年生のときでした。ミンスク外国語大学へ入ってからも一生懸命練習をつづけ、余暇はすべて走ることに捧げました。記録は年ごとに向上して、いつの間にかベロルシア共和国ナショナルチームの一員になっていました。今回の東京大会は、初めての外国試合です。

イワノワ　本格的にスポーツを始めたのは10年まえで、スキー部に所属しました。一九八〇年に女子マラソンがオリンピック（ロサンゼルス大会）の正式種目に加えられたことを知り、この種目で力を試してみようと決心しました。全ソ労働組合中央評議会主催の最初の競技会でスポーツマスターの基準を超えました。これがマラソンをつづける励みになり、真の肉体的、精神的な力が要求されるマラソンのとりこになりました。一九八一年にはソ連選手権と欧州カップで優勝しましたが、一九八二年のアテネの欧州選手権では8位にとどまりました。女子マラソンはソ連では新しい種目なので、まだ分からないことがたくさんあります。ですから、スポーツが本職の私でも——私はアルマアタ体育大学を卒業して、カザフ共和国スポーツ委員会の指導員をしています——失敗からは学ばなければいけません。

——42・195kmという長丁場は、練習を積んでない人間には完走はもとより、歩き通すのさえ簡単ではないが、あなた方にとっては?

イワノワ　だれも2時間半を切ることはできませんでしたが、記録は別にしても、選手は1秒1秒を戦い抜かなければなりません。東京大会では私は運よく自己の最高記録を出し、ソ連記録を更新できました。観衆や報道関係の大勢の方から、どうやってこの長距離を軽々と走れたのか、と質問されましたが、もちろん、これはトレーニングと周到なからだ全体の準備の成果です。でも、最後に競技場に駆け込んで電光掲示板を見たとき、すぐには自分の名前が読み取れないほどでした。頰がこけて、目が落ちくぼんでしまったような感じです。しかし、ラストスパートをかけるだけの力は、まだたくさん残っていました。

ツフロ　もちろん、きつい距離です。でも、自分自身に打ち勝ち、その結果、距離と時間にも打ち勝つことができます。私にとって、スポーツは喜びです。特に、予期しなかったことが起こった場合はつらいものです。たとえば、きょうは痙れんを起こしてしまいました。12kmの辺で股の後ろの筋肉の調子が悪くなり、ピッチを落とすと何ともなくなるのですが、速めるとまた悪くなります。こうして40km地点まで走りましたが、その後激しい痛みに襲われました。こんなことは初めてだったので、どうしたらいいか分かりませんでした。ゴールまであと2kmというのに、とても悔しくて! いつか、冷たい水の中で泳いでいて足がつったら、痙れんを鎮める唯一の方法は痛い刺激を与えることだ、と聞いたことがありました。私はゼッケンを留めていたピンで試しに刺してみました。そしたら効いたのです! 私はゴールまで完走することができました。いままでいちばんつらいレースでした。



ゾーヤ・イワノワ（右）とエレーナ・ツフロ

——ソ連女子選手の目標は?

イワノワ　世界記録に近づくことです。9分という大差を縮めなければなりません。

——今回出場した他の選手たちについて何か感想は?

ツフロ　記録の上では、ほとんどの選手が差がありません。互角の闘いでした。スタートまえ、私たちは主要なライバルは私たちよりもずっと記録のいい日本の佐々木七恵さんだと考えていました。もちろん、私たちはずっと彼女をマークしました。

イワノワ　出場した選手のほかに、何千人もの日本のファンのことがあります。マラソンは派手なスポーツではなく、見ていてもそれほど面白くないと思うのですが、それでも日本では大変な人気があります。全コースにわたって、私たちは笑顔や拍手、ファンの伴走に励まされました。みなさんにとても感謝しています。



祝賀会であいさつするパブロフ駐日ソ連大使

神戸のソ連邦結成60周年記念祝賀会

11月26日神戸の相楽園会館で日ソ協会兵庫県連主催のソ連邦結成60周年記念祝賀会が開かれ、協会活動家、県と市の代表、業界代表ら約二〇〇人が出席した。

祝賀会出席のため26日神戸に到着したV・パブロフ駐日ソ連大使は、祝賀会であいさつし、次のように述べた。

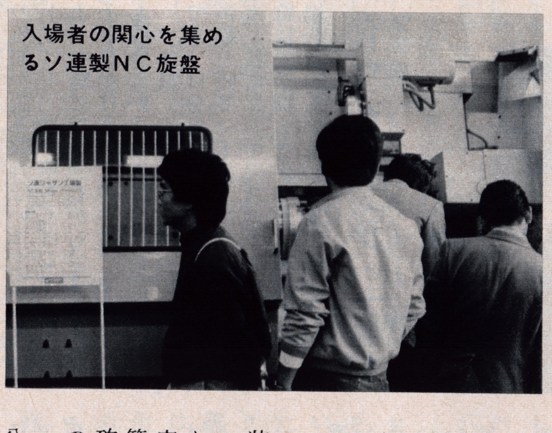
「60年間のソ連の社会・経済面の発展はめざましく、この期間にソ連の国民所得は数倍に増え、世界の工業生産高におけるソ連のシェアは1％から20％になった。

ソ連に新しい社会主義社会がつくられ、それに伴ってこれまでとは原則的に違う新しい対外政策が誕生した。ソビエト政権の最初の法令は平和についての布告であった。ソ連は現在の複雑な時期に対する責任をわきまえ、何度も国際情勢を改善するためのイニシアチブをとった。ソ連は第2回国連軍縮特別総会で核兵器の先制不使用を約束し、すべての核保有国に対し後に続くよう呼びかけた。

ソ連の対外政策の基本原則の一つは、他の社会・経済体制の国々との善隣・互恵の関係を伸ばすことである。この席を借りて、ソ連国民が日本国民とのこのような関係の発展を心から願っていることを強調しておきたい」

（K・デリバス記者）

大阪で展示されたソ連の工作機械



入場者の関心を集めるソ連製NC旋盤

ソ連製の種々の金属工作機械および設備の日本での評判はなかなかいいが、大阪で開催された第11回日本国際工作機械見本市〝JIMTOF＝'82〟（一九八二年10月28日―11月8日）はこの評判をもう一度裏付けた。

この見本市には13カ国七二六社が四二二八点の工作機械を出展した。ソ連の「全ソ工作機械輸出入公団」（スタンコインポルト）はソ連製の工作機械3台―イワノボ機械製作合同製のマシニング・センター、モスクワの〝クラースヌイ・プロレタリー〟工場製の旋盤、リャザン工場製のNC旋盤を出品した。ソ連製工作機械が展示されたホールは雨の日でも閑散とすることなく好評であった。出品されたソ連製の工作機械にはすべて、日本で使われる工場設備の特殊性を考慮して、ファナック社製のプログラム制御システムが装備されていた。

長年ソ連の全ソ工作機械輸出入公団と協力関係にあり、ソ連製工作機械を実際に利用した上でその信頼性、応用範囲の広さ、軽便さ、操業の簡単さを確認した日本の商社が展示された型式の機械を3台とも買い上げた。

見本市開催中、全ソ工作機械輸出入公団の代表たちは、総額二二〇万米ドルの金属切削設備の対日輸出契約を日本商社と結んだ。

大阪の見本市を訪れた人は伊藤忠商事の出品物の中にもソ連製の工作機械を見ることが出来た。ソ連国内のさまざまな企業―ウリヤノフ工作機械工場、オデッサ器具工場、サリスク鍛造プレス設備工場製の工作機械だ。

伊藤忠商事は、一九八二年の初めに東京・品川に開設された展示ホールにソ連製工作機械および設備を常時展示している。



▲ヒロシマをテーマにした『私は被爆者』の舞台は、客席の感動を呼んだ（写真＝関戸基敬氏撮影）

成功したソ連初公演

小沢輝佐子舞踊団団長
小沢　輝佐子

一九八二年十一月十日から二十三日まで、私達小沢輝佐子舞踊団は北海道日ソ友好文化会館の文化交流使節団として、以前からの念願であった訪ソ公演を実現することができた。公演作品はモダン・ダンスで、私のオリジナルによるアイヌ・ユーカラをテーマにした『結婚』（四十分）と、世界平和を願って被爆二世の青春をテーマにした『私は被爆者』（六十五分）で、団員二十七名、スタッフ五名の計三十二名だった。ソ連を知らない人々の集団ではあったが、過去二回の私のソ連訪問でこの国の治安のよさを知っていたので、何ら危惧するところはなかった。

十一月九日札幌を出発、成田で一泊して、十日にモスクワ着。十一日、全員体調もよく、モスクワ室内バレエ団と交流。そのあとブレジネフ書記長の訃報に接し、団員一同冥福を祈った。予定を変更してレニングラードに出発。十二、十三、十四日はレニングラード・バレエ学校を交流視察。十五日にエストニアの首都タリンに着き、予定通り十六日はリハーサル。十七、十八の二日間、タリン市文化スポーツ宮殿レーニン劇場で公演。八千人の観客を集め、アンコールの拍手のあらしに感動した。十九日タリン発、二十日モスクワ着、二十一日モスクワのベアリング工場文化宮殿で公演。これが訪ソ公演の最後になると、団員一同の意気は燃え上がった。

モスクワの一千三百人の機敏な観客は『私は被爆者』の各場面で拍手。アンコールで終幕はなかなか降りず、舞踊家として充実した感動の一瞬を味わった。八三年の一月元旦に全ソ連にテレビで放送されるということである。私たちの公演と交流は予定変更にもかかわらず充実したものとなり、スケジュールを上回る効果をあげた。

最も印象に残ったのはモスクワ室内バレエ団との交流だった。このバレエ団は団長グラーソフ氏をはじめ、指導者の層の厚さと、ボリショイ・バレエ学校、レニングラード・バレエ学校の優秀な卒業生で編成された男女舞踊手の見事な踊りと、新しい出し物が特徴で、太陽の一日をテーマにした公演を観賞させてもらったが、ロシア民謡を現代風にアレンジしたにもかかわらず、構成と振付けのきめ細かな組合せによって、その薫りを失わず、一層詩情豊かなものだった。私はここでアイヌの『結婚』を発表したが、北海道の原住民アイヌに対する関心が高いことに驚かされた。両舞踊団の共演となった『即興舞踊』インスピレーション・ダンスは私が編集したショスタコービチの五番、尺八の山本邦山、琴の沢井忠夫、ジャズの日野皓正クインテットを複合した三十分もので、これがオリンピック文化宮殿いっぱいに展開されたのは壮快であった。動きの芸術はことばを必要としないことが実際に表現されたのである。最後のお別れパーティーでは、団長グラーソフ氏が『私は被爆者』の舞台構成と振付けの巧みさを賞賛され、バレエ団の振付けを依頼されるなど、私にとって何よりもうれしい贈り物であった。モスクワ室内バレエ団のプリマバレリーナ、サビート女史も、美しさだけでない魂をゆさぶる作品であり、心から感動したとおっしゃって下さり、私をはじめ二十七名の団員は公演が充実したものであったことを身をもって感じた。

公演の成功は多くの人々の努力の賜物であり、ソ連対外友好文化交流団体連合会、ソ日協会、ソ連文化省、全ソ労評モスクワ支部、北海道日ソ友好文化会館その他の方々の温かい御協力、御支援に心から感謝し、日ソ両国の友好と友情の架け橋になれたことに満足し、これからもこの幹を大きく育て実らせてゆきたいと思う。

こんにちは、新しい年よ！

新年はおそらく、ソ連の人々にとって、一番古く、一番楽しいお祭りであろう。しかも新年の祭りはずっと昔に一般的なものになり、ソ連に住むすべての民族が祝う祭りになっている。

新年を迎える準備はどうやって？　原則的には日本と同じだ。もっとも新年にハワイに出かける人はいない。だがその代わり、黒海沿岸の休息の家やペンションには大勢の人が行ける。しかし新年は家庭的な祭りで、大部分の人は家族に取り囲まれて新年を迎えたいと思う。

祭りの主役はもちろん、新年のテーブルだ。ソ連には一〇〇以上の大小の民族がおり、新年のテーブルには代表的な民族料理が並べられる。

だがテーブルが最上のごちそうでいっぱいになっても、それだけではまだ新年のテーブルにはならない。新年と同じ意味を持つ言葉、新年の生きているシンボルとマーク——それはヨールカ（モミの木を飾り立てたもの）である。

新年の祭りはとりわけ子供たちにたくさんの喜びをもたらす。モスクワのクレムリンには一番大きなヨールカ（高さ25ｍ）が立てられる。これは国中で一番はでやかで、美しく、壮大なヨールカだ。クレムリンの新年の祭りに行ってみたいと思わないようなモスクワの子供はいない。

新年の祭りの日々には青年たちが大勢まちを練り歩き、さまざまなパーティーが催される。新年には贈り物も欠かせない。子供たちは新年のプレゼントは善良なマロース（厳寒）じいさんが持って来てくれるものと信じている。

ソ連の人々は新年を迎えるにあたって自分や近しい人々に何を願うのか？

多分、世界中のすべての人と同じように、おもしろく、収入のいい仕事があるように、健康と無事を、子供たちの幸せな未来を願うのだろう。

だがこれらの願いを実現させるには、一つの共通の絶対条件がある——平和がどうしても必要だ。だからこそ、ソ連国内の新年を祝う最初の乾杯の音頭は、変わることなく、「世界に平和を！」なのだ。

ソ連の人々は言う——「新年おめでとう、平和でありますように！」



クレムリン大会宮殿で新年のヨールカ祭りを楽しむモスクワの子供たち

便利なシベリア経由航空路

燃料費が上がり、空輸の安全性が重視されている中で、日本と西欧諸国とを結ぶシベリア経由の空の便は、最短距離で、しかも途中に予備の空港が沢山あり、安全性確実とあって、今後も利用客が増えることは間違いない。

シベリア経由の航空路について、ボリス・パニューコフ・ソ連民間航空第一次官は、次のように語った（聞き手エブゲニー・スミルノフ本誌記者）。

この航空路が開設されて最初の1年半の一九六七―六八年に、日本からの、あるいは日本へのシベリア経由の航空便の利用客は約九〇〇〇人であったが、一九八〇年の利用客数は二〇万人の大台を超えた。あらゆる点からおして、今後乗客数がさらに増えることは確実だ。時間が節約でき（北回り線に比べて6―7時間も短い）、1回の飛行で何十tもの燃料の節約にもなって、乗客、航空会社の双方にメリットがあるから、当然であろう。

最新型大型旅客機の導入も、シベリア経由の貨客の増加に拍車をかけよう。例えば、いまシベリア経由の便には、日本航空とエール・フランスの（前者は週3便、後者は1便）ボーイング747型機が就航している。一九八三年4月1日からはSAS航空の大型旅客機DC10型が運航を開始する。ソ連のIL76型機による貨物コンテナの輸送量も増えている。一九八一年にソ連のアエロフロート（国営民間航空）はシベリア路線経由で二〇五六・三t、一九八二年1―8月に二一五四・三tの貨物を運んだ。

ハバロフスク空港

シベリア横断空路への大型機の大量導入にともなって、たえず近代化が進められている予備空港、とくにハバロフスク空港の役割は大きくなった。この空港は、地理的位置から見てシベリア横断航空路の主要な予備空港の一つであり、地形が着陸進入に好適であり、管制官の誘導指示が明確であることや、空港のサービスのよさなどで評判がよい。

先ごろ完工したハバロフスク空港の第2滑走路は、先端着陸設備をそなえ、空港の収容力を拡充した。現代の最も重い航空機の着陸を計算に入れた四〇〇〇×六〇mの滑走路のおかげで、シベリア横断航空路の飛行の安全性（緊急着陸のさいなどの）は高まり、また燃料の消費がふえて補充しなければならないひどい悪天候の時期にも、途中着陸できるようになった。

一九八二年末からこの空港では、管制官の作業能率や空港の収容能力、飛行の安全性を高める自動航空運行管理システム「スタート」が使われるほか、航空機の出発準備時間を著しく短縮する給油集中システムが、近く完成する。

一九八五年末までにハバロフスク空港には、空港ビルのほかに、毎時一五〇〇人の乗客を収容するターミナルが建設される。このターミナルには、四五〇人を収容する長時間待合客用のホールなどの設備が入る。

空港の拡張や設備の拡充にともなって、ハバロフスク空港は国内空輸でもますます重要な役割を果たしており、ことソ連のすべての大都市を結ぶ便の数は1日二〇〇以上にのぼっている。

ハバロフスク空港の日本、朝鮮民主主義人民共和国、東アジア諸国向けの国際輸送量も、年々増えている。一九八〇年にこの空港の国際セクションは四万二六〇〇人、一九八一年には八万人の乗客を扱った。



折り紙で日ソ親善

イルクーツク駐在本誌記者
ウラジーミル・ウラーソフ

ソ連対外友好文化交流団体連合会の招きで訪ソした全盲の折り紙作家加瀬三郎さん（57歳）は、10月1日から14日まで、ハバロフスク、イルクーツク、モスクワの小学校や美術学校など11ヵ所で折り紙講習会を開き、日ソ親善を深めた。

イルクーツクではソ日協会支部の青年クラブ〝ケンロクエン〟（兼六園）の会員のための講習会が開かれ、加瀬さんは折り紙の歴史を説明し、自分の折ったパンダ、クジャク、ハト、ツル、人形、日本の食器、家具、花やお面などを見せた。とくにお面はクラブ会員の気に入った。

そのあと会場の人々に色紙のセットが配られ、加瀬さんの指導で実際に折り紙づくりが始まる。キクの花、カメ、カエル、コウノトリ、イヌ、キツネなどが次々に出来上がっていく……

青年クラブの会員はあとでほかの希望者に教えるために、折り紙の折り方を熱心に覚え込んだ。

加瀬さんは講習のあと、日本の有名な折り紙作家の笠原邦彦、荒木ちよ、吉沢章3氏の教本と自分の作品を講習者たちに贈った。

イルクーツクの〝ケンロクエン〟クラブの講習会で折り紙の歴史を語る加瀬さん

なお加瀬さんはピオネール宮殿、美術学校、州盲人協会でも、折り紙講習を行った。

◇ ◇ ◇

加瀬さんは本誌記者に次のように語った。

「私が失明したのは13歳のときで、絵や芸術がとても好きでしたから、そのときはお先真っ暗でした。折り紙に真剣に取り組むようになったのは29歳からです。何分一枚の紙と夢さえあれば、自分の手で創作の喜びを感じとることができるんですから、生きがいです。

折り紙はとてもヒューマンな芸術です。ただの色紙で、おとぎ話の夢の世界、私たちの希望の世界をつくれるんです。それで、子供たちに好かれるんでしょうね…… ツルの折り紙千羽ヅルといえば、広島の佐々木さだ子さんの悲しい運命が思い出されます。まさに千羽ヅルは、平和・反核のシンボルなのです。日本の折り紙作家は平和運動に熱心です。ソ連にきて、ソ連の人が世界のすべての人々と平和に暮らしたいと願っていることをひしひしと感じました。ここの人たちが日本の平和の芸術の折り紙に興味をもったのも、平和を願っているからでしょう。

それからもう一つ。私は日本盲人会連合の理事をやっている関係で、ソ連の盲人の生活を知りたいと思っていましたが、イルクーツクで盲人が働いている電気器具組立工場に行って、盲人の労働者の労働、日常生活、休息の条件を教えてもらいました。

私が思っていたとおり、ソ連政府は盲人がちゃんと一人前の市民として暮らせるよう、全力を尽くしているようです。盲人が普通学校や大学で学ぶことができるのには驚きました。自分が社会の落ちこぼれだなどと感じないことは、どの身障者にとっても大事なことです。

盲人の企業が取引税を免除されており、また盲人の就業者が所得税を払わなくてよい、とイルクーツクで聞いてびっくりしました。全ロシア盲人協会イルクーツク支部長のワレンチン・ガブリーロフさんの話では、近く盲人の電話交換手、仕上げ工、旋盤工が養成されるそうで、労災防止の特別の器具も開発されたということです。このような専門職の盲人は、普通の企業で働くことができるでしょう。私たち日本人にとってはこれは見果てぬ夢です。家賃が安いことやサナトリウム、休息の家の無料の利用券がもらえることもうらやましい限りです」

ロシア語のページ

А Б В

NHKテレビ ロシア語講座から（12月末―1月前半）

テレビでロシア語を学ぼう！

1978年初めから5年間にわたって連載した「旅行者用ロシア語会話シリーズ」が前号で終わりましたので、この号からはNHK教育テレビ・ロシア語講座のご協力を得て、同講座のテキストから、主な表現や単語その他を紹介させていただくことにします。これまでのシリーズ同様、ロシア語の単語や文にはカナで一応の発音を表記しますが、これからは是非テレビの放送で実際の発音に親しんで下さい。

冬期編成　（テレビ12月25、27、29、30日放送）

ここでは、これまで細切れに放送してきたロケ・スケッチとアニメーションをまとめてご覧になれます。ひとつひとつの単語にこだわるよりは、生のロシア語をシャワーのように浴びるつもりでお楽しみ下さい。

なお、このシリーズでは次のようなやさしい表現もたくさん入っています。

Что э́то? (シトー エータ)（これは何ですか。）**Где вы живёте?** (グヂェー ヴィ ジュィヴョーチィ)（どちらにお住いですか。）**О́чень вку́сно.** (オーチン ブクースナ)（とてもおいしい。）**Как вас зову́т?** (カーク ヴァズ ザヴートゥ)（お名前は。）

きょうの表現　（テレビ1月8、10日放送）

Ско́лько вам лет? (スコーリカ ヴァーム リェートゥ)

（お年は）お幾つですか？

〔説明〕

⊙ **ско́лько** は「いくら」「どのぐらい」「いくつ」の意味。

⊙ **вам** は直訳すると「あなたに」の意。**вы**（あなた）という人称代名詞の変化形（与格）。

⊙ **лет** は何歳の「歳」にあたる。(「〜歳です」という年令の表現については詳しくは番組とテキストをご覧下さい。)

☆以上を直訳してみると〝あなたに年は何歳ですか〟ということになりますが、これが「お幾つですか」のロシア語の表現法です。

きょうの単語　（テレビ1月12、13日放送）

① **ша́хматы** (シャーフマトゥィ)　チェス

② **ша́шки** (シャーシキィ)　チェッカー

③ **ка́рты** (カールトゥィ)　トランプ

④ **лото́** (ロトー)　ロットー（ビンゴ）

⑤ **домино́** (ダミノー)　ドミノ

⑥ **бильа́рд** (ビリヤールトゥ)　ビリヤード

きょうの表現　（テレビ1月15、17日放送）

Мне ску́чно сиде́ть до́ма. (ムニェー スクーシナ シヂェーチ ドーマ)

家にいるのは退屈だ。

〔説明〕

⊙ **мне** は「私には、私にとっては」の意。

⊙ **ску́чно** の **ч** は〔**ш**〕と発音される。

⊙ **до́ма**「家で、家に」の意味。

⊙ **сиде́ть**「座っている」(ここでは「いる」こと)。

☆「誰々にとって〜することは退屈だ」というような表現では、この「誰々にとって」という意味上の主体は与格で示される。

мне (ムニェー)	私に(とって)	**тебе** (チィビェー)	君に(とって)
ему (イムー)	彼に(とって)	**ей** (イェーイ)	彼女に(とって)
нам (ナーム)	私たちに(とって)	**вам** (ヴァーム)	あなた、あなたがた(にとって)
им (イーム)	彼らに(とって)		

（例文）

※ **Мне о́чень прия́тно с ва́ми познако́миться.** (ムニェー オーチン プリヤートゥナ スヴァーミィ パズナコーミッツァ)

お知り合いになれて大変うれしいです。

NHKテレビ・ロシア語講座のテキストは、最寄りの書店でお求め下さい。書店にない場合は、日本放送出版協会（郵便番号150 東京都渋谷区宇田川町41―1、電話03・464・7311）へお問い合わせ下さい。

今日のソ連邦
一九八三年1月1日号
昭和五十四年六月二日第三種郵便物認可　発行人　加藤宣幸
編集　ソ連大使館広報部（郵便番号141・東京都品川区東五反田3－9－13・電話03－447－3536）
定価　一五〇円
（購読料は会費に含まれる）